仙台市文化財調査報告書第372集

上野遺跡他

発掘調査報告書

上野遺跡第9次・大野田古墳群第16次
愛宕山横穴墓群第5次・住吉遺跡第2次・沖野城跡第5次

2010年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第 372 集

上　野　遺　跡他

発 掘 調 査 報 告 書

上野遺跡第９次・大野田古墳群第１６次
愛宕山横穴墓群第５次・住吉遺跡第２次・沖野城跡第５次

2010 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守れてきた文化遺産（文化財）の存在が挙げられます。仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと受継いでいくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成20年度に実施した上野遺跡、平成21年度に発掘調査を実施した大野田古墳群、愛宕山横穴墓群、住吉遺跡、沖野城跡の調査結果を収録しております。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成22年3月

仙台市教育委員会

教育長　荒井　崇

例　言

1　本書は、仙台市教育委員会により、平成 20 年度に実施した仙台市建設局による下水管敷設工事に伴う上野遺跡第9次、および平成21年度に実施した仙台市子ども未来局による保育所増築工事に伴う大野田古墳群第16次、民間開発事業に伴う愛宕山横穴墓群第5次、住吉遺跡第2次、沖野城跡第5次の発掘調査報告書の合本である。調査と報告書作成は事業者負担により実施した。

2　本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議のもとに森田義史がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　　査　主濱　光朗：上野遺跡第9次　　主　　事　小泉　博明：沖野城跡第5次
主　　事　森田　義史：住吉遺跡第2次　　主　　事　大久保弥生：大野田古墳群16次
文化財教諭　佐々木　匠：愛宕山横穴墓群第5次　　文化財教諭　菊地　貴博：愛宕山横穴墓群第5次
文化財教諭　吉野　信　：沖野城跡第5次　　臨時職員　千葉　恭彦：上野遺跡第9次

3　遺物実測やトレース等の整理作業は、主に向田文化財整理収蔵室の作業員が行った。

4　本書に掲載した石器の石材鑑定は仙台市科学館斎藤弘明、西城光洋両指導主事にお願いした。

5　本書にかかわる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

6　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠した。

7　本書中で使用した地形図は国土地理院発行の 1：25000『仙台市南西部・南東部・北東部・北西部』の一部を使用している。

8　遺構実測図中の方位は磁北で示している。仙台市における磁北は真北に対して西偏約 7°20′である。

9　遺構実測図中の標高値は、海抜高度を示している。

10　遺物図版の縮尺は、任意とする。

11　遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SK：土坑　SE：井戸跡
SL：土塁跡　P：ピット　SX：性格不明遺構

12　遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ）
E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品
L：木製品・杭材　N：金属製品　P：土製品

13　ピット内の網かけは、柱痕跡の位置と範囲を示している。

14　土師器実測図における網かけは、黒色処理されていることを示している。

15　遺物観察表のカッコ内の法量は、残存値・推定値を示している。

16　本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田ａ火山灰（Tｂ－a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。

山田一郎・庄子貞雄 1980「宮城県に分布する灰白色火山灰」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』
仙台市教育委員会 2000『沼向遺跡第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集
小口雅史 2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田ａと白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目　次

序文
例言
目次
Ⅰ　上野遺跡第９次発掘調査報告
1　調査要項・・1
2　調査に至る経過と調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3　遺跡の位置と環境・・1
4　基本層序・・4
5　発見遺構と出土遺物・・4
6　まとめ・・・9

Ⅱ　大野田古墳群第16次発掘調査報告
1　調査要項・・・24
2　調査に至る経過と調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
3　遺跡の位置と環境・・25
4　基本層序・・25
5　発見遺構と出土遺物・・・26
6　まとめ・・・31

Ⅲ　愛宕山横穴墓群B･C地点第５次発掘調査報告
1　調査要項・・・34
2　調査に至る経過と調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
3　遺跡の位置と環境・・35
4　基本層序・・36
5　発見遺構と出土遺物・・・37
6　まとめ・・・39

Ⅳ　住吉遺跡第２次発掘調査報告
1　調査要項・・・43
2　調査に至る経過と調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
3　遺跡の位置と環境・・44
4　基本層序・・46
5　発見遺構と出土遺物・・・46
6　まとめ・・・46

V　沖野城跡第５次発掘調査報告

1　調査要項・・50
2　調査に至る経過と調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
3　遺跡の位置と環境・・51
4　基本層序・・52
5　発見遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
6　まとめ・・・56

Ⅰ　上野遺跡第９次調査報告

１　調査要項

遺　跡　名	上野遺跡（宮城県登録番号 01002）
調査地点	仙台市太白区富田字上野中 11－8 地先他
調査期間	平成 20 年 10 月 14 日～11 月 14 日
調査対象面積	175 ㎡
調査面積	約 150 ㎡
調査原因	下水管敷設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事　加藤隆則　　文化財教諭　佐藤正弥

２　調査に至る経過と調査方法

平成21年4月25日付で、仙台市下水道管理者仙台市長梅原克彦より、仙台市太白区富田地区の下水管敷設工事にかかる発掘通知(H20 建管建第 108－207－2 号)が提出された。そのうち上野遺跡にかかる地域では遺物の散布が見られる部分と以前の調査で遺構・遺物が検出された地区と重複する部分が含まれていることから、仙台市教育委員会では仙台市建設局下水道管路建設課と協議を行い、確認調査を実施し、遺構が検出された場合は本調査に移行することとした(H20 教生文 185－1 号で伝達)。

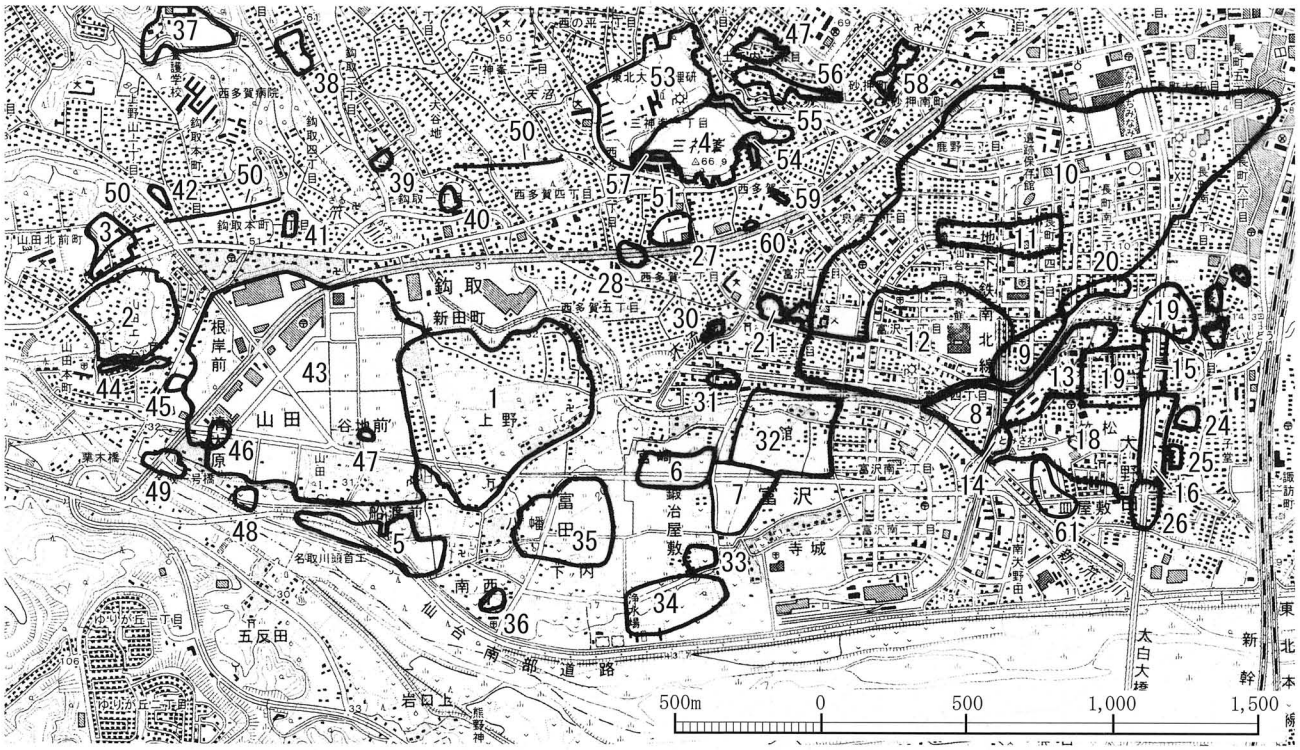
調査は既存管埋設状況確認のための試掘によって、発掘調査が必要と考えられた範囲を調査区とし、調査区の幅は工事の掘削幅である 1m として東西 2 箇所に設定した。東側調査区は昭和 62 年度に実施した第 4 次調査地点の南側の隣接地に当たり、北側を走る市道の南縁から 30m とした。西側調査区は昭和 58 年度に実施した第 3 次調査地点と重複する部分があり、都市計画道路「富田富沢線」南縁から 120m とした。調査は工事の進捗の関係から、東側調査区を 10 月 14 日から開始し、西側調査区は 10 月 23 日から開始した。調査は重機によって道路の舗装部分と表土を除去し、以下は人力により掘削を行った。

其々の調査区で遺構が検出されたことから、本調査に移行し、東側調査区は 10 月 21 日、西側調査区は 11 月 14 日に調査を終了した。

３　遺跡の位置と環境

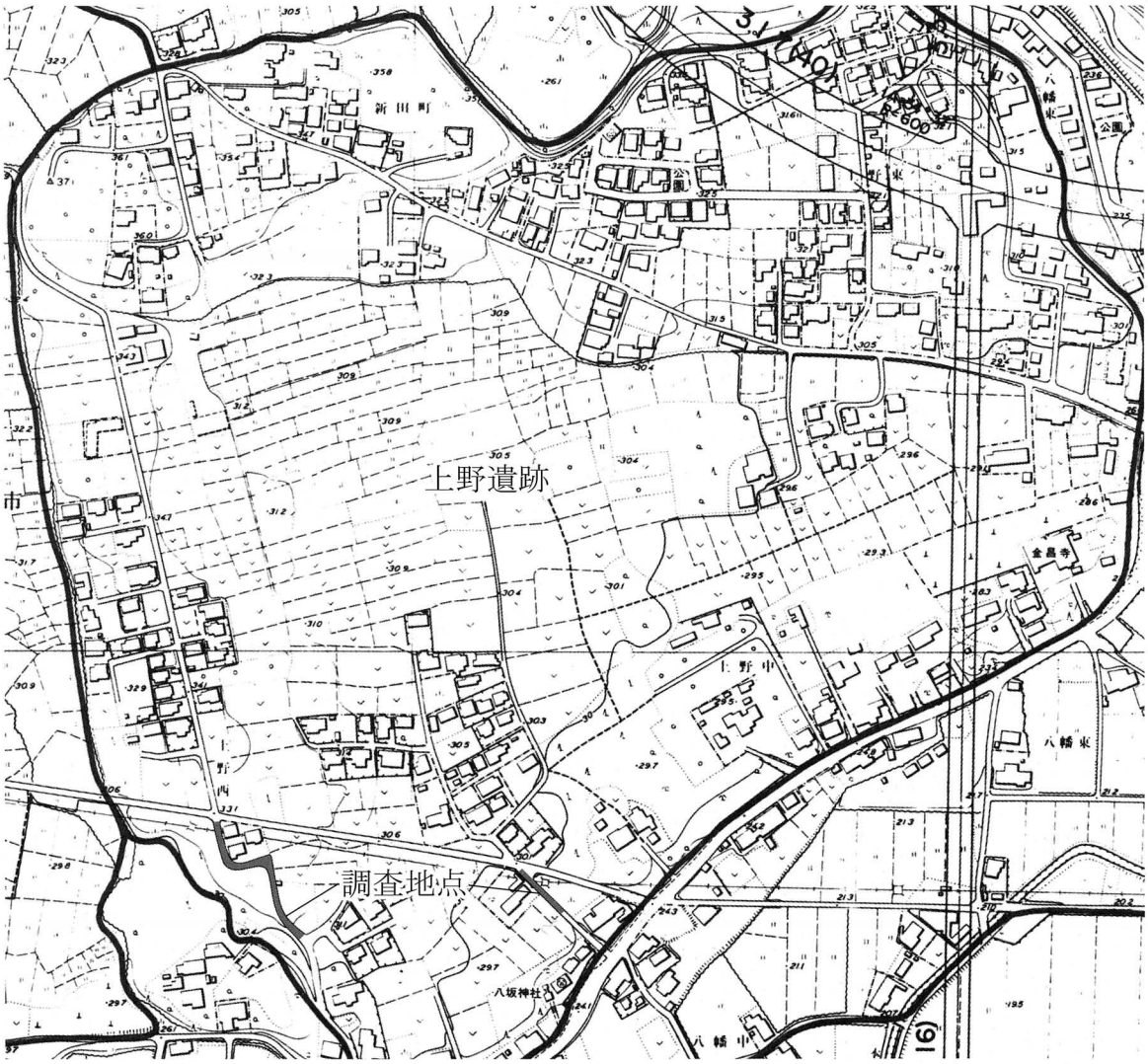
上野遺跡はＪＲ長町駅の西約3.5km、地下鉄富沢駅の西約2kmの仙台市太白区富田字上野地内に所在している。周辺の地形は北側に青葉山丘陵が西から東へ向かって伸び、南側には東流する名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡は名取川の左岸にあたり、青葉山丘陵と高館丘陵の間に広がる標高 25～40mの通称「名取台地」と称される河岸段丘の東端に位置する。遺跡は周囲との比高差 4～8m、標高約 30m の独立した河岸段丘上に広がり、面積は約 30 万㎡に及ぶ。

仙台市南西部の名取川流域は各時代の遺跡が数多く分布する地域であり、本遺跡も大正時代から知られていた仙台市域を代表する縄文時代の遺跡である。これまで８次に渡る調査が行われ、縄文時代中期の大規模な集落跡の内容が明らかになりつつある。周辺の遺跡では、本遺跡の西から北にかけての丘陵上に「仙台市縄文の森広場」として整備された山田上ノ台遺跡や、北前遺跡、三神峯遺跡等がある。南から東にかけては、名取川から笊川に沿って船渡前遺跡、鍛冶屋敷Ａ遺跡、鍛冶屋敷前遺跡、下ノ内遺跡、下ノ内浦遺跡、富沢遺跡等多くの遺跡が確認されている。

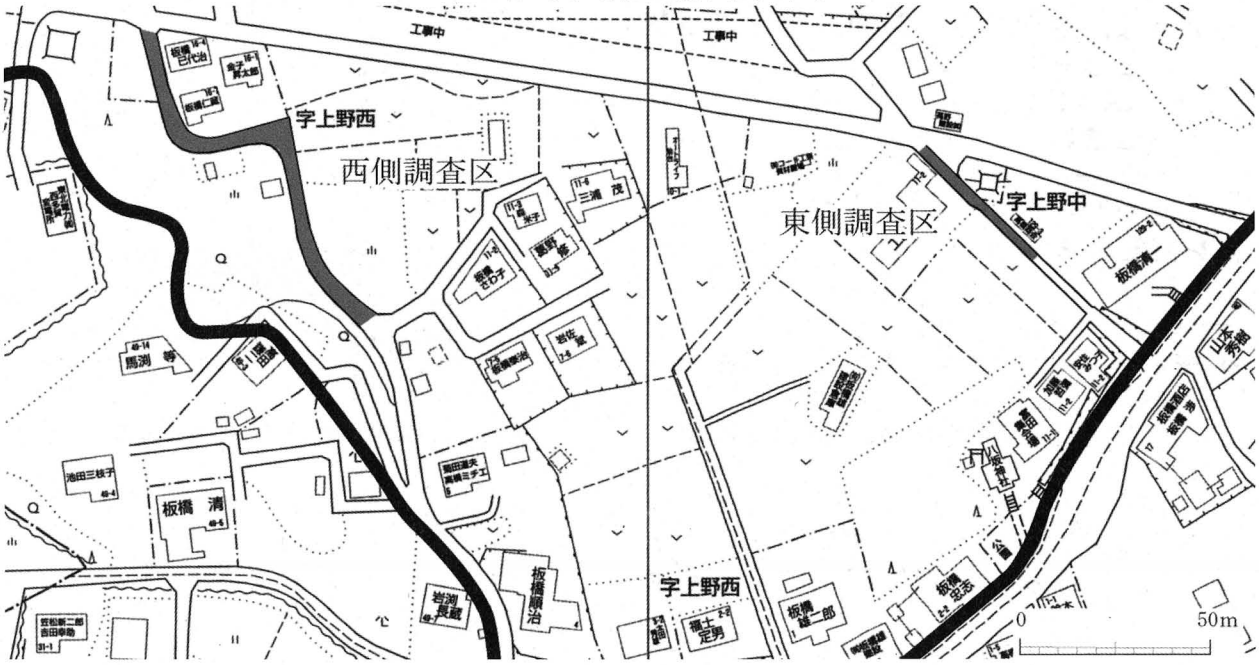


番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	上野遺跡	集落	丘陵	縄文、奈良、平安	32	富沢館跡	城館	自然堤防	中世
2	山田上ノ台遺跡	集落	段丘	旧石器、縄文、奈良、平安、近世	33	鍛冶屋敷Ｂ遺跡	散布地	自然堤防	縄文、奈良、平安
3	北前遺跡	集落	段丘	縄文、平安、近世	34	六本松遺跡	集落	自然堤防	奈良、平安
4	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文、平安	35	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安
5	船渡前遺跡	包含地	段丘	縄文、弥生、奈良、平安	36	富田南西遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
6	鍛冶屋敷Ａ遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安	37	御堂平遺跡	集落	谷底平野	縄文、平安、中世
7	鍛冶屋敷前遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安	38	紙漉山遺跡	散布地	丘陵	縄文
8	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文、弥生、中世	39	後田遺跡	散布地	丘陵斜面	奈良、平安
9	下ノ内浦遺跡	集落、水田	自然堤防	縄文、弥生、中世	40	八幡遺跡	散布地	丘陵麓	古墳、平安
10	富沢遺跡	包含地、水田	後背湿地	旧石器～近世	41	町遺跡	散布地	丘陵麓	縄文、古墳、平安
11	泉崎浦遺跡	集落、水田、墓域	自然堤防・後背湿地	縄文～平安、近世	42	上野山遺跡	散布地	丘陵	縄文
12	山口遺跡	集落、水田	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	43	山田条理遺跡	水田、屋敷	段丘	縄文、平安、近世、近代
13	六反田遺跡	集落	自然堤防	縄文～平安、近世	44	汚田通Ａ遺跡	散布地	段丘	丘陵
14	伊古田遺跡	集落	自然堤防	縄文、古墳～平安	45	汚田通Ｂ遺跡	散布地	段丘	平安
15	大野田遺跡	集落、祭祀	自然堤防	縄文～平安	46	竹ノ内前遺跡	散布地	段丘	奈良、平安
16	王ノ壇遺跡	集落、屋敷	自然堤防	縄文～中世	47	谷地前遺跡	散布地	段丘	平安
17	袋前遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安	48	清太原東遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
18	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	49	清太原西遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
19	元袋遺跡	集落、水田	自然堤防	縄文、奈良～近世	50	杉土手	丘陵	丘陵、段丘	近世
20	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	51	富沢窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳、奈良、平安
21	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	52	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳
22	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	53	芦ノ口遺跡	集落	丘陵	縄文、弥生、平安
23	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	54	金山窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳
24	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	55	土手内横穴Ａ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末
25	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳	56	土手内窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳、奈良
26	皿屋敷遺跡	集落、屋敷	自然堤防	奈良、平安、中世		土手内横穴B地点	横穴墓		
27	原遺跡	散布地	丘陵	弥生、古墳、平安	57	土手内遺跡	集落	丘陵	縄文～中世
28	西台窯跡	窯跡	丘陵	奈良、平安	58	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵	奈良、平安
29	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	59	裏町東遺跡	散布地	丘陵	平安
30	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安	60	原東遺跡	散布地	丘陵	弥生～平安
31	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	61	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図　調査地点位置図（1）



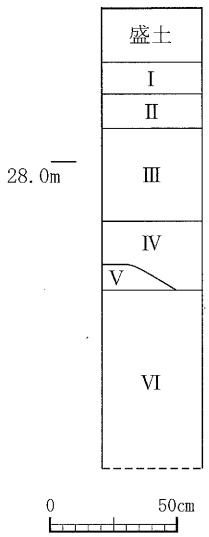
第３図　調査地点位置図（2）

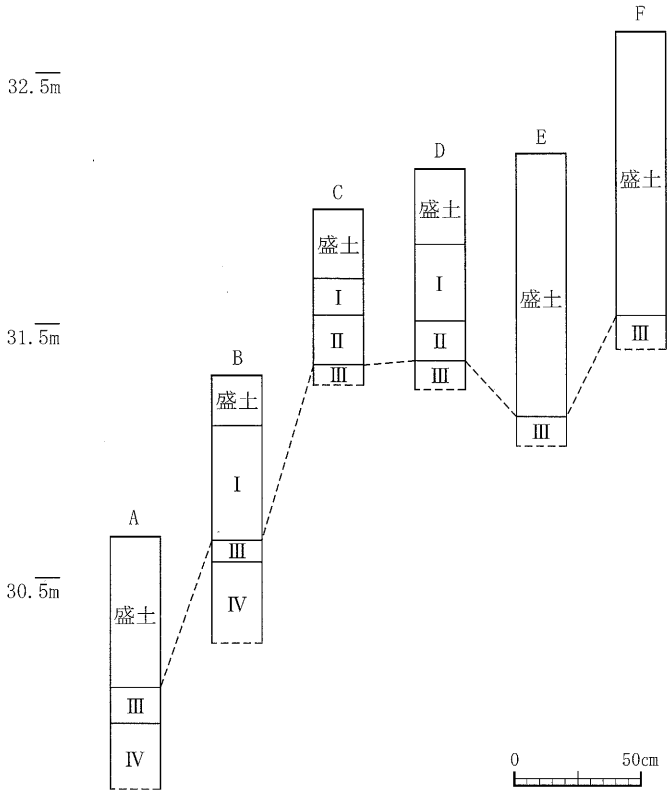
4　基本層序

東側調査区と西側調査区が離れており、層相に違いが見られることからそれぞれについて記述する。

東側調査区：舗装路面下に６層確認した。Ⅰ層は表土で暗褐色砂質シルト層である。Ⅱ層は褐色シルト質砂層でこの層の上面が遺構検出面である。Ⅲ層は暗褐色細粒砂層、Ⅳ層は褐色粘土層、Ⅴ層は黄褐色シルト質粘土層、Ⅵ層は砂礫層である。

西側調査区：舗装路面下に大別４層、細別７層確認した。Ⅰ層は旧耕作土である。黒褐色砂質シルト層で３層に細別され、多量の遺物が含まれている。Ⅱ層は暗褐色砂質シルト層で、遺物包含層である。調査区北側のみに分布し、南側ではⅠ層直下でⅢ層が検出される。Ⅲ層は暗褐色砂質シルト層で、漸移層である。この層の上面が遺構検出面である。Ⅳ層は砂礫層である。





基本	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR3/2暗褐色	砂質シルト	
Ⅱ	10YR4/6褐色	シルト質砂	遺構検出面
Ⅲ	7.5YR3/4暗褐色	細粒砂	下位はⅣ層が部分的に入る。
Ⅳ	10YR4/6褐色	粘土	
Ⅴ	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む。
Ⅵ		礫層	φ20～40cmの礫、粗粒砂を極多量に含む。

第４図　東側調査区土層柱状図・土層注記表

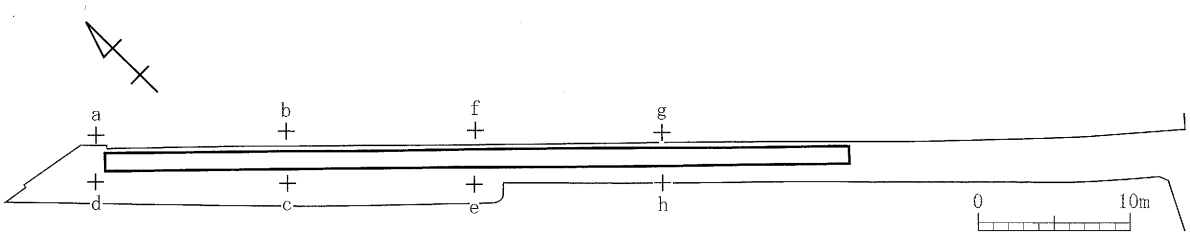
基本	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	φ5～10mmの礫を少量、遺物を多量に含む。
Ⅱ	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	遺物を少量含む。
Ⅲ	10YR3/3暗褐色	シルト	漸移層。白色粒子を少量含む。遺構検出面
Ⅳ	7.5YR3/4暗褐色	砂礫層	φ5～200mmの礫を極多量に含む。

第５図　西側調査区土層柱状図・土層注記表

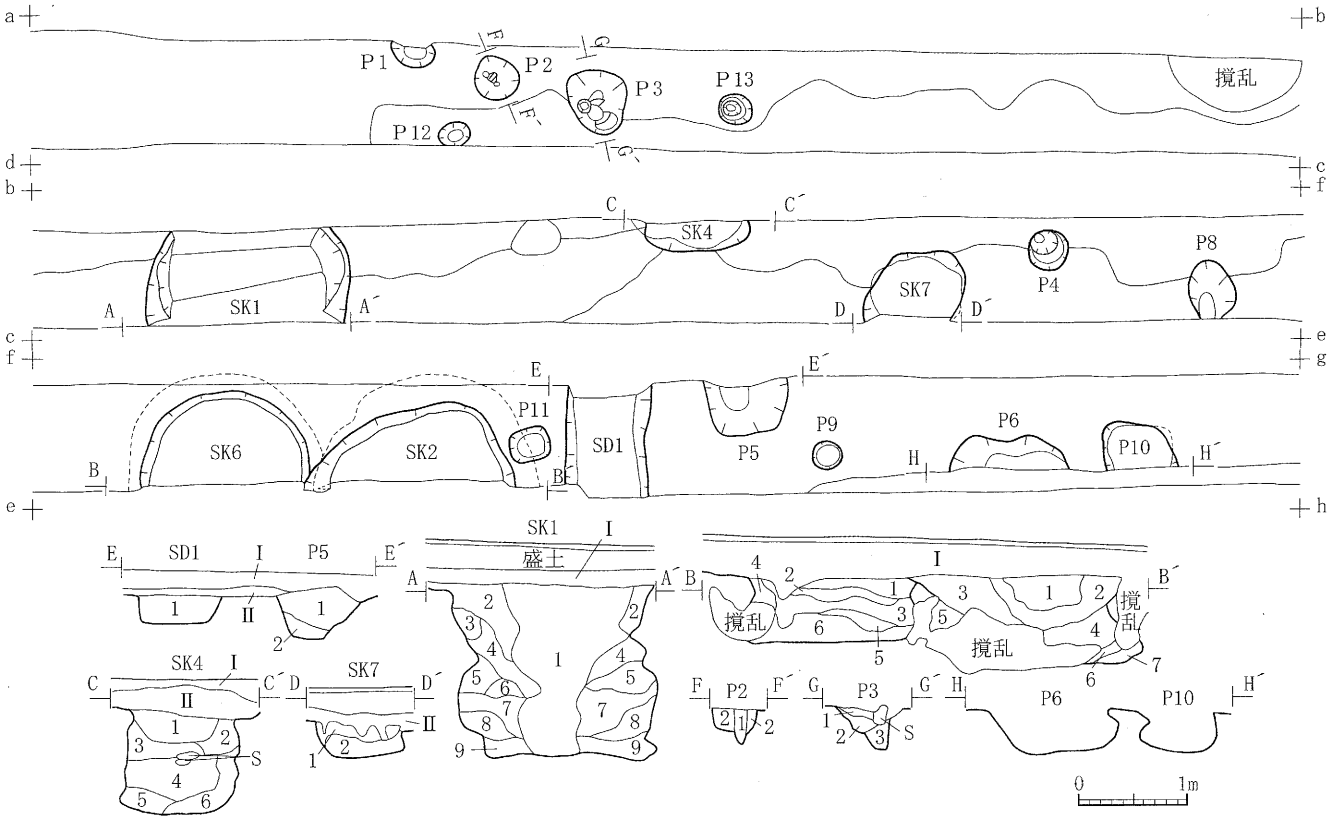
5　発見遺構と出土遺物

(1) 東側調査区（東区）

Ⅱ層上面で土坑５基、溝跡１条、ピット12基を検出した。遺物は縄文土器片・石器が平箱２箱程出土した。



第６図　東側調査区配置図



遺構名	堆積土	土色	土性	備考
SD1	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックを極多量に含む。
SK1	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	φ5cmの礫を極多量に含む。
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	褐色砂質シルトを極多量、φ1cmの礫を少量含む。
	3	10YR4/4褐色	シルト質砂	Ⅲ層土層を極多量に含む。
	4	10YR3/3暗褐色	シルト質砂	炭化物粒、Ⅲ層土ブロック、礫を少量含む。
	5	10YR4/6褐色	シルト質砂	Ⅲ層土崩落土
	6	10YR3/4暗褐色	シルト質砂	炭化物粒を少量含む。
	7	10YR3/4暗褐色	シルト質砂	褐色シルト質砂を多量、φ1cmの礫を少量含む。
	8	10YR4/4褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土崩落土。
	9	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土ブロックを極多量に含む。
SK2	1	10YR2/2黒褐色	砂質シルト	上位にⅢ層土ブロックを極多量、下位に炭化物粒をやや多量に含む。
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含む。
	3	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量含む。
	4	10YR4/6褐色	砂質シルト	
	5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
	6	10YR4/6褐色	砂質シルト	
	7	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	
SK4	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量、炭化物粒を微量含む。
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含む。
SK4	3	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土粒を極多量、Ⅲ層土ブロックを多量に含む。
	4	10YR4/6褐色	粘土質シルト	焼土粒、炭化物粒を微量、暗褐色砂質シルトブロックを少量含む。
	5	10YR4/6褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量、暗褐色砂質シルトブロックを極多量に含む。
	6	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土粒を極多量に含む。Ⅲ層土ブロックを多量に含む。
SK6	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックを多量に含む。炭化物粒を微量含む。
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	酸化鉄ブロックを極多量に含む。
	3	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックを多量に含む。
	4	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	炭化物粒を微量含む。
	5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックを極多量に含む。
	6	10YR4/4褐色	砂質シルト	
SK7	1	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックを少量含む。
	2	10YR4/4褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。
P1	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含む。
P3	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土粒を微量、炭化物粒を微量含む。
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロックをやや多量に含む。
	3	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	ローム粒を極多量に含む。
P5	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層土ブロック、炭化物粒を少量含む。
	2	10YR4/6褐色	砂質シルト	上位に1層ブロックを多量に含む。

第７図　東側調査区遺構平面図・断面図

1) 土坑

SK１土坑　調査区の北西寄りに位置し、南北ともに調査区外に延びる。全体の規模は不明であるが、平面形は検出部分から直径150 cmの円形を基調としたものと考えられる。検出面からの深さは130 cmで、壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は９層に分けられるが、１層は15 cm程度の礫を多量に含むしまりの強い暗褐色砂質シルト層で、遺構中央の上面から底面まで堆積している。遺構が埋まった後に掘り直したものである可能性も考えられる。５層は壁崩落土である。底面は平坦であるが、中央部分がやや高くなっている。本来壁はオーバーハング

し、フラスコ状の土坑であったと考えられる。遺物は堆積土中から縄文土器片約120点、剥片石器4点が出土し、縄文土器片4点(第11図1～4)、石鏃1点(第11図7)を図示した。

SK2土坑　調査区の南東寄りに位置し、南半部は調査区外に延びる。SK6土坑と重複関係にあり、本遺構が新しい。全体の規模は不明であるが、平面形は検出部分から170cm以上×60cm以上の楕円形を基調としたものと考えられる。確認面からの深さは70cmで、調査区壁面付近で撹乱を受けているが、壁は底面からオーバーハングして立ち上がり、堆積土は7層に分けられる。底面は平坦で、底面の規模は180cm以上×80cm以上である。その形態からフラスコ状の土坑であると考えられる。遺物は堆積土中より縄文土器片約200点、剥片石器9点、礫石器11点が出土し、縄文土器片5点、剥片石器1点、礫石器1点を図示(第11図9～14)した。

SK4土坑　調査区中央に位置し、北半部は調査区外に延びる。全体の規模は不明であるが、平面形は検出部分から80cm以上×25cm以上の円形を基調としたものと考えられる。確認面からの深さは80cmで、壁は底面から急角度で立ち上がり、堆積土は6層に分けられる。底面は平坦で、底面の規模は85cm以上×20cm以上である。本来壁はオーバーハングし、フラスコ状の土坑であると考えられる。遺物は堆積土中から縄文土器片24点、磨製石斧が1点出土し、磨製石斧1点(第12図2)を図示した。

SK6土坑　調査区西寄りに位置し、南半部は調査区外に延びる。SK2土坑と重複関係にあり、本遺構が古い。調査区南壁付近で撹乱により削平された部分もあり、全体の規模は不明であるが、平面形は検出部分から直径130cmの円形になるものと考えられる。確認面からの深さは50cmで、壁は底面からオーバーハングして立ち上がり、堆積土は6層に分けられる。底面は平坦で、底面の規模は直径150cmである。その形態からフラスコ状の土坑であると考えられる。遺物は堆積土中から縄文土器片約50点、剥片石器2点、礫石器1点が出土し、縄文土器片2点(第12図3、4)を図示した。

SK7土坑　調査区中央西よりに位置し、南半部は調査区外に延びる。全体の規模は不明であるが、平面形は検出部分から75cm×55cm以上の楕円形を基調としたものと考えられる。確認面からの深さは40cmで、壁は底面から一部オーバーハングして立ち上がり、堆積土は2層に分けられる。底面は平坦であるが、やや東へ傾斜している。その形態からフラスコ状の土坑であると考えられる。遺物は堆積土中から縄文土器片が数点出土したのみである。

2)溝跡

SD1溝跡　調査区の南東寄りに位置し、調査区を横断し南北ともに調査区外に延びる。検出した長さは90cm、幅60～65cm、深さ20cmで、調査区内での方向はN-45°-Eである。壁は底面からやや急角度で直線的に立ち上がる。堆積土は暗褐色砂質シルトの単層である。底面は平坦で、僅かに西に傾斜している。遺物は堆積土中より縄文土器片8点、剥片石器1点が出土した。

3)ピット

調査区全域で13基のピットを検出した。P2、P3で柱痕跡を確認したが、他のピットでは確認されなかった。調査面積が狭小であることから、柱列や建物跡等の組み合わせは不明である。また、P6やP10などのように比較的規模が大きく、堆積土の状況も土坑と類似しているものがある。

ピットから出土した遺物は縄文土器片(第12図7)、剥片石器(第12図6)がある。

東側調査区ピット計測表　　長軸×短軸×深さ　単位:cm　( )内は残存値

No.	規模	No.	規模	No.	規模
1	36×(16)×22	4	31×30×35	10	56×(34)×32
2	38×35×30	5	66×(40)×34	11	32×26×24
	柱痕 13×14×30	6	(102)×(25)×(36)	12	25×18×20
3	50×45×36	8	46×35×32	13	25×24×18
	柱痕 10×12×36	9	24×22×10		

(2)西側調査区(西区)

調査区の半分以上の範囲が市道「十文字線」整備工事及びそれに伴う第3次調査により削平されていた。Ⅲ層上面で土坑2基、焼け面1箇所、ピット54基を検出した。遺物は縄文土器片、石器が平箱8箱程出土した。第3次調査で検出された竪穴住居跡は確認できなかった。また、Ⅱ層中で埋設土器と考えられる土器を検出したが、掘り方は確認できなかった。

1）土坑

SK１土坑　調査区中央北寄りに位置し、西側は調査区外に延びる。全体の規模は不明であるが、平面形は90 cm以上×53 cm以上の隅丸長方形を基調としたものと考えられる。確認面からの深さは60 cmで、壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は黒褐色から褐色の砂質シルト層で、７層に分けられる。底面の中央部が一段低くなっている。遺物は堆積土中から縄文土器片35点、土製品２点、剥片石器６点が出土しており、土製品２点(第11図5、6)を図示した。

SK２土坑　調査区中央北側に位置し、東側は調査区外に延びる。全体の規模は不明であるが、平面形は73 cm以上×60 cmの楕円形を基調としたものと考えられる。確認面からの深さは24 cmで、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色砂質シルトの単層である。底面には細かい凸凹がある。遺物は出土していない。

2）焼け面

調査区中央に位置し、西側は撹乱のために削平され、東側は調査区外に延びる。平面的な掘り込みは確認されず、南北72 cmの焼け面を確認したのみである。断面の観察で皿状に最大５cmの厚さまで火熱の影響を受け、赤変していることが確認された。遺物は出土していない。

3）ピット

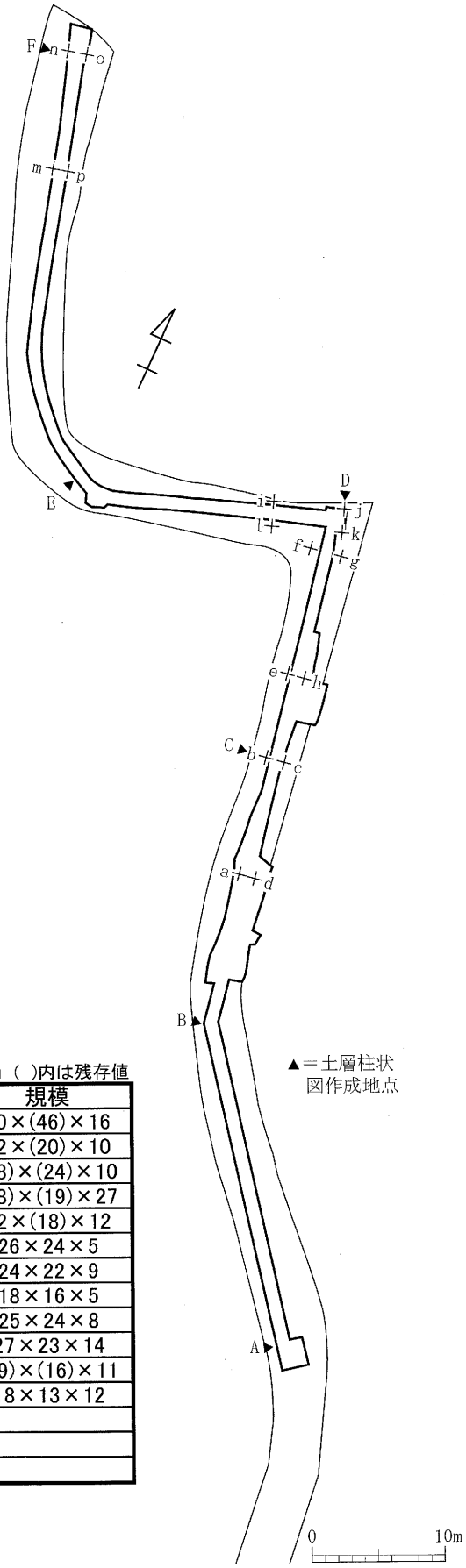
調査区の南側では見られないが、中央部南寄り以北で54基検出した。中央部に集中的にピットが分布する。柱痕跡が確認できるピットはないが、この部分のピットには規模が大きく、深い物が多い。また、堆積土も単層のものだけではなく人為的に埋められているものも見られ、第３次調査で検出された竪穴住居跡の柱穴の可能性があるものもある。縄文土器が出土しており、縄文時代のものであると思われる。一方調査区北側のピットはいずれも単層で浅く、遺物も出土しないことから、遺構ではないと考えられる。

西側調査区ピット計測表　　長軸×短軸×深さ　単位:cm（ ）内は残存値

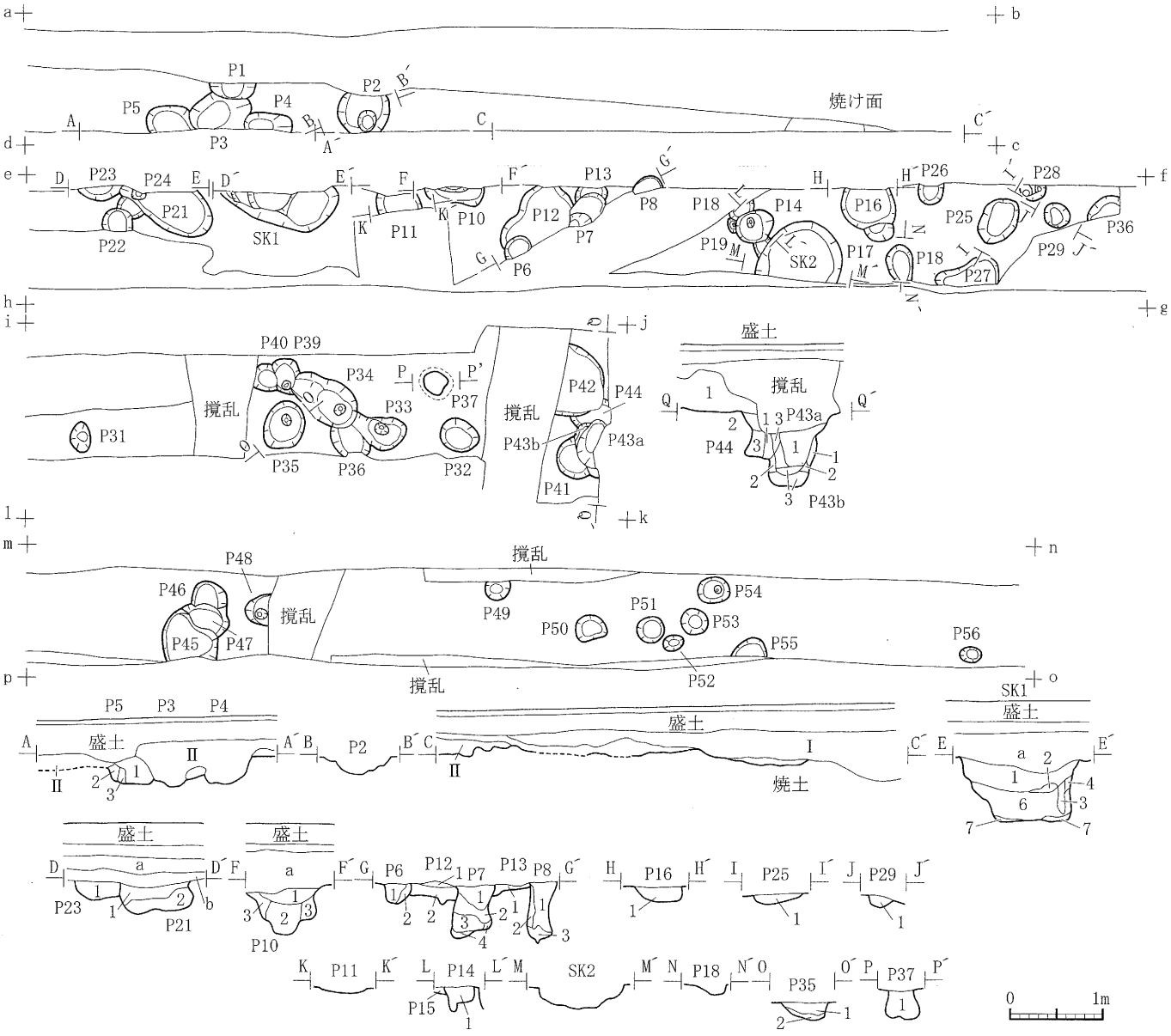
No.	規模	No.	規模	No.	規模	No.	規模
1	(42)×(16)×26	16	48×(38)×14	31	29×20×11	45	50×(46)×16
2	50×(34)×16	17	(26)×(16)×15	32	37×32×16	46	32×(20)×10
3	(60)×42×42	18	(34)×(22)×9	33	35×33×31	47	(38)×(24)×10
4	(50)×(14)×41	19	(13)×(8)×17	34	(44)×40×26	48	(28)×(19)×27
5	(33)×(24)×26	20	(20)×(14)×－	35	46×36×15	49	22×(18)×12
6	26×(16)×28	21	(86)×(48)×29	36	(42)×(28)×18	50	26×24×5
7	(38)×(18)×50	22	26×20×13	37	22×21×27	51	24×22×9
8	(26)×12×27	23	(43)×(14)×18	38	(28)×(20)×13	52	18×16×5
9	(10)×(5)×11	24	(24)×(12)×8	39	32×(28)×21	53	25×24×8
10	54×(16)×44	25	45×34×9	40	24×(20)×16	54	27×23×14
11	(38)×(22)×5	26	(26)×20×16	41	40×(20)×24	55	(29)×(16)×11
12	(77)×(46)×23	27	57×(32)×6	42	(64)×(32)×35	56	18×13×12
13	(28)×(16)×10	28	(22)×(16)×10	43a	(44)×(26)×9		
14	36×30×23	29	26×24×11	43b	(28)×(6)×31		
15	(25)×(10)×5	30	(36)×(22)×24	44	(36)×(18)×44		

4）埋設土器

調査区中央北寄りに位置し、Ⅱ層除去中に検出した。土器は口縁部を北側、底部を南側に向けて横倒しの状態で検出された。検出したレベルで



第８図　西側調査区配置図

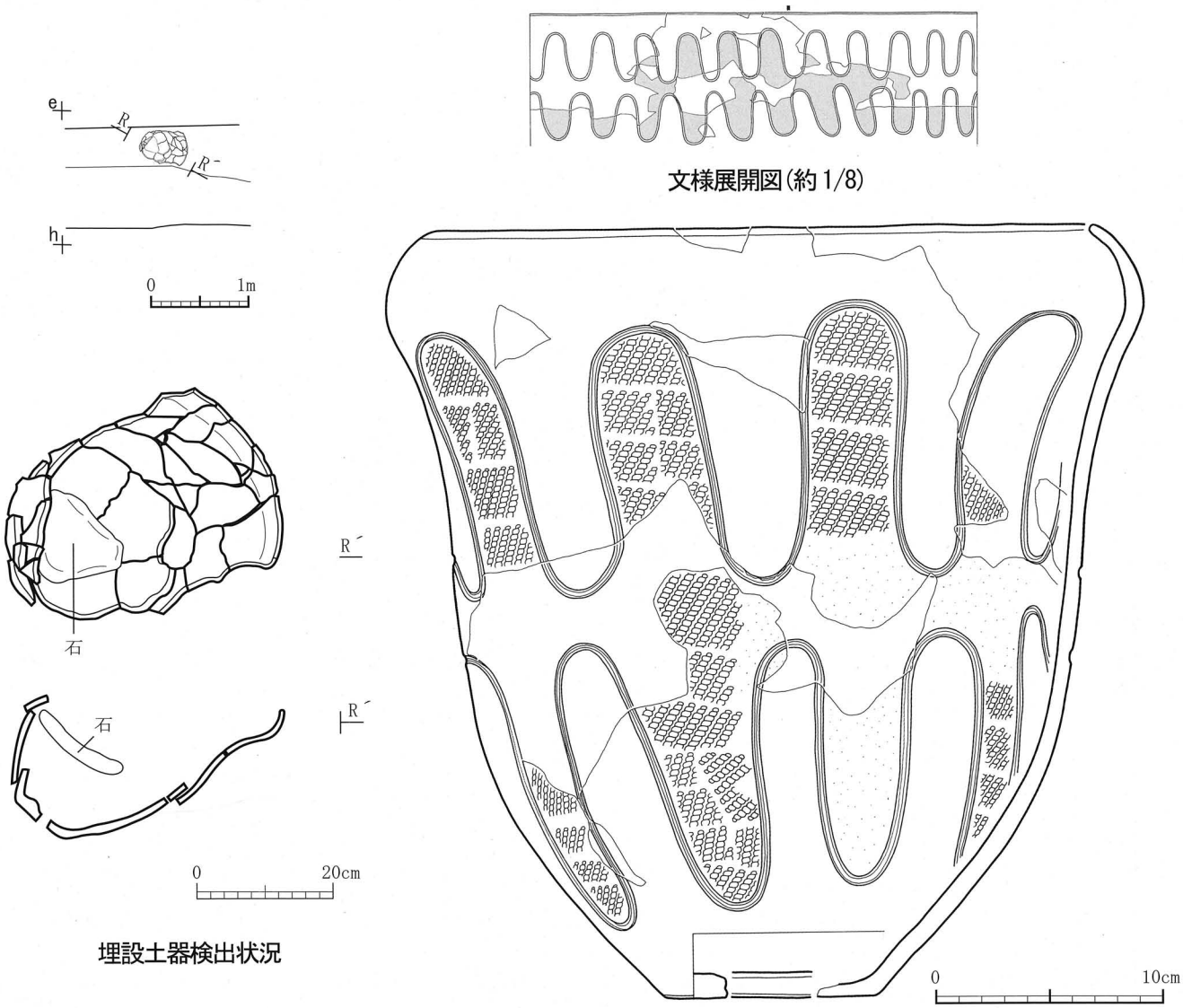


遺構名	堆積土	土　色	土　性	備　　考
SK1	1	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	
	2	10YR4/4褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。
	3	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土粒を微量含む。
	4	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土粒を微量含む。
	5	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。
	6	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
	7	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土粒を少量含む。
P5	1	10YR2/2黒褐色	粘土質シルト	
	2	10YR2/3黒褐色	粘土質シルト	
P6	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P7	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
	3	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックをやや多量に含む。
	4	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。
P8	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土粒を少量含む。
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックをやや多量に含む。
	3	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
P9	1	10YR3/2黒褐色	砂質シルト	
P10	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	焼土ブロックを微量含む。
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	
	3	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。
P12	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	焼土ブロックを多量に含む。
P13	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	
P14	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	焼土ブロック、Ⅱ層土ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックをやや多量、炭化物粒を少量含む。
P15	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロック、炭化物ブロックを微量含む。
P16	1	10YR2/2黒褐色	砂質シルト	φ2cmの礫を少量含む。
P18	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。

遺構名	堆積土	土　色	土　性	備　　考
P21	1	10YR2/2黒褐色	砂質シルト	焼土、炭化物ブロック、遺物を少量含む。
	2	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	焼土、炭化物ブロック、Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P23	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを微量、Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P25	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P26	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
P27	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。
P28	1	10YR3/2暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P29	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P30	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	
P31	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量、砂礫をやや多量に含む。
P32	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土粒をやや多量、焼土、礫をやや微量に含む。
P33	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	炭化物粒、Ⅱ層土粒を少量含む。
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロック、炭化物ブロックをやや多量に含む。
P34	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量、炭化物、焼土粒を微量含む。
P35	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量、炭化物ブロックをやや多量、焼土粒を微量含む。
	2	10YR5/6黄褐色	シルト質砂	下位に酸化鉄が沈着。
P37	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	炭化物粒を少量含む。砂礫をやや多量に含む。
P42	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロック、砂礫を少量、炭化物ブロックを微量含む。
P43a	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
	3	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。
P43b	1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	砂礫、炭化物ブロックを微量含む。
	2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土粒を多量に含む。炭化物粒を微量含む。
	3	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量含む。
P44	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量、下位に炭化物粒を微量含む。
	2	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
	3	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックをやや多量、炭化物粒を少量含む。
P45	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
P46	1	10YR2/3黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを多量に含む。
P47	1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	Ⅱ層土ブロックを極多量に含む。

第９図　西側調査区遺構平・断面図

は土器を埋設した掘り方は確認できなかった。土器は口径約35㎝、器高約30㎝の胴部の中央でくびれ、口縁部が内湾する所謂キャリパー形の器形で、底部中央に穿孔が見られる。土器内部には15㎝×13㎝の扁平な礫が入っていた。掘り方は確認されなかったが、出土状況や底部に穿孔があり、土器内部から礫が検出されたことなどから、埋設土器と考えられる。



文様展開図(約1/8)

埋設土器検出状況

図中番号	登録番号	遺構名	出土層位	種別	器種	法量(cm)			備考	写真図版
						器高	口径	底径		
10−1	A−13	埋設土器	Ⅱ	縄文土器	深鉢	34.4	29.0	9.2	縄文RL、沈線による連結楕円文、焼成後底部穿孔(外面→内面)	5−1

第10図　埋設土器検出状況および出土土器

6　まとめ

①今回の調査区は遺跡南部に位置している。東側調査区は昭和62年度・平成16年度に実施した第４次・６次調査地点の南に隣接し、西側調査区は昭和58年度・60年度に実施した第３次調査地点と重複し、平成17年度に実施した７次調査地点の南側に近接する。

②東側調査区ではⅡ層上面で溝跡１条、土坑５基、ピット12基を検出した。土坑はすべて部分的な検出であるが、フラスコ状土坑と考えられ、第４次調査で検出された土坑群、第６次調査で検出された溝状の落ち込みの東側に広がる土坑群と一連のものであると考えられる。また、溝跡、ピットは調査区が狭小のため、性格

や組み合わせ等詳細は不明である。

③土坑群の時期は出土土器から縄文時代中期中葉頃と思われ、上野遺跡の当該期の集落で今回の調査区周辺まで貯蔵域が広がっていることが確認された。

④西側調査区ではⅢ層上面で土坑２基、焼け面１箇所、ピット 56 基を検出した。フラスコ状土坑はなく、焼け面や土坑、ピットの密集、重複が見られる。第３次調査で複式炉を伴う竪穴住居跡や石組炉が検出されていることから、今回の調査で検出した遺構はそれらに係わるものが多いと考えられる。

⑤遺跡の西端近くでは第７次調査で縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居跡がまとまって検出されており、この時期の遺構の一部である可能性もある。

⑥包含層中で検出された埋設土器は、沈線文による縦位の楕円文が連結する文様で、キャリパー形を呈する深鉢である。北前遺跡や川添東遺跡出土土器に類例が見られるもので、縄文時代中期後葉大木９式期のものと考えられる。

⑦今後は、第６・７次調査地点より南側の調査から遺跡南部の資料が増加することで、さらに縄文時代の集落の内容が理解されていくことと思われる。

参考文献

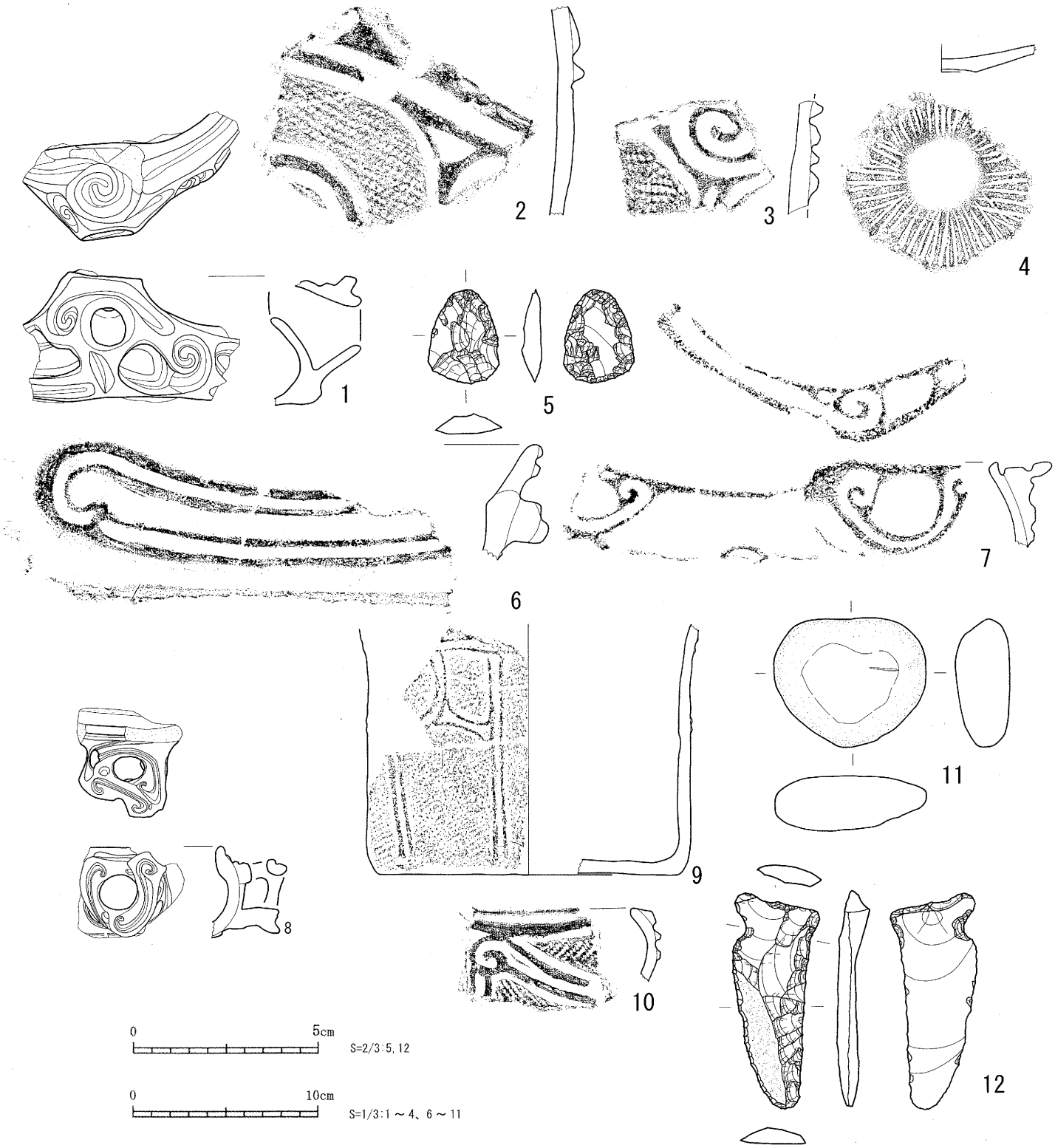
仙台市教育委員会 1982『北前遺跡』仙台市文化財調査報告書第 36 集

仙台市教育委員会 1986『上野遺跡 - 市道十文字線関係調査略報』仙台市文化財調査報告書第 88 集

仙台市教育委員会 1989『上野遺跡 - 電力鉄塔関係発掘調査報告書 - 』仙台市文化財調査報告書第 127 集

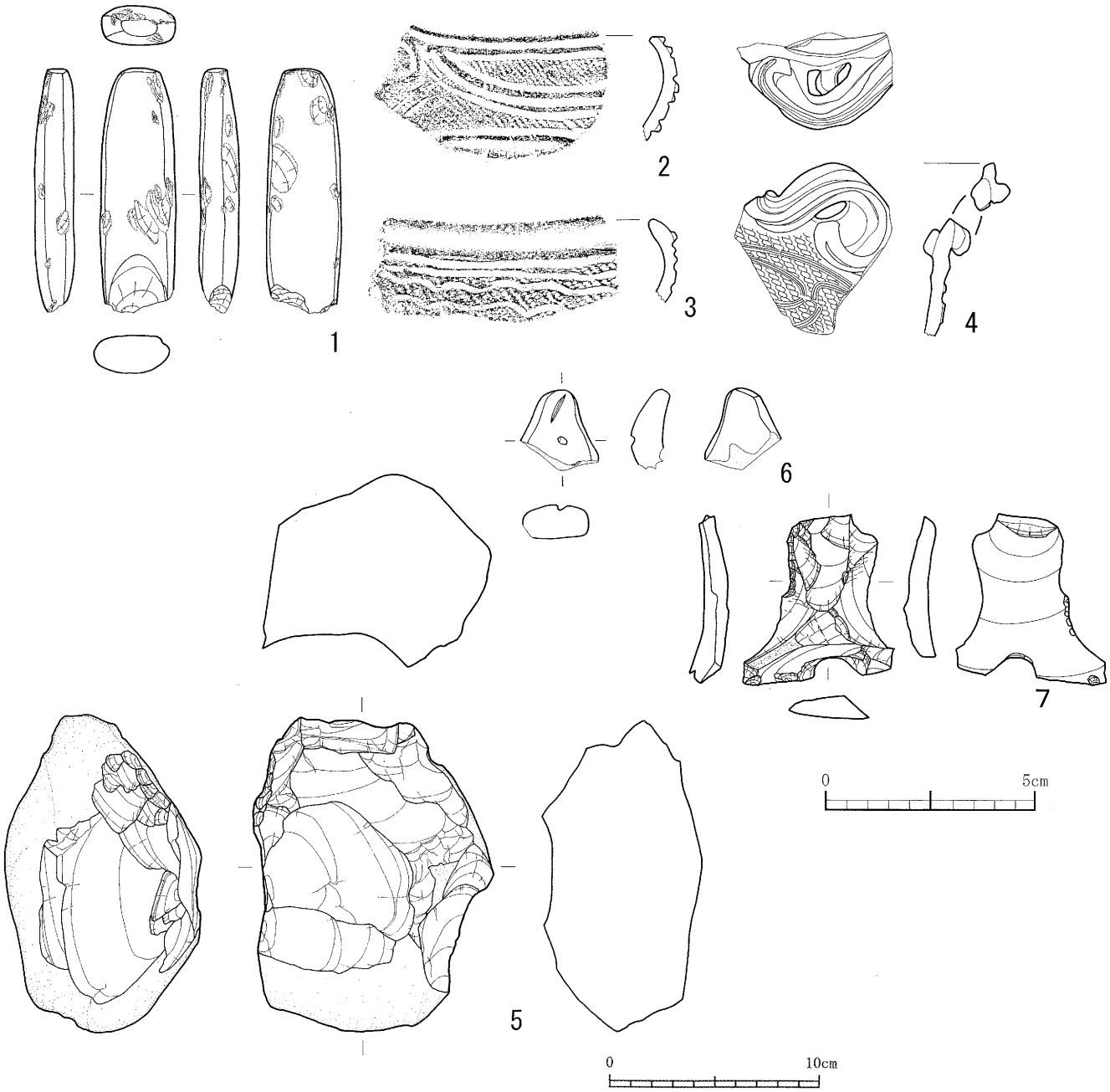
仙台市教育委員会 1997「川添東遺跡」『相ノ原遺跡・大貝中遺跡・川添東遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 217 集

仙台市教育委員会 2004『上野遺跡－平成 15 年確認調査・第５次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 278 集



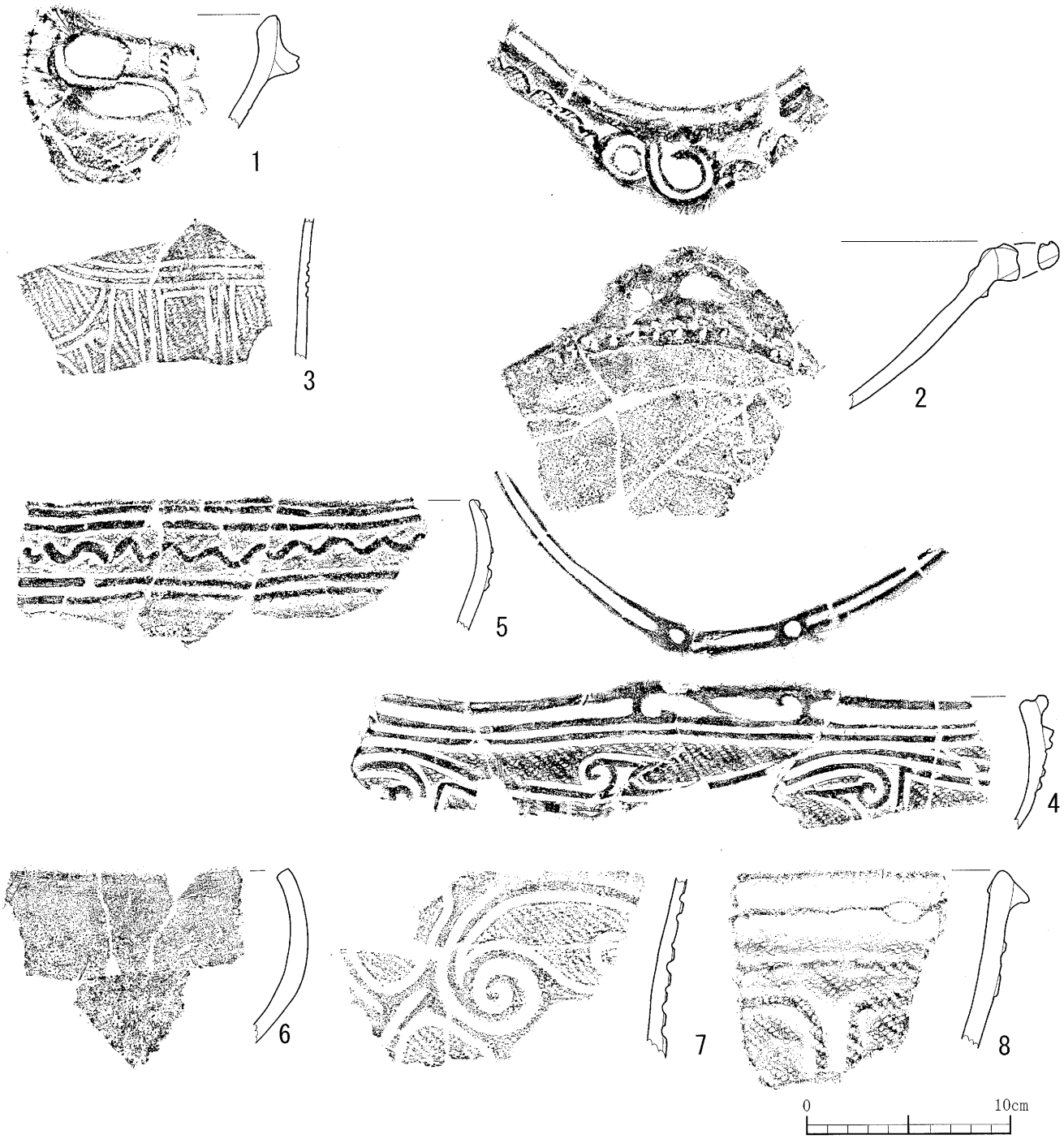
図中番号	登録番号	遺構名	区名	出土層位	種別	器種	法量(cm) 器高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	備考	写真図版
11-1	A-1	SK1	東区	1～6層	縄文土器	深鉢	-	-	-	渦巻装飾橋状把手	5-2
11-2	A-2	SK1	東区	1～6層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆沈線文	5-3
11-3	A-3	SK1	東区	1～6層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文RL、隆沈線文	5-4
11-4	A-4	SK1	東区	1～6層	縄文土器	鉢	-	-	-	沈線文	5-5
11-5	K-1	SK1	東区	1～6層	石器	石鏃	2.5	1.9	0.5	重さ:2.7g　石材:硬質頁岩	5-6
11-6	A-5	SK2	東区	1～6層	縄文土器	深鉢	-	-	-	波状口縁	5-7
11-7	A-6	SK2	東区	3～5層	縄文土器	深鉢	-	-	-	渦巻装飾把手	5-8
11-8	A-7	SK2	東区	3～5層	縄文土器	深鉢	-	-	-	渦巻装飾把手	5-9
11-9	A-8	SK2	東区	3～5層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、底部網代痕	5-10
11-10	A-9	SK2	東区	6･7層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆沈線文	5-11
11-11	K-2	SK2	東区	1･2層	礫石器	礫石器	7.0	8.2	3.0	重さ:150g　使用痕:磨1面、石材:安山岩	5-12
11-12	K-3	SK2	東区	3～5層	石器	石匙	5.8	2.2	0.7	重さ:6.5g　石材:メノウ化した泥岩	5-13

第 11 図　遺構出土遺物 (1)



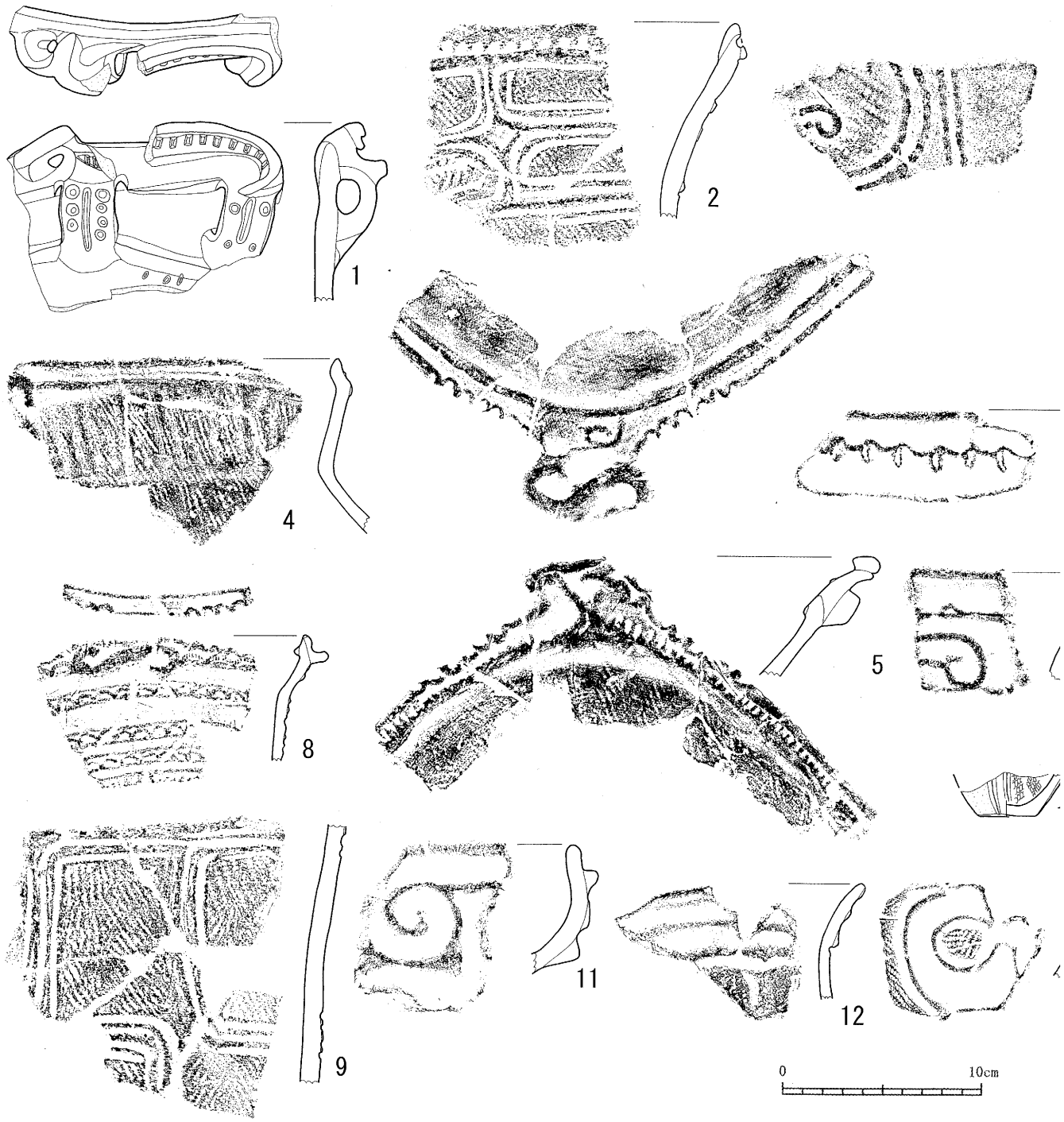
図中番号	登録番号	遺構名	区名	出土層位	種別	器種	法量(cm) 器高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	備考	写真図版
12-1	K-5	SK4	東区	1～4層	石器	磨製石斧	11.6	3.55	1.9	重さ:125g　石材:玄武岩	5-15
12-2	A-10	SK6	東区	2～5層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆沈線文	5-16
12-3	A-11	SK6	東区	6層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、沈線文	5-17
12-4	A-12	P6	東区	6層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、渦巻装飾把手	5-18
12-5	K-4	撹乱	東区		石器	石核	5.7	7.5	4.6	重さ:212.7g　石材:メノウ化した泥岩	5-14
12-6	P-1	SK1	西区	1～2層	土製品	三角形土製品	3.9	3.3	1.6		5-19
12-7	K-7	P2	西区	1層	石器	スクレイパー	4.05	3.5	0.6	重さ:6.6g　石材:硬質頁岩	5-20

第 12 図　遺構出土遺物 (2)



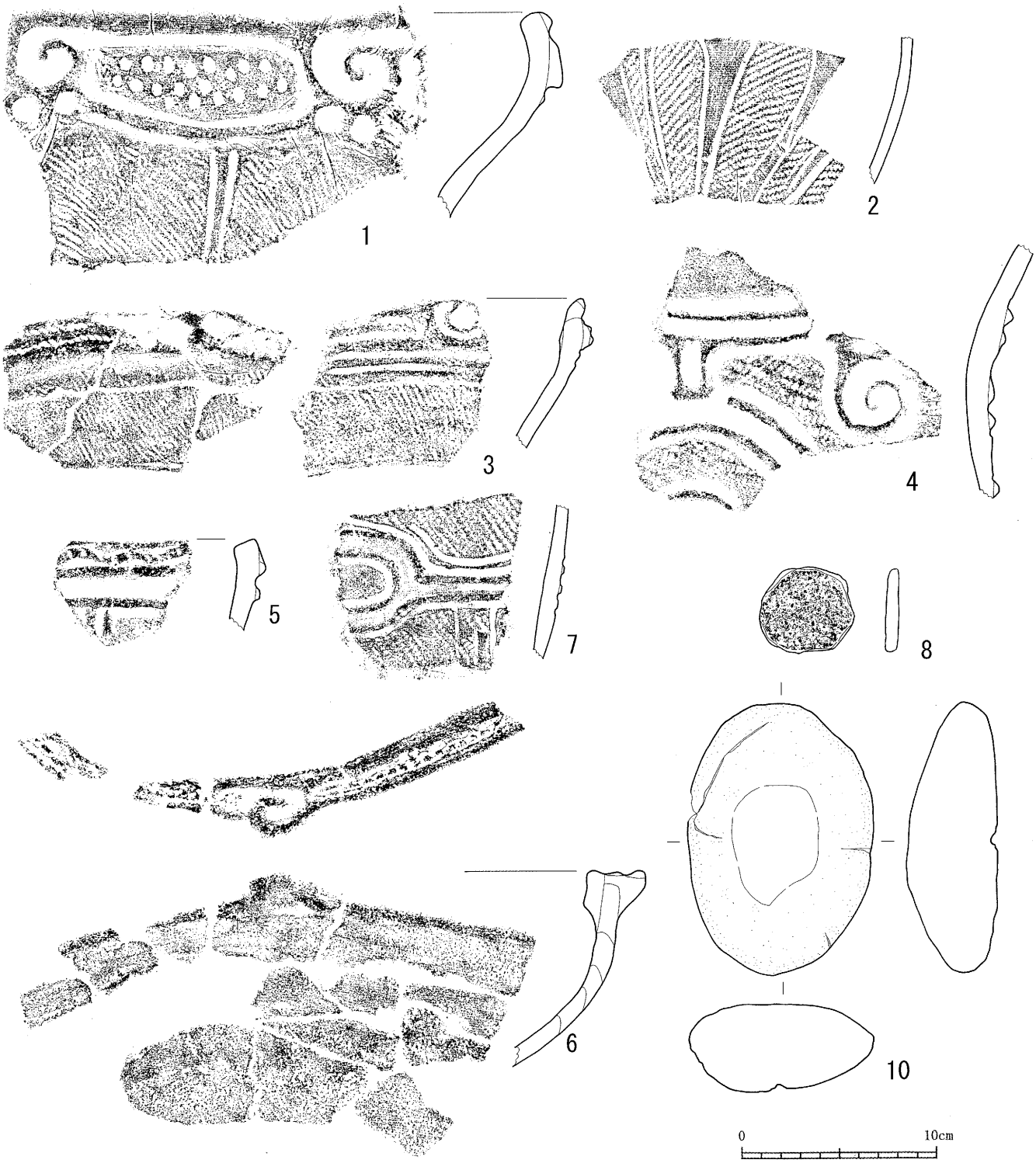
図中番号	登録番号	区名	基本層	種別	器種	法量(cm)			備　　考	写真図版
						器高	口径	底径		
13-1	A-25	西区	Ⅰ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	不明縄文、S字状装飾突起、隆線文、沈線文	6-1
13-2	A-14	西区	Ⅱ層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	隆線文、刻み目、LR縄文圧痕	6-2
13-3	A-15	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、沈線文	6-3
13-4	A-16	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、沈線文	6-4
13-5	A-17	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文RL、隆線文、沈線文	6-5
13-6	A-18	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	ミガキ	6-6
13-7	A-19	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆沈線文	6-7
13-8	A-20	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文	6-8

第 13 図　基本層出土遺物 (1)



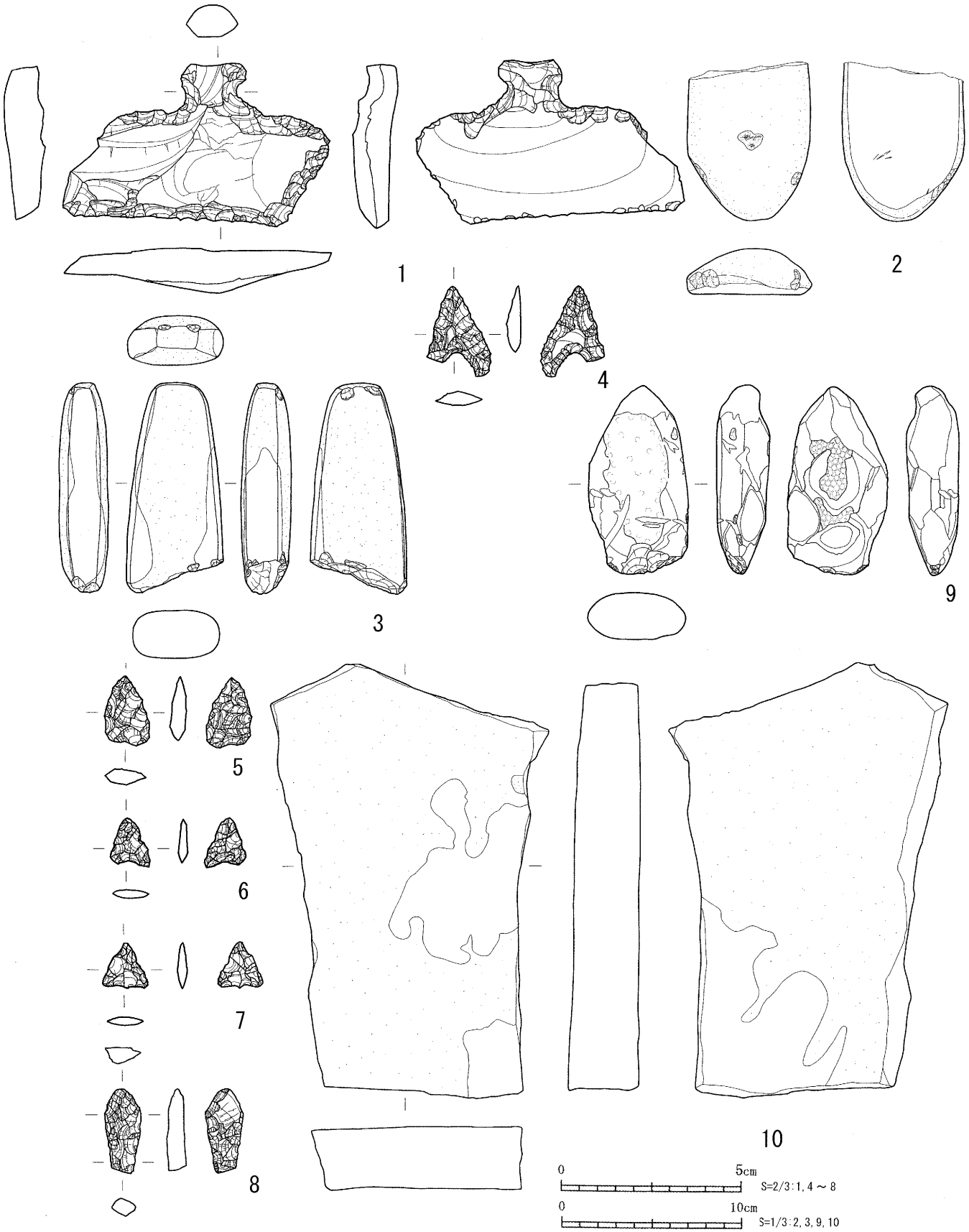
図中番号	登録番号	区名	基本層	種別	器種	法量(cm)			備　　考	写真図版
						器高	口径	底径		
14-1	A-21	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	渦巻装飾把手、刺突文	6-9
14-2	A-22	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、沈線文、刺突文	6-10
14-3	A-23	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文	6-11
14-4	A-24	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文	6-12
14-5	A-26	西区	Ⅱ層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	不明縄文、渦巻装飾突起、隆線文、刺突文	6-13
14-6	A-27	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	隆線文、刺突文	6-14
14-7	A-28	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	隆線文	6-15
14-8	A-29	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、沈線文	6-16
14-9	A-30	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文RL、沈線文	6-17
14-10	A-31	西区	Ⅱ層	縄文土器	ミニチュア土器	2.2	-	2.9	炭化物付着、縄文LR、隆線文	6-18
14-11	A-32	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	隆線文	6-19
14-12	A-33	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	隆線文	6-20

第 14 図　基本層出土遺物 (2)



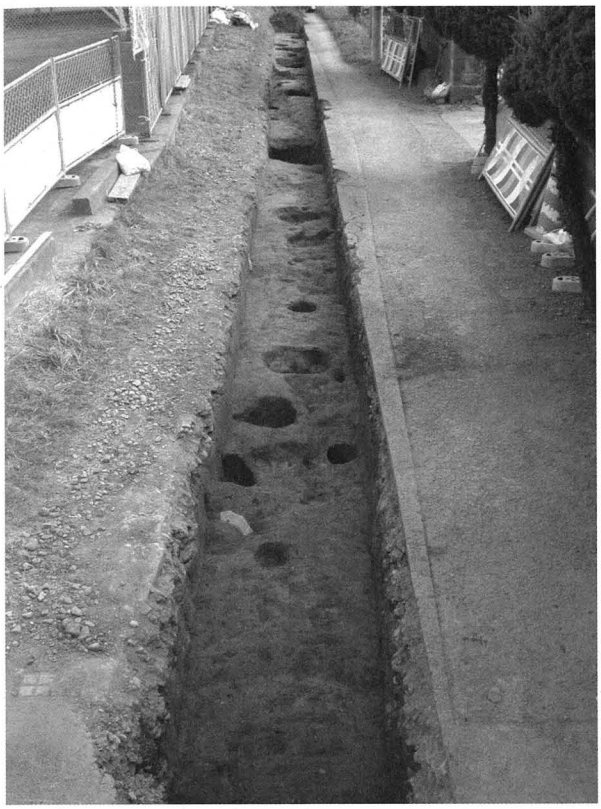
図中番号	登録番号	区名	基本層	種別	器種	法量(cm) 器高 / 長さ	口径 / 幅	底径 / 厚さ	備考	写真図版
15-1	A-35	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆沈線文、沈線文、刺突文	7-1
15-2	A-36	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文RL、「∩」状沈線文	7-2
15-3	A-37	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆線文、R縄文圧痕、沈線文	7-3
15-4	A-38	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR,隆沈線文	7-4
15-5	A-39	西区	Ⅱ層	縄文土器	鉢	-	-	-	不明縄文、隆線文、刻み目	7-5
15-6	A-40	西区	Ⅱ層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	渦巻装飾突起、隆線文、刺突文	7-6
15-7	A-41	西区	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文LR、隆沈線文、沈線文、	7-7
15-8	P-2	西区	Ⅱ層	土製品	土製円盤	4.5	4.8	0.6	不明縄文	7-8
15-9	K-6	西区	Ⅱ層	礫石器	礫石器	14	9.5	4.7	重さ:7.28g 使用痕:磨1面 石材:安山岩	7-9

第 15 図　基本層出土遺物 (3)



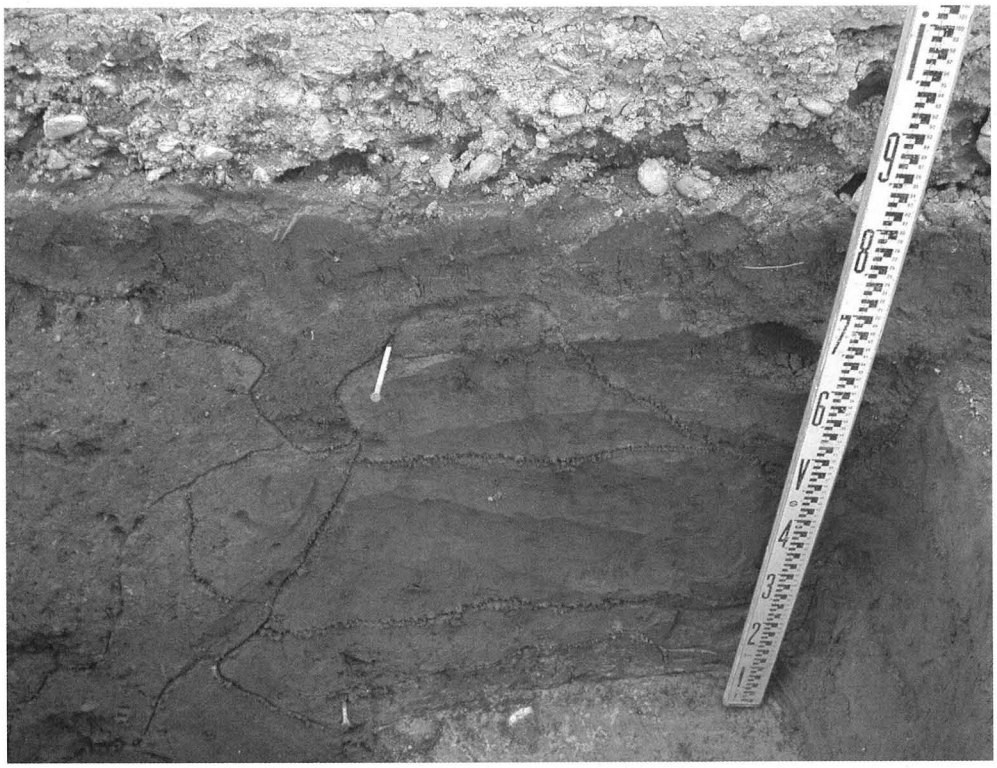
図中番号	登録番号	区名	基本層	種別	器種	法量(cm) 器高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	備考	写真図版
16-1	K-8	西区	Ⅱ層	石器	石匙	4.5	7.4	1.3	重さ:29.9cm 石材:硬質頁岩	7-10
16-2	K-9	西区	Ⅱ層	石器	礫石器	8.8	6.9	2.6	使用痕:磨1面、凹1ヶ所、敲き3ヶ所、石材:安山岩	7-11
	K-10	西区	Ⅱ層	石器	スクレイパー	4.3	4.4	1.15	重さ:19.0g 石材:硬質頁岩	7-12
16-3	K-11	西区	Ⅱ層	石器	石斧	11.6	5.3	2.8	重さ:270.0g 石材:安山岩	7-13
16-4	K-14	西区	表採	石器	石鏃	2.5	1.7	0.4	重さ:1.0g 石材:硬質頁岩	7-14
16-5	K-15	西区	表採	石器	石鏃	1.9	1.2	0.4	重さ:1.0g 石材:チャート	7-15
16-6	K-16	西区	表採	石器	石鏃	1.3	1.1	0.22	重さ:0.2g 石材:チャート	7-16
16-7	K-18	西区	表採	石器	石鏃	1.2	1.2	0.25	重さ:0.1g 石材:硬質頁岩	7-17
16-8	K-19	西区	表採	石器	石錐	2.3	1	0.5	重さ:1.1g 石材:硬質頁岩	7-18
16-9	K-22	西区	表採	石器	石斧	10.45	5.5	2.9	重さ:210.0g 石材:安山岩	7-19
16-10	K-23	西区	表採	礫石器	石皿	24	15.4	3.9	重さ:2455g 使用痕:磨2面、石材:安山岩	7-20

第16図　基本層出土・表採遺物



１　東側調査区完掘状況全景（北西から）

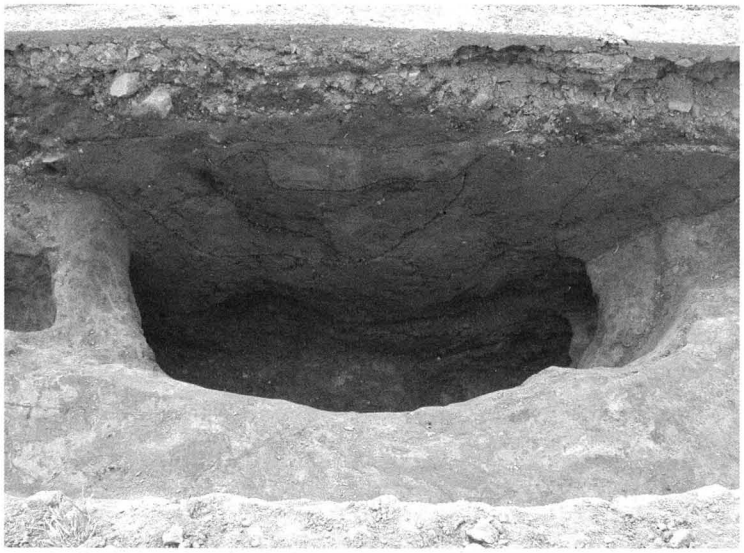
２　東側調査区南半完掘状況（北西から）



３　基本土層断面（北東から）

図版１　東側調査区完掘状況

1　SK1 土坑完掘状況(北東から)



2　SK2 土坑完掘状況(北東から)

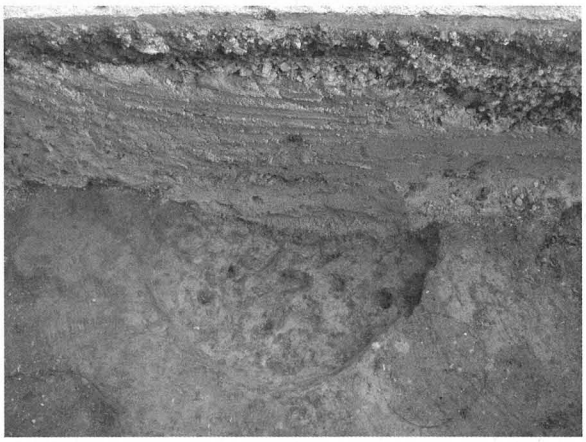
3　SK6 土坑完掘状況(北東から)

図版２　東側調査区土坑

１　西側調査区検出状況（北から）

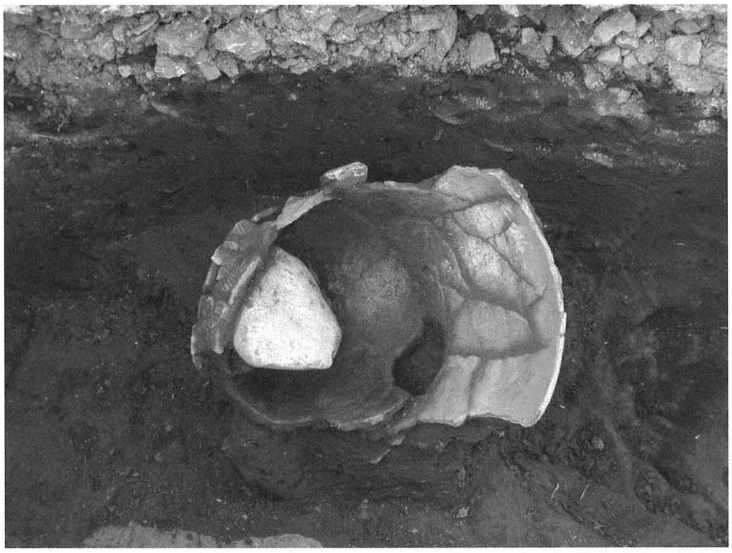
２　西側調査区ピット検出状況（北から）

３　SK1 土坑完掘状況（北東から）



４　SK２土坑完掘状況（西から）

図版３　東側調査区検出遺構

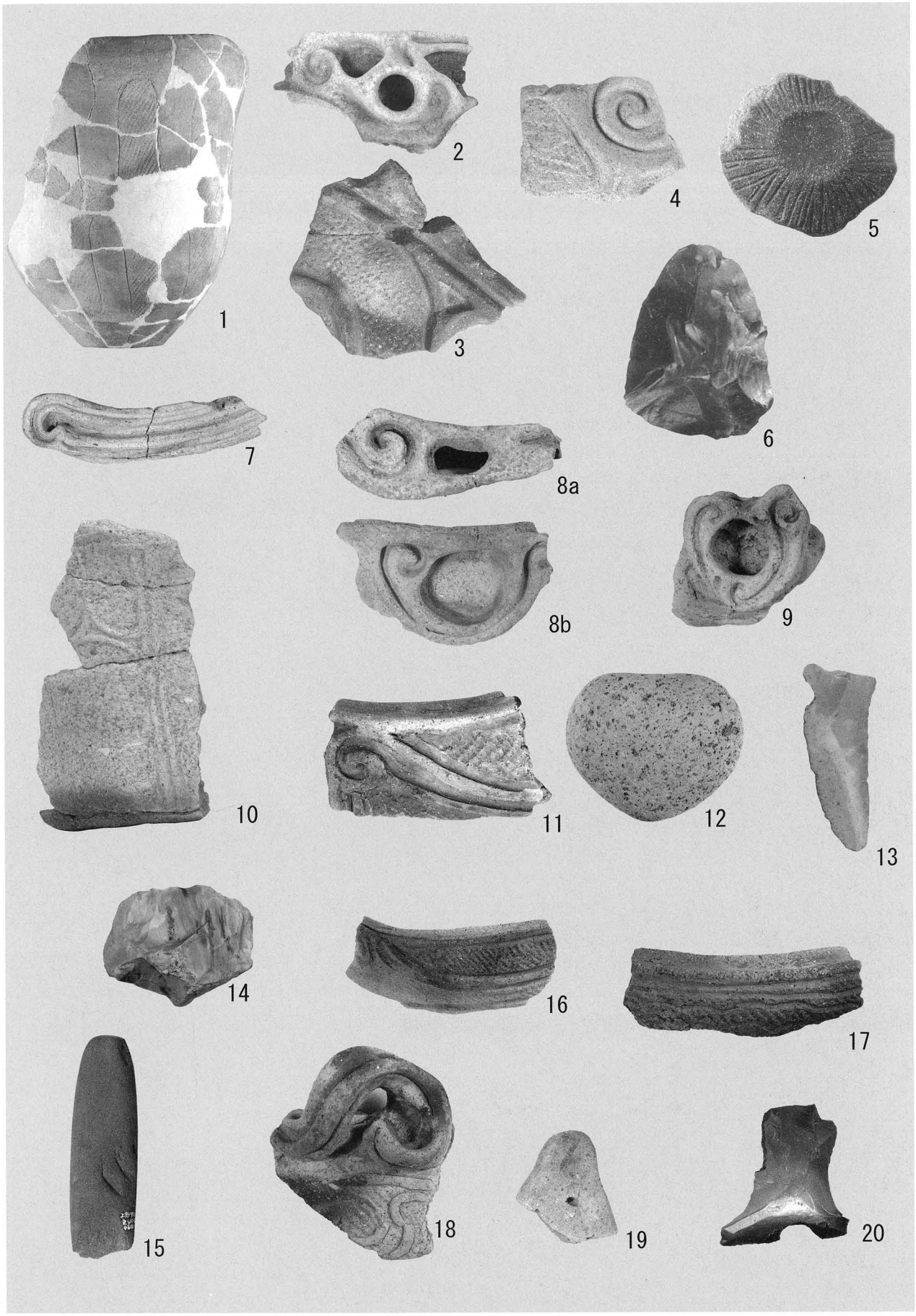


1　埋設土器（東から）

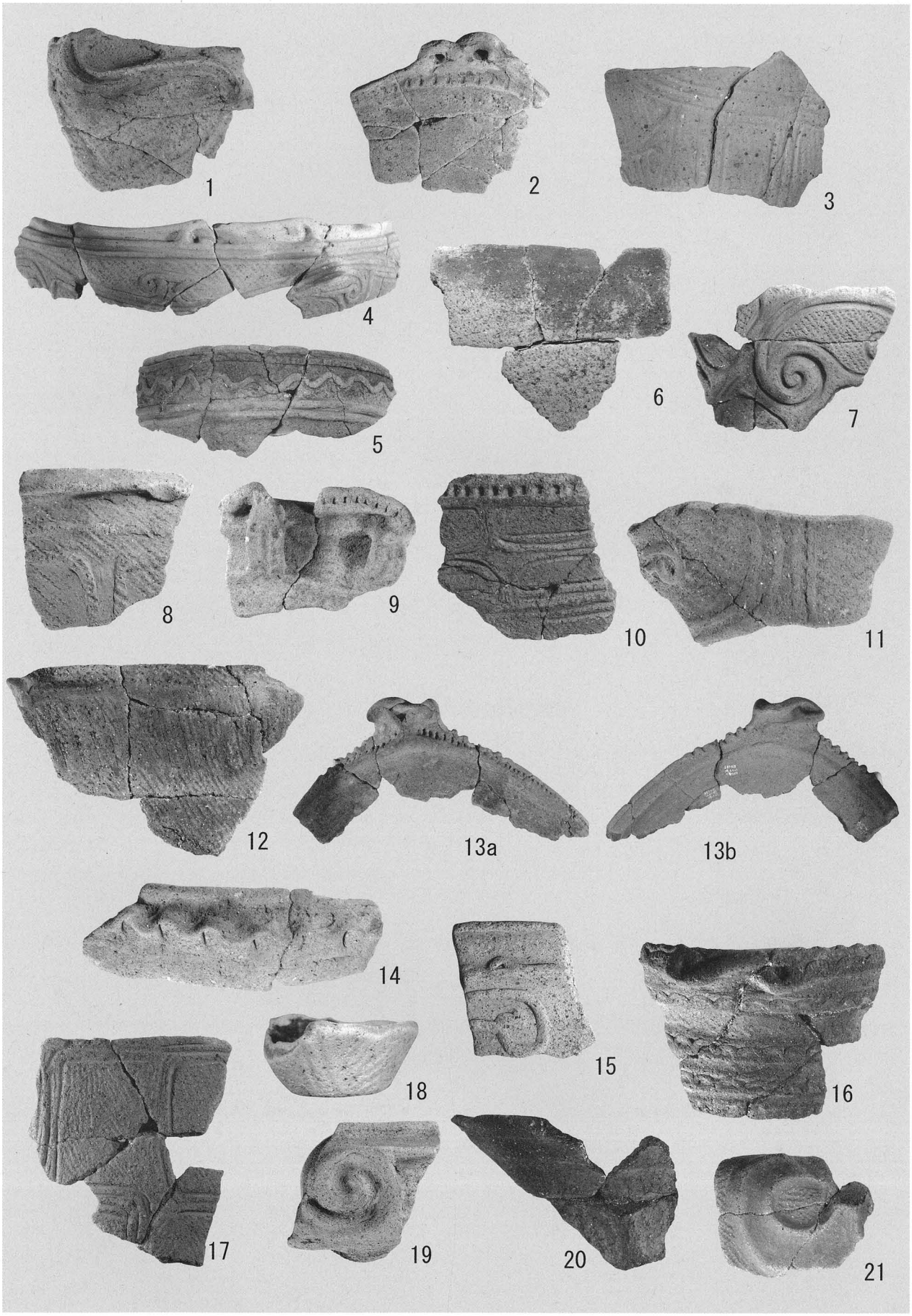
2　埋設土器（南から）

3　埋設土器（北から）

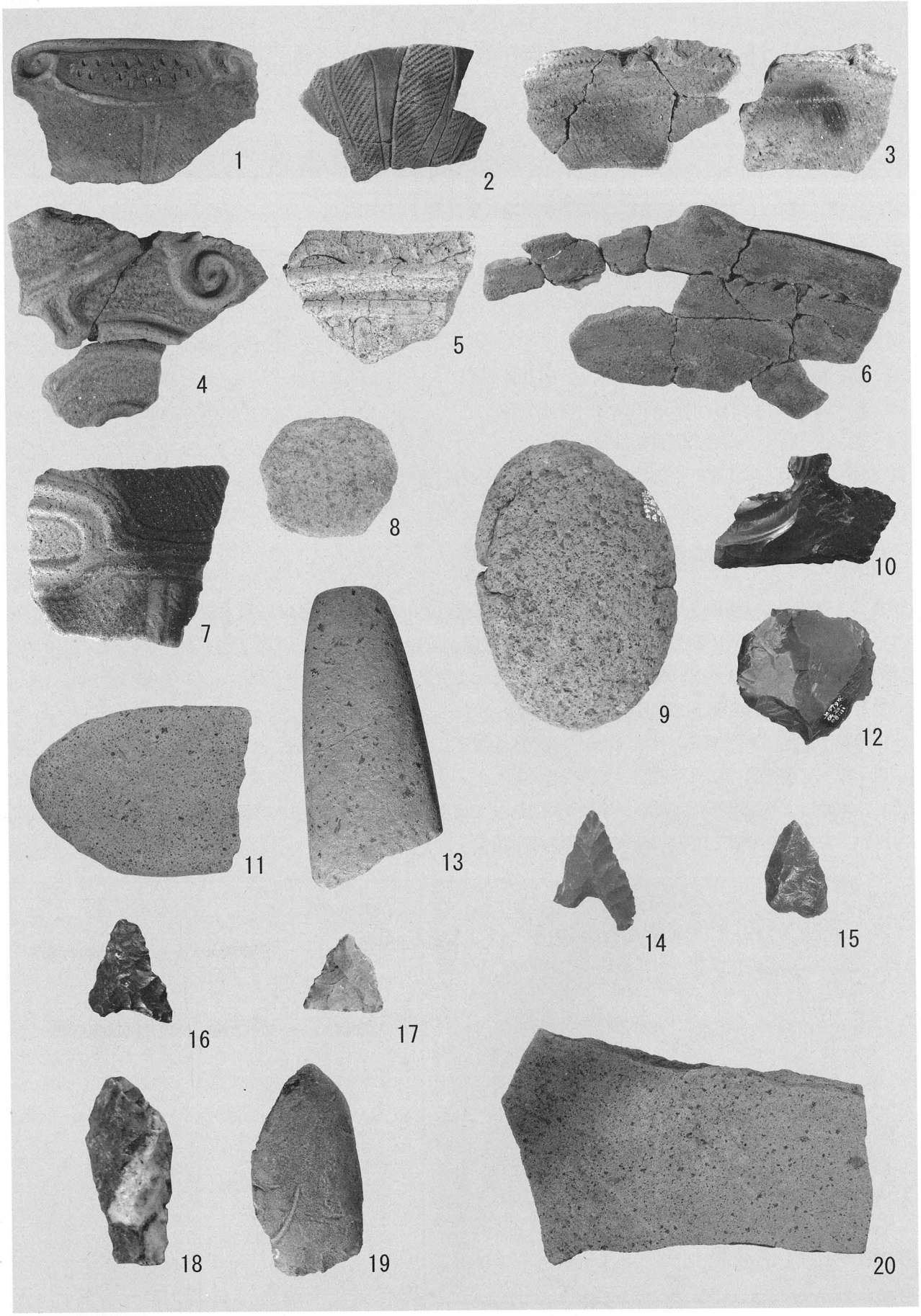
図版 4　埋設土器



図版５　出土遺物（１）



図版 6　出土遺物 (2)



図版７　出土遺物（3）

Ⅱ　大野田古墳群第 16 次発掘調査報告

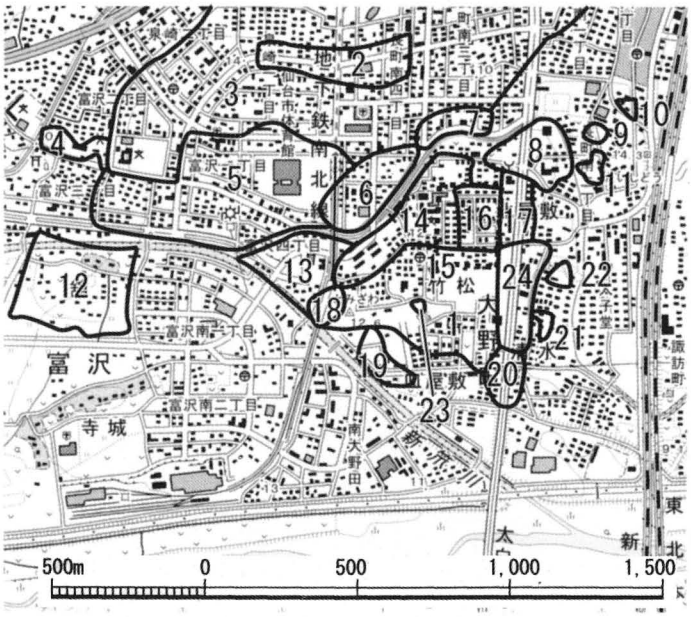
1　調査要項

遺　跡　名	大野田古墳群（宮城県遺跡地名登録番号 01361）
調 査 地 点	仙台市太白区大野田字宮脇 （仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業 27LB13、14、15）
調 査 期 間	平成 21 年 2 月 24 日～平成 21 年 3 月 17 日
調査対象面積	180 ㎡
調 査 面 積	180 ㎡（うちモニュメント部 4 ㎡）
調 査 原 因	仙台市大野田保育所移転工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	主査　平間亮輔　主事　大久保弥生　文化財教諭　佐々木匠

2　調査に至る経過と調査方法

調査は、申請者より提出された大野田保育所の移転改築工事に伴う発掘通知に対して、文化財保護法第 94 条に基づき実施した。当初計画部分の発掘調査は大野田古墳群第 14 次発掘調査として実施され、平成 20 年 10 月 22 日に終了しているが、より広い範囲での建築設計となったため、その超過部分とモニュメント部分(合計約 180 ㎡)を対象として発掘調査を実施することになった。

建物建設予定地に東西 11m×南北 16m の調査区を設定した。はじめに重機により盛土およびⅠ、Ⅱ層まで掘削し、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層を人力により掘削して調査を実施した。また、モニュメント設置予定地に 2m × 2m の調査区を設定し、重機により掘削を行ったが、地表下約 3m まで撹乱を受けていることが確認されたため、写真による記録のみ行い、安全面を考慮してその後すぐに埋め戻した。

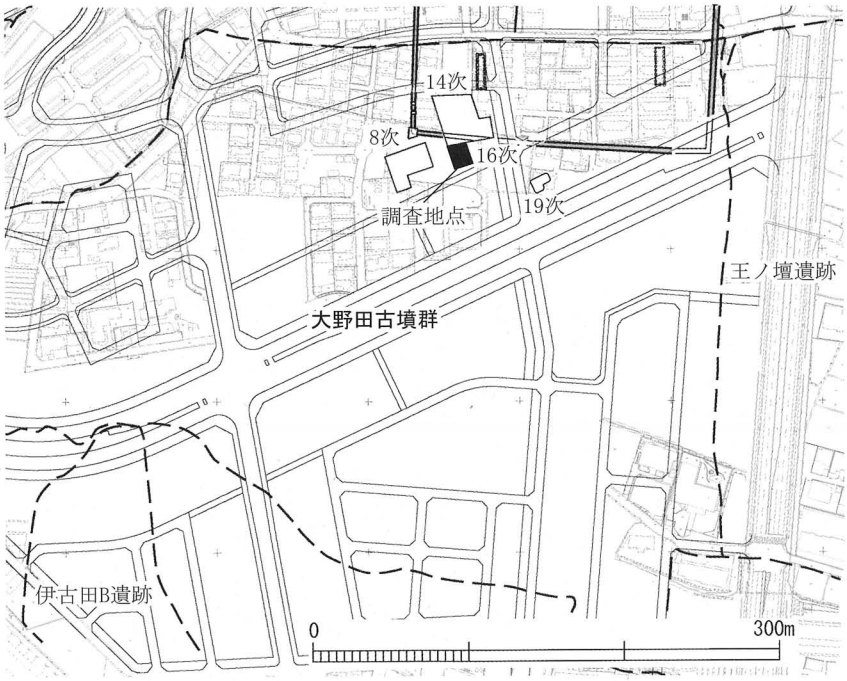


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳・平安、近世
3	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世
4	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
5	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文早・中～晩、弥生中、古墳～中世
6	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文早・前・後、弥生～中世
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
8	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、奈良～近世
9	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
10	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
11	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
12	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世
13	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生、中世
14	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩、弥生～平安、近世
15	大野田官衙遺跡	官衙	自然堤防	奈良、平安
16	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安
17	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文後、弥生中、古墳～平安
18	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後、古墳～平安
19	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
20	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	奈良～中世
21	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
22	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
23	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中
24	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文後、弥生～中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3　遺跡の位置と環境

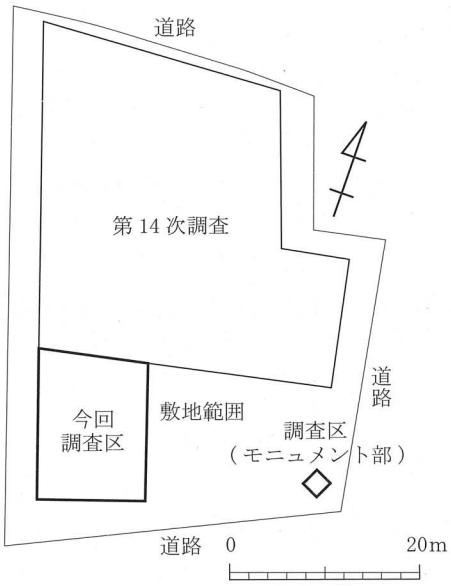
大野田古墳群は、仙台市太白区大野田に所在し、地下鉄富沢駅の東側に位置している。遺跡は東西約 600 m、南北約 400mの範囲におよび、標高 10～12m名取川下流域左岸の自然堤防上の微高地に立地する。大野田古墳群は、縄文時代および古墳時代から中世にかけての複合遺跡で、主体となる古墳は古墳時代中期から後期に築造される。平成 20 年度までの調査において、春日社古墳・鳥居塚古墳・王ノ壇古墳のほか、大野田１～39 号墳までの古墳が発見されており、平成 21 年度の調査で新たに大野田 40 号墳が発見された。発見された古墳の総数は 43 基を数える。古代の遺構では、水田跡、小溝状遺構群、河川跡などが検出されている。今回の調査は第 16 次にあたり、調査地点は第 14 次調査の南側に隣接している。第 14 次調査では、古墳時代の住居跡 2 軒、古代の小溝状遺構、ピットが検出され、調査区の南側では東西方向の溝跡が検出された。この溝跡は、北東部に点在する古代の大型掘立柱建物を区画する溝として、大野田官衙遺跡の一部に登録されている。



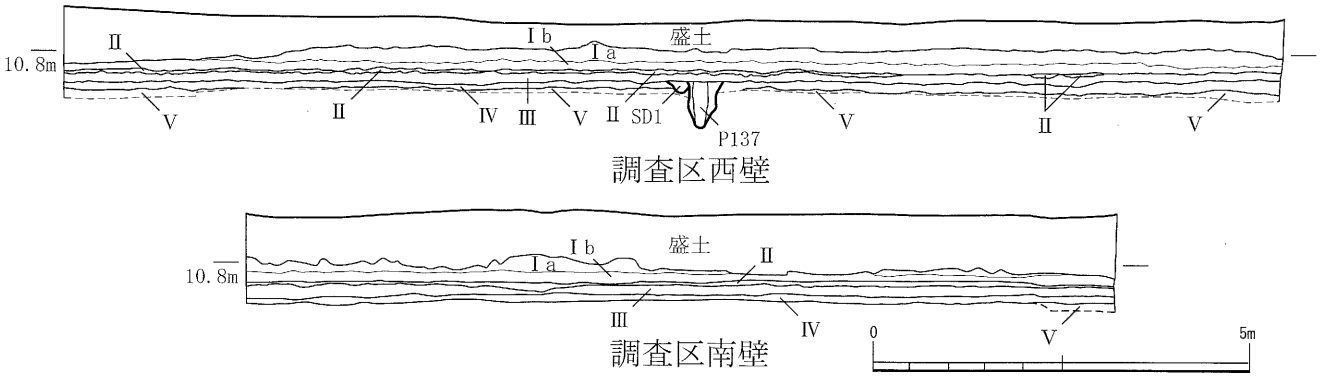
第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡

4　基本層序

調査地点は、20～80cm の盛土がなされ、基本層は大きく 5 層に分かれる。Ⅰ層は現代の水田耕作層で、土色と酸化鉄の含量の違いによりⅠa 層とⅠb 層に分けた。Ⅰa 層は層厚 4～24 cm、Ⅰb 層は層厚 6～16 cmでともに灰色シルト質粘土層である。Ⅱ層は層厚 2～12 cmの旧表土で、酸化鉄粒を少量含んだ黒褐色の粘土質シルト層である。Ⅲ層は層厚 5～12 cmである。層中にマンガン粒を含み、下部に 10 世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰ブロックと酸化鉄粒が集積している黄褐色粘土質シルト層である。Ⅳ層は層厚 4～10 cmで、酸化鉄粒を少量含む黒褐色粘土質シルト層である。Ⅴ層は、酸化鉄粒を少量含むにぶい黄褐色粘土質シルト層である。



第3図　調査区配置図



基本層	土 色	土 性	備 考
Ⅰa層	N5/ 灰色	シルト質粘土	粘性あり。下層に酸化鉄集積。
Ⅰb層	5Y4/1灰色	シルト質粘土	粘性あり。酸化鉄粒多量含む。
Ⅱ層	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量含む。
Ⅲ層	10YR5/6黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒中量、下層に灰白色火山灰ブロック中量、酸化鉄粒少量含む。
Ⅳ層	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量含む。
Ⅴ層	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量含む。

第4図　調査区西壁・南壁断面図

5　発見遺構と出土遺物

(1) Ⅲ層上面検出遺構

Ⅲ層上面ではピット列15列、ピット7個を検出した。ピット列を構成するピットの平面形は円形もしくは楕円形である。堆積土は、黒褐色粘土質シルト、褐灰粘土質シルトの単層である。柱痕跡は確認されず、建物などの有意な配置は見られない。遺物は出土していない。

(2) Ⅳ層上面検出遺構

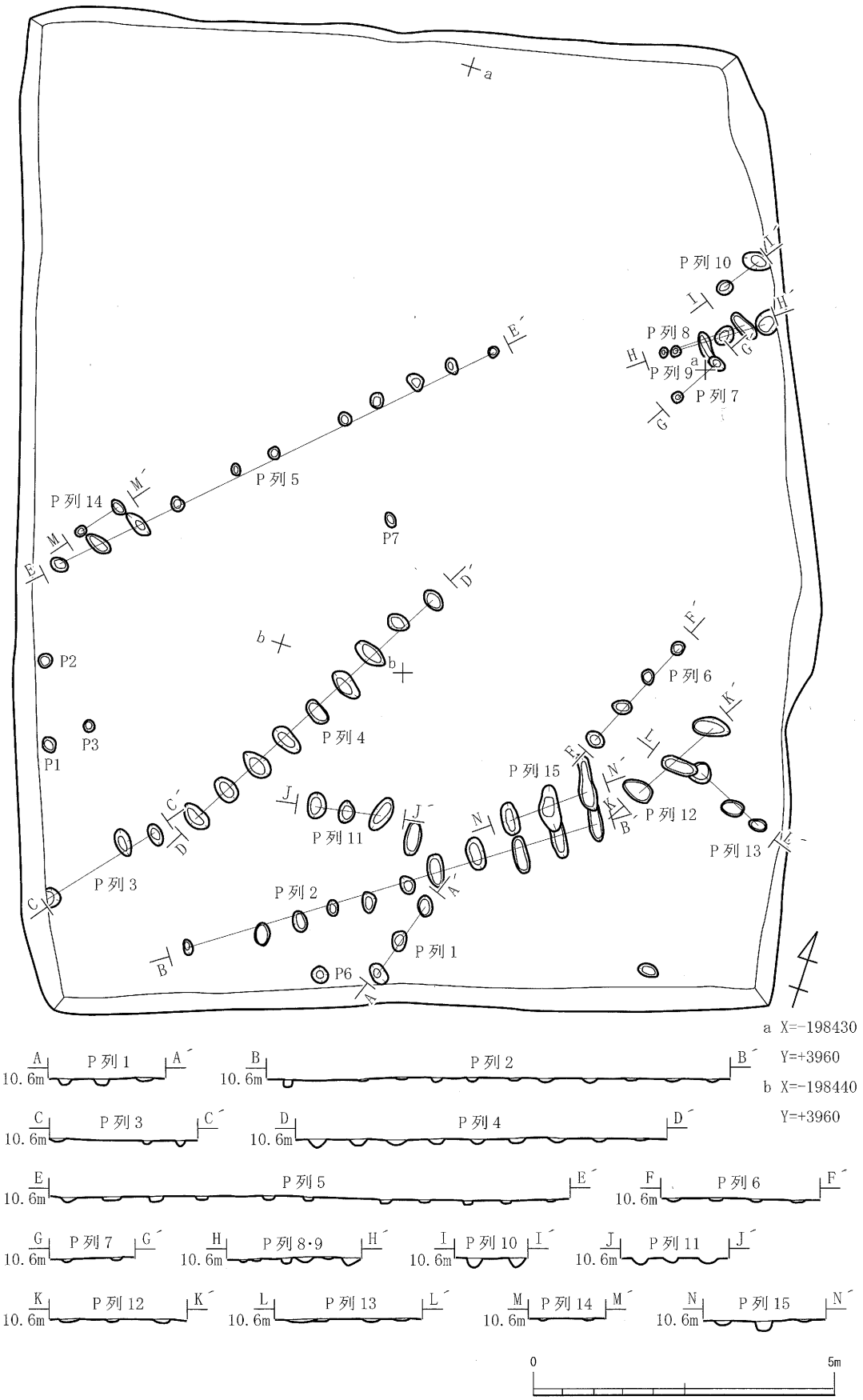
Ⅳ層上面では柱列跡2列、溝跡5条、ピット74個を検出した（そのうち8個は柱列跡を構成）。そのうちSA1・SA2柱列とそれを構成するピット、SD1、SD4溝跡については、調査時にはⅤ層上面で検出したが、調査区西壁の断面観察の結果、掘り込み面がⅣ層上面であることが確認された。ピットの平面形は円形もしくは楕円形である。堆積土は黒褐色粘土質シルト、褐灰粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

1）柱列跡

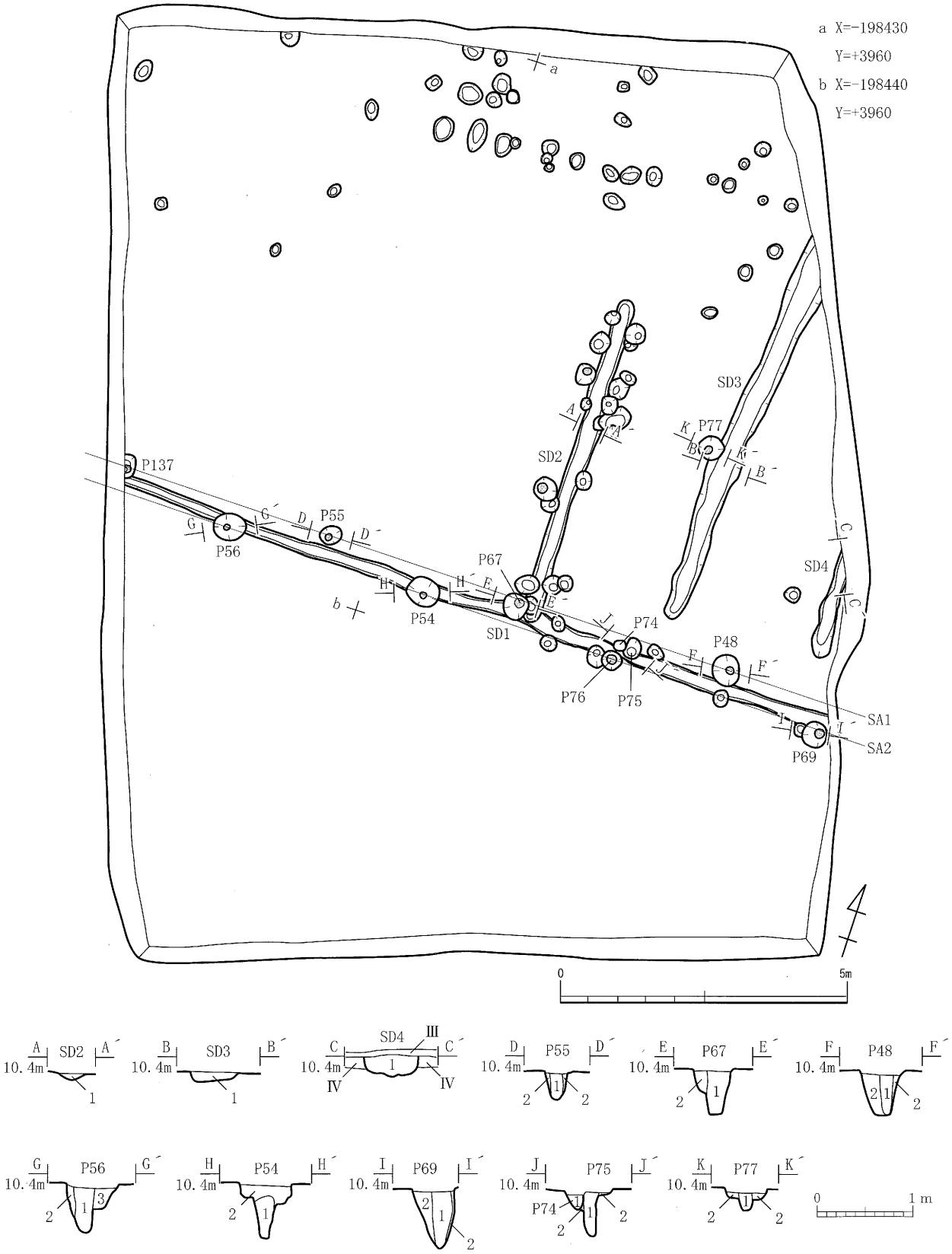
SA1 柱列跡　調査区中央に位置し、SD1溝跡より新しい。柱痕跡のある4基のピット(P48、67、55、137)が、一定の感覚を置いて、東西方向にほぼ一直線上に並んで検出されている。中軸方位はN−89°−Wを示す。確認された全長は約13mで、柱間距離は3.5〜3.8mである。ピットの平面形は円形で、規模は径33〜58cm、深さ50〜71cmである。

SA2 柱列跡　調査区中央に位置するSA1柱列跡と同様の遺構で、SD1、SD2溝跡より新しい。柱痕跡のある3基のピット(P54、56、69)と柱穴状のピット1基(P76)が、一定の感覚を置いて、ほぼ一直線上に並んで検出されている。東西方向へ延びるもので、両端はさらに調査区外へ続くものと予想される。確認された全長は約12.9mで、中軸方位はN−89°−Wを示す。各ピットの間隔は、柱間距離で3.5〜3.9mである。ピットの平面形は円形で、規模は径39〜52cm、深さは48〜69cmである。

SA1柱列跡、SA2柱列跡は、中軸線間の距離で約40cmの間隔をおいて平行して検出され、両柱列跡の各ピットはそれぞれ互い違いに位置している。遺物は出土していない。



第 5 図　Ⅲ層上面遺構平面図・断面図



第６図　Ⅳ層上面遺構平面図・断面図

Ⅳ層上面検出遺構土層注記表

遺構名	堆積土	土　色	土　性	備　　考
SD1	1	10YR3/1黒褐	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック中量、10YR5/6黄褐ブロック少量、炭化物、酸化鉄粒微量含む。
SD2	1	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック中量、酸化鉄粒少量含む。
SD3	1	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック中量、10YR3/1黒褐ブロック、酸化鉄粒少量含む。
SD4	1	10YR3/1黒褐	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック中量、酸化鉄粒少量含む。
P48	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P54	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P55	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P56	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック少量、酸化鉄粒微量含む。柱掘り方。
	3	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P67	1	10YR4/1褐灰	粘土	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック多量含む。柱痕跡。
	2	10YR5/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P69	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P74	1	10YR3/1黒褐	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。層下部に酸化鉄の集積あり。柱痕跡か。
P75	1	10YR4/1褐灰	粘土	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/2灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P77	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。

2）溝跡

検出された溝跡４条のうち、SD2、SD3、SD4 溝跡を１群とした。

SD1 溝跡　トレンチの中央で検出した。東西方向の溝跡で、東部、西部は調査区外に延びている。SD2 溝跡、SA1、SA2 柱列より古い。規模は、検出長 12.9m、上端幅 18～33cm、下端幅 10～26cm、深さ 5～16cm である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD2、3、4 溝跡（第１群）　南北方向の溝跡で、SD1 溝跡より新しい。規模は、上端幅 30～65cm、下端幅 23～40cm、深さ 5～14cm である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

(3) Ⅴ層上面検出遺構

Ⅴ層上面では、溝跡４条、土坑１基、ピット 55 個を検出した。

1）溝跡

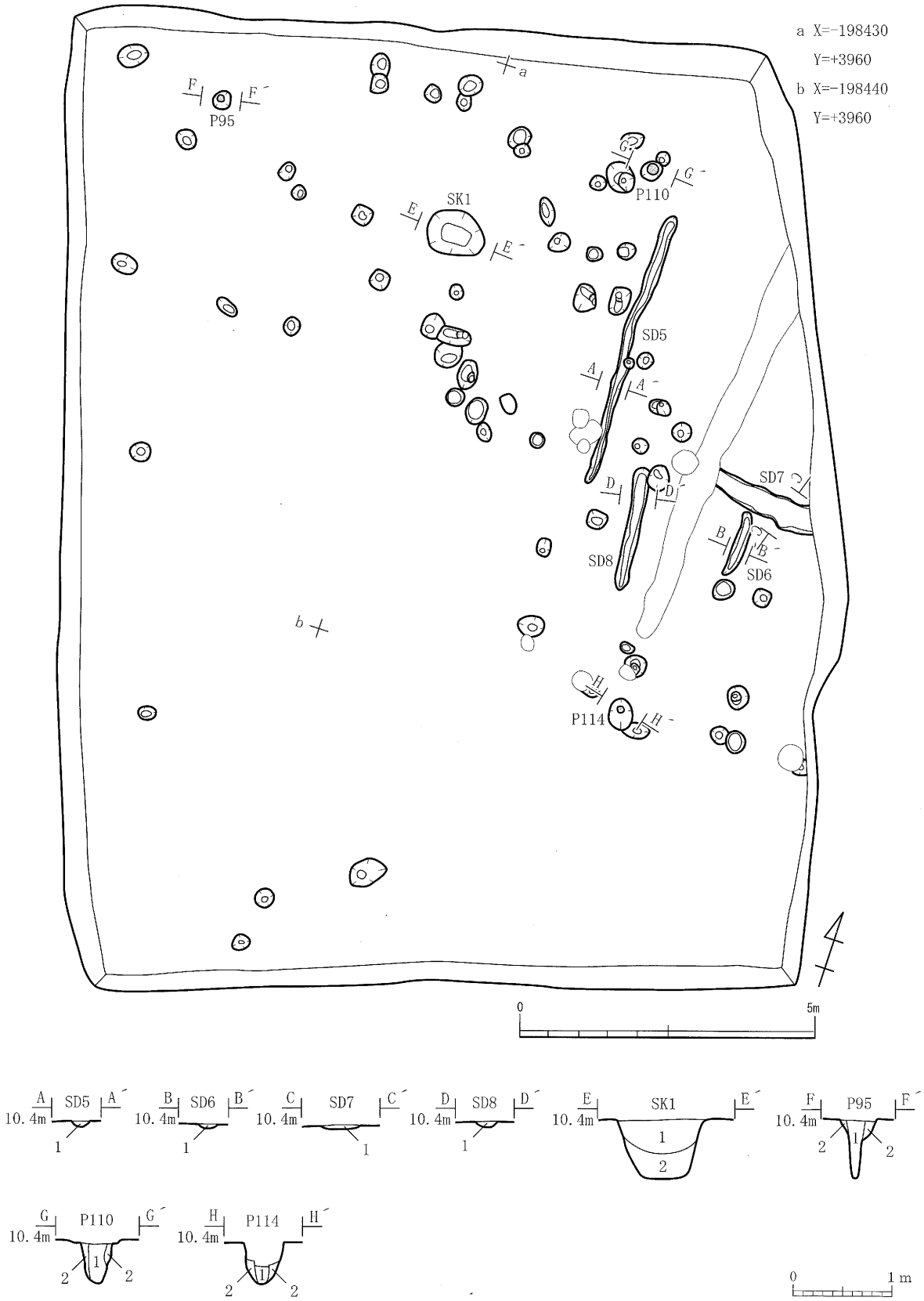
検出された溝跡４条のうち、SD5、6、8 溝跡を１群とした。

SD7 溝跡　東西方向の溝跡で、東部は調査区外に延びている。SD5 溝跡より古い。規模は上端幅 52cm、下端幅 45cm、深さ 4cm である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

SD5、6、8 溝跡（第２群）　南北方向の溝跡である。規模は、上端幅 20～26cm、下端幅 10～16cm、深さ 6～8cm である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

2）土坑

SK1 土坑　調査区の北部で検出された。規模は長軸 100cm、短軸 80cm、深さは 60cm で、平面形は楕円形である。断面形は船底形で、堆積土は黒褐色粘土質シルト、灰黄褐シルトの２層に分かれる。遺物は、１層から土師器坏が２点出土した。第８図１は、底部が丸底で体部はやや内湾しながら外傾し口縁部に至るものである。外面の底部は手持ちケズリ、口縁部にはヨコナデと一部にミガキが施される。内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。体下部には沈線によるわずかな段が見られる。底部には交差する３本の直線がヘラ描きされている。２は口唇部を欠失するが、底部が平底で、体部はやや内湾して外傾する。体下部には沈線によるわずかな段を持つ。外面の口縁部はヨコナデ、内面はヘラミガキ、内外面に黒色処理がされている。1・2 とも、体下部に沈線によるわずかな段があり、器形全体が扁平である。長町駅東遺跡（仙台市教委 2008）や郡山遺跡Ⅱ官衙期遺構出土土器（仙台市教委 2005 b）に類例が見られ、８世紀前半を中心とする年代が与えられる。



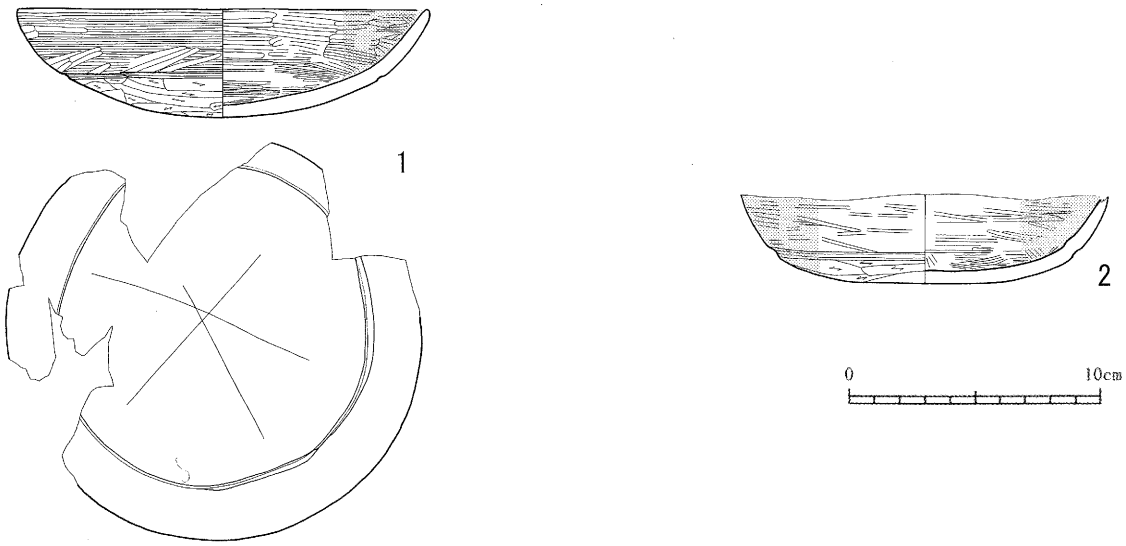
第７図　Ⅴ層上面遺構平面図・断面図

V層上面検出遺構土層注記表

遺構名	堆積土	土　色	土　性	備　考
SK1	1	10YR3/1黒褐	粘土質シルト	酸化鉄粒少量含む。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック中量含む。
SD5	1	10YR4/2灰黄褐	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック多量、酸化鉄粒少量含む。
SD6	1	10YR3/1黒褐	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック多量、酸化鉄粒少量含む。
SD7	1	10YR4/2灰黄褐	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐ブロック少量含む。
SD8	1	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/3にぶい黄褐、10YR3/1黒褐ブロック少量、酸化鉄粒微量含む。
P95	1	10YR3/1黒褐	粘土	柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒微量含む。柱掘り方。
P110	1	10YR3/1黒褐	粘土	酸化鉄粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。
P114	1	10YR4/2灰黄褐色	粘土	柱痕跡。
	2	10YR4/1褐灰	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色ブロック、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方。

3) ピット

平面形は円形、もしくは楕円形で、堆積土は主に黒褐色粘土質シルト、褐灰粘土質シルトで、単層である。柱痕跡が確認されるピットが 3 個検出された。建物跡を示すような有意な配置は見られない。遺物は出土していない。



図中番号	登録番号	遺構名	出土層位	種別	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	特徴(形状・整形・調整)・時期	写真図版
8-1	C-1	SK1	1層	土師器	坏	4.3	16.2	—	外面：口縁部 ヨコナデ→ミガキ　底部 手持ちケズリ 内面：ミガキ、黒色処理	2-6
8-2	C-2	SK1	1層	土師器	坏	(3.5)	(14.5)	—	外面：口縁部 ミガキ、黒色処理　底部 手持ちケズリ 内面：ミガキ、黒色処理	2-7

第 8 図　SK1 土坑出土遺物

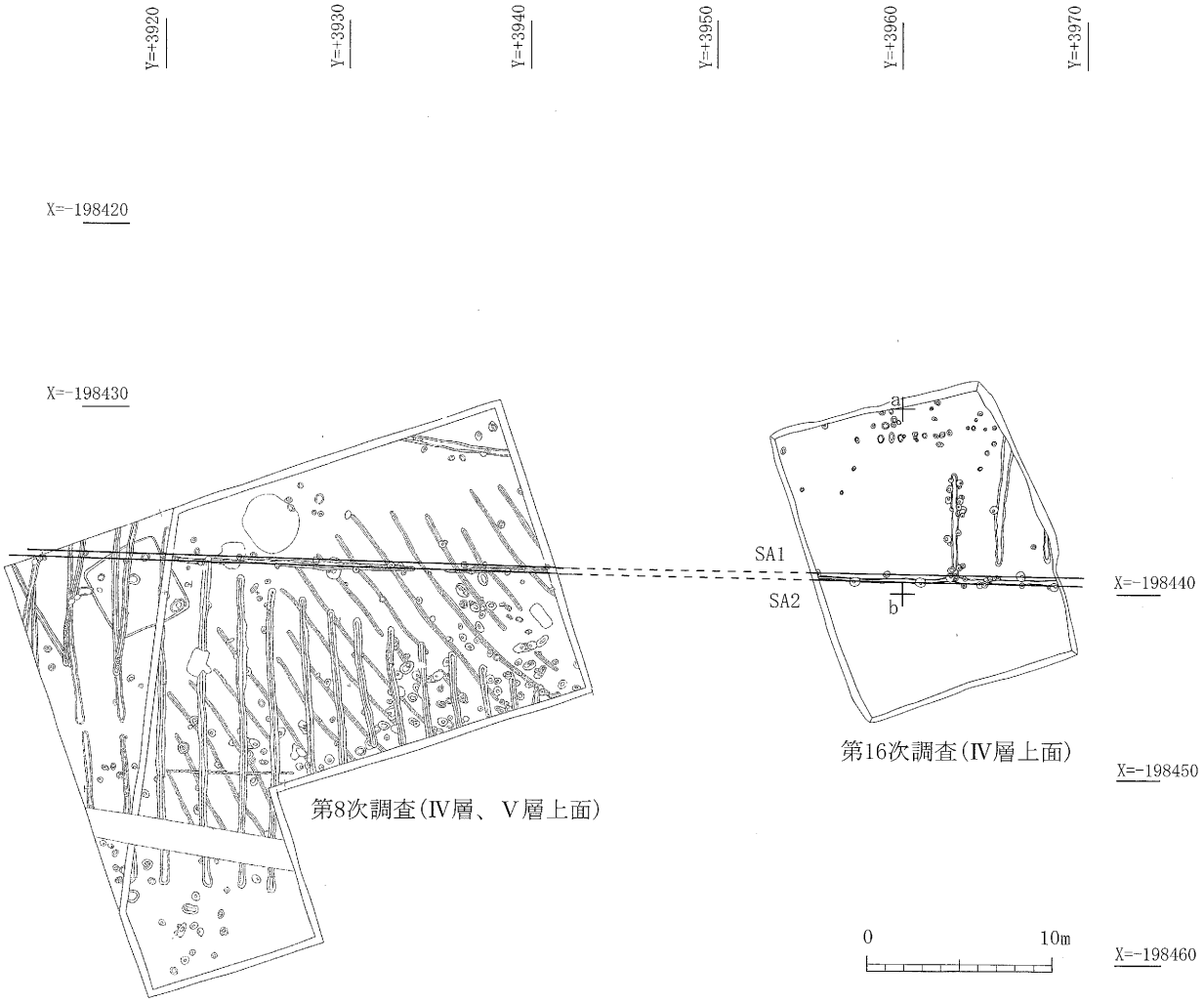
6　まとめ

①Ⅲ層上面において検出された南西～北東方向のピット列は、出土遺物がなく、性格は不明である。

②Ⅳ層上面においては、11 個の柱痕跡を有するピットが検出され、そのうち 7 個が柱列跡(SA1・SA2)を構成している。他のピットについては建物など有意な配置を示すものはなく、性格は不明である。

③Ⅳ層上面検出の SD2、SD3、SD4 溝跡、およびV層上面検出の SD5、SD6、SD8 溝跡については、遺構の規模や堆積土から、周辺で確認されている畑耕作痕と考えられる小溝状遺構と同様のものと考えられる。

④Ⅳ層上面で検出された柱列については、今回調査地点の西方で実施された第 8 次発掘調査(仙台市教委 2005 a)において、規模・方向・形状などが類似する遺構が検出されている。第 8 次調査では南北方向の小溝状遺構群に切られており、今回調査地点では SD1 溝跡→SD2 溝跡(小溝状遺構第 1 群)→SA1・SA2 柱列という新旧関係が明らかになった。柱列(SA1・SA2)と方向を同じくする溝跡(SD1)については、その性格・時期について今後も検討が必要である。また、同様の柱列跡が今回調査地点の東側に位置する大野田古墳群 5A 区（平成 12 年度調査）においても検出され、この柱列跡は総長 80m 以上にも及ぶ遺構であり、さらに東西に延びるものと想定される。



第9図　SA1、2柱列跡と第8次調査検出柱列跡との対応関係
(仙台市文化財調査報告書第290集を転載し合成)

参考文献

仙台市教育委員会2005a『大野田古墳群 - 第8次発掘調査報告書 - 』仙台市文化財調査報告書第283集

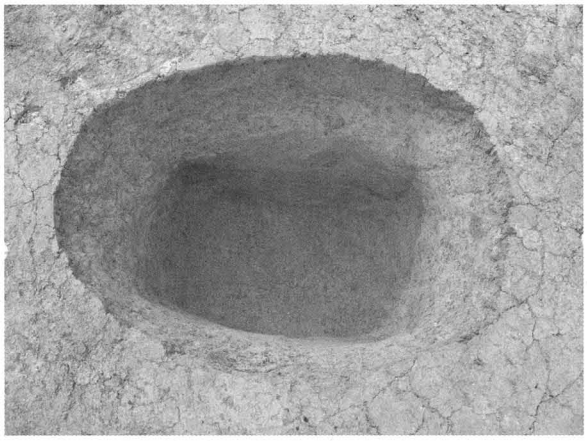
仙台市教育委員会2005b『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編』仙台市文化財調査報告書第283集

仙台市教育委員会2008『長町駅東遺跡 - 第1、2次調査 - 』仙台市文化財調査報告書第324集

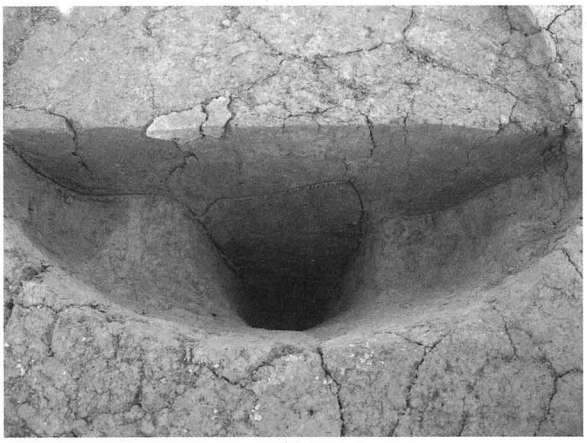
仙台市教育委員会2009『大野田古墳群 - 第14次発掘調査報告書 - 』仙台市文化財調査報告書第339集

1　Ⅲ層上面遺構完掘全景(南東から)

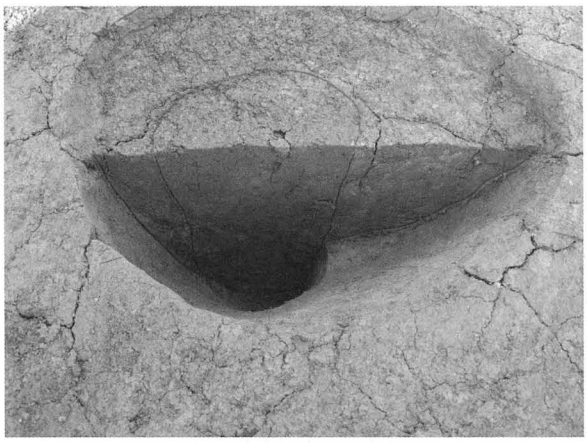
2　Ⅳ、Ⅴ層上面遺構完掘全景(南東から)



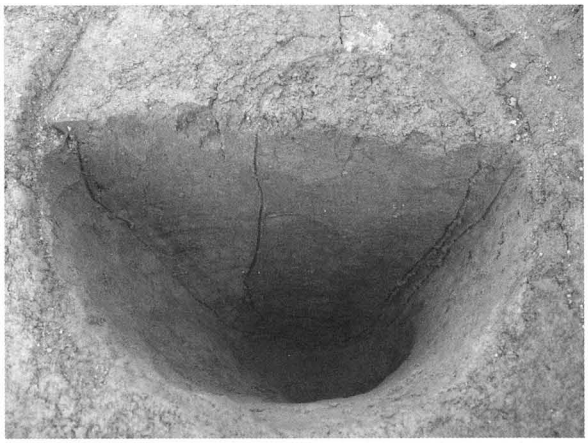
3　SK9 土坑完掘状況(北から)



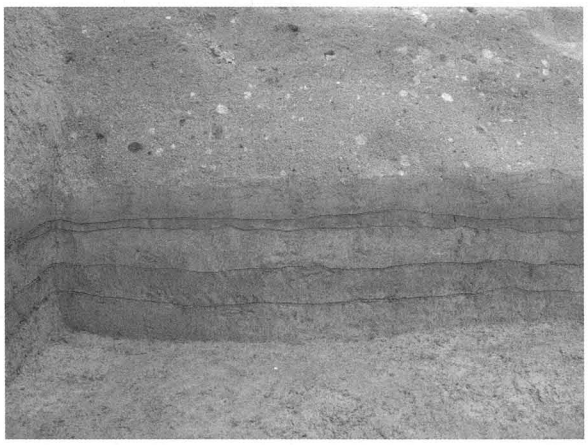
4　P54 断面(南から)



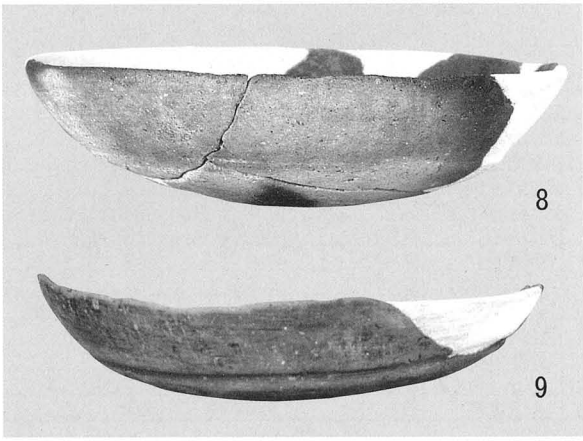
5　P56 断面(南から)



6　P127 断面(南から)



7　西壁断面(東から)



図版 1　調査区完掘・断面・検出遺構・出土遺物

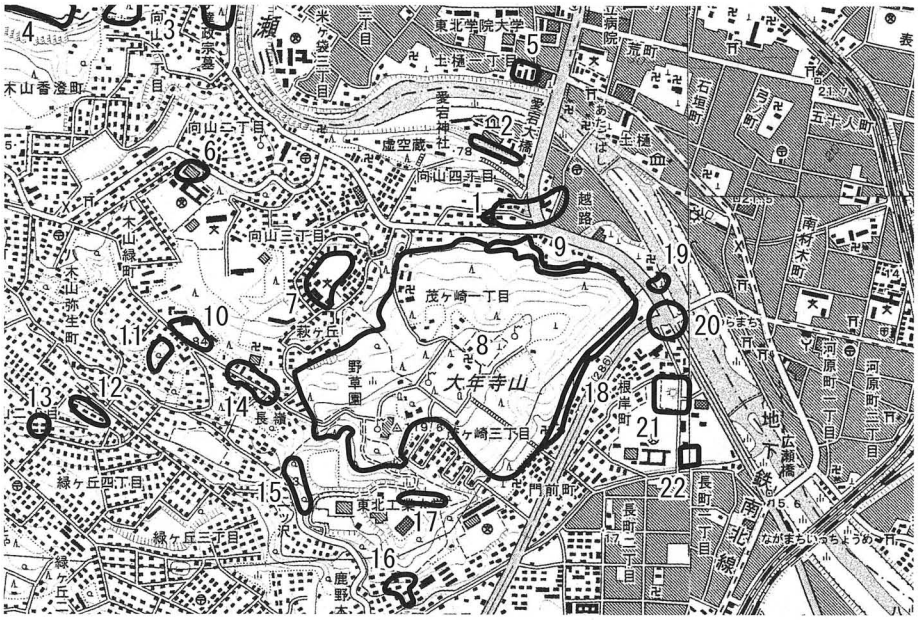
Ⅲ　愛宕山横穴墓群第5次発掘調査報告

1　調査要項

遺　跡　名	愛宕山横穴墓群（宮城県遺跡番号01196）
調 査 地 点	仙台市太白区向山四丁目93-1、93-4、86-1の一部
調 査 期 間	確認調査　　平成21年6月24日～6月26日
	本調査　　平成21年7月2日～7月16日
調査対象面積	205.35㎡
調 査 面 積	35.6㎡
調 査 原 因	貸家住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　主濱光朗　　主事　鈴木　隆　　主事　森田義史
	文化財教諭　佐々木匠　　文化財教諭　菊地貴博　　臨時職員　千葉恭彦

2　調査に至る経過と調査方法

調査は、平成21年6月19日付で、申請者より提出された貸家住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について（協議）」に対して、文化財保護法第93条（H21教生文第180－14で回答）に基づき実施した。確認調査は平成21年6月24日に着手した。調査区は5箇所の住宅建築範囲に1箇所ずつ（1～5トレンチ）、また道路部分に1箇所（6トレンチ）設定した（1トレンチ南北5m×東西2m、2トレンチ南北7m×東



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	愛宕山横穴墓群B・C地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳、奈良	12	青山二丁目遺跡	散布地	丘陵斜面	奈良、平安
2	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳	13	青山二丁目B遺跡	包含地	丘陵斜面	旧石器、縄文
3	経ヶ峯伊達家墓所	墓所	丘陵、段丘	近世	14	萩ヶ丘B遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文
4	仙台城跡	城館跡	丘陵、段丘	中世、近世	15	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
5	土樋遺跡	散布地	段丘	縄文	16	鹿野屋敷遺跡	散布地	丘陵斜面	古墳、奈良、平安
6	向山高裏遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文	17	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳、奈良
7	萩ヶ丘遺跡	散布地	丘陵	縄文、奈良、平安	18	杉土手	土手	丘陵・段丘	近世
8	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世	19	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳
9	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	20	根岸遺跡	集落	段丘	縄文
10	八木山緑町遺跡	散布地	丘陵	縄文、奈良、平安	21	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
11	二ツ沢遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文	22	小兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

西2m、3トレンチ南北6m×東西2m、4トレンチ南北7.5m×東西2m、5トレンチ南北7.8m×東西2m、6トレンチ南北6m×東西3m)。重機により盛土およびⅠ層を除去したところ、1トレンチおよび5トレンチで横穴墓と見られる遺構が確認されたため、申請者と協議し、その部分の建築範囲内において本調査を実施することとなった。なお、2、3、4トレンチでは遺構、遺物は確認されなかったため、本調査の必要はないと判断した。道路部分については、地表面から2mほど掘り下げても砂岩質の地盤が検出されず、非常に厚く盛土されていることが分かったため、埋め戻した。

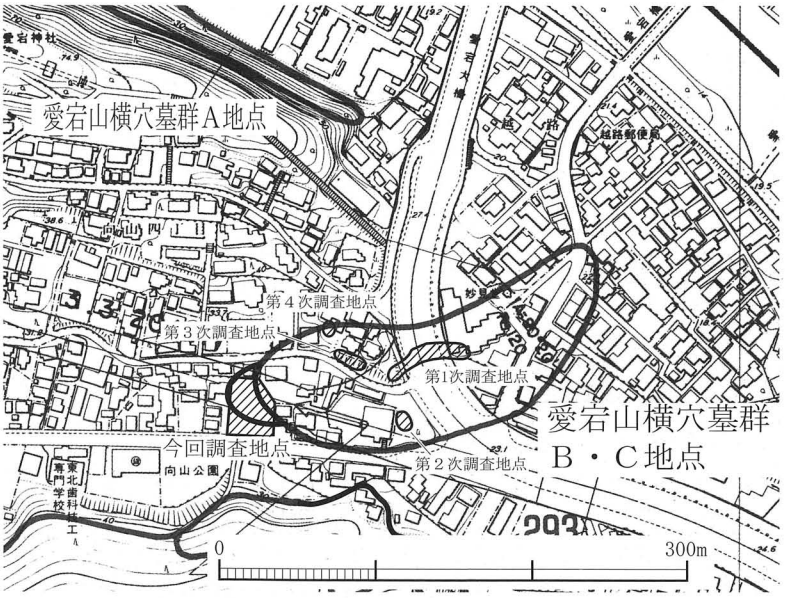
本調査では2基の横穴墓について精査したが、大部分が削平もしくは攪乱されており、玄室、玄門のみ残存し、玄室の天井はほとんど失われていた。玄室内の堆積土の掘り下げを行い、写真・図面による記録を実施した。

なお、調査成果に基づき、遺跡を西側に拡大した(H21教生文第502号で県に通知)。

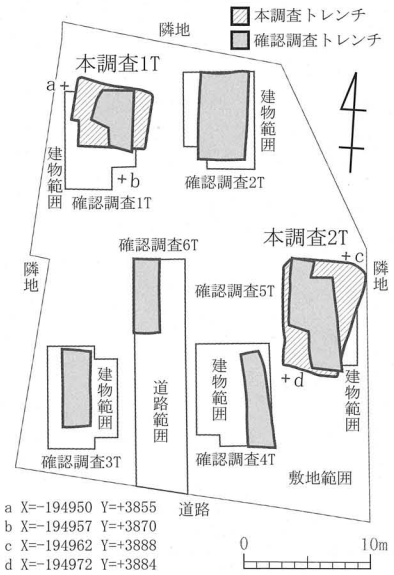
3　遺跡の位置と環境

愛宕山横穴墓群の今回調査地点は、仙台市役所より南方約2.8km、仙台市太白区向山4丁目に所在する。広瀬川右岸の愛宕山南斜面、標高25mから26mの丘陵下部に立地する。広瀬側に面する愛宕山北斜面には愛宕山横穴墓群A地点、南斜面にはB・C地点がある。また愛宕山の南には大年寺山が張り出しており、愛宕山との間にはさまれるわずかな隙間に沢状の地形が形成されている。この沢をはさんだ南側の大年寺山北斜面に大年寺山横穴墓群がある。なお、大年寺山南西斜面には茂ヶ崎横穴墓群、二ツ沢横穴墓群などがあり、愛宕山の北側、南側斜面、大年寺山の裾を取り巻くように横穴墓が造られたと推定される。

愛宕山横穴墓群は、これまでに4次に及ぶ調査が実施されている。昭和48年（1973）の第1次調査では、B地点において10基の横穴墓が調査され、人骨や須恵器長頸壺が出土した。昭和51年（1976）に道路工事中に偶然発見されたC地点では第2次調査が行われ、玄室奥壁に赤色顔料で円文と平行線、円文と十字またはT字の組み合わせの文様が描かれた装飾横穴墓を含む2基が発見された。装飾横穴墓は玄室が家形（宝形造り）で、人骨5体分と刀子が出土した。



第2図　調査地点位置図

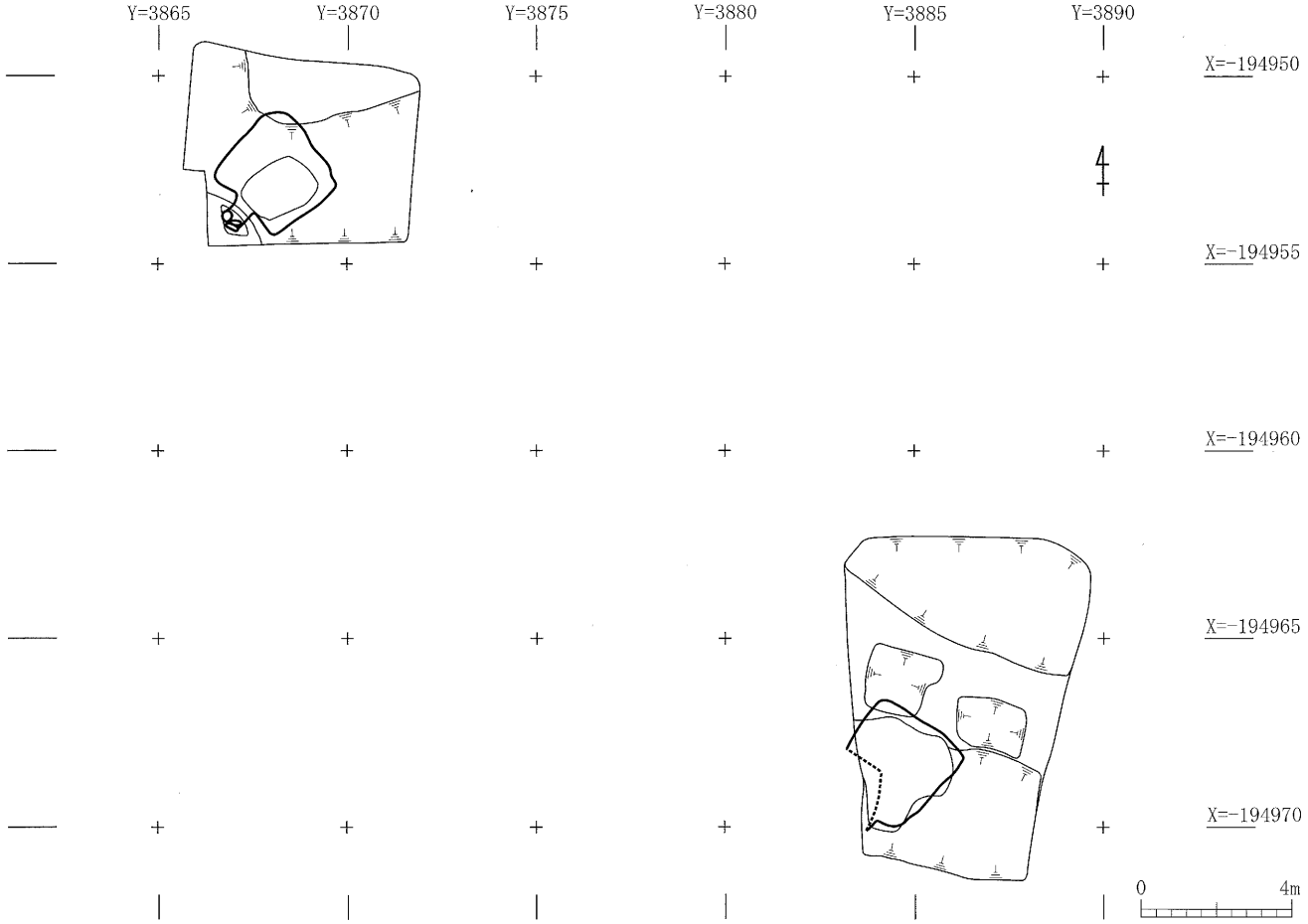


第3図　調査区配置図

また羨道から土師器坏が1点出土している。なお、この調査の際に、愛宕山北側斜面のA地点の横穴墓2基について測量が行われている。平成3年（1991）の第3次調査では、B地点において18基が確認されたが、その中には改築され玄室幅3.3mにおよぶ横穴墓も含まれていた。その西側隣接地で行われた平成9年（1997）の第4次調査では1基の横穴墓が発見され、愛宕山横穴墓群B・C地点ではこれまでに合計31基の横穴墓が発見されている。各横穴墓の形態・構造に多様性があり、横穴墓を造営した集団の違いに起因する可能性が指摘されている。なお今回調査地点は、愛宕山南側の斜面で、これまで調査された愛宕山横穴墓群B地点と西側に連続して分布しているため、B地点に含まれる。

4　基本層序

基本層は、2層確認された。Ⅰ層はにぶい黄橙色の砂質土でしまりがなく、Ⅱ層の漸移層と見られる。Ⅱ層は凝灰砂岩層で、遺構検出面である。本調査地点の盛土は、5～15cmの厚さがある。



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR7/4にぶい黄橙色	砂質層	7.5YR6/8橙ブロック多く含む。
Ⅱ	2.5Y8/2灰白色	（砂岩）	岩盤層。

第4図　調査区配置図および遺構配置図

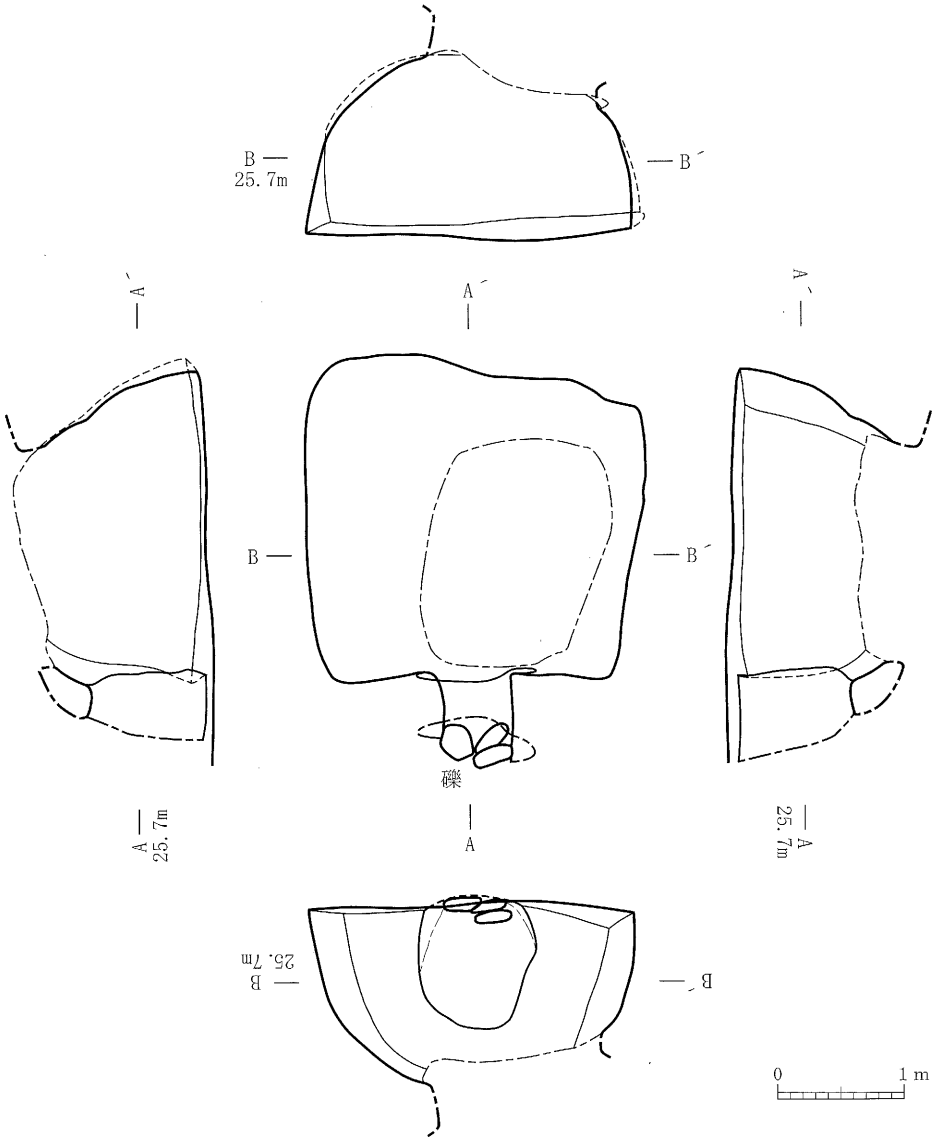
5　発見遺構と出土遺物

１トレンチ、２トレンチのⅡ層上面で横穴墓がそれぞれ1基検出された。

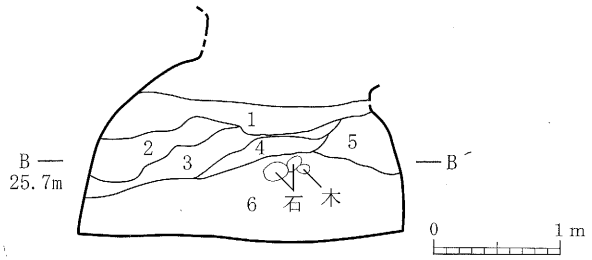
(1) Ⅱ層上面検出遺構

1）横穴墓

第1号横穴墓　１トレンチ南西において検出され、玄室床面の標高は24.96m～25.14mである。削平され天井部の失われた玄室が残存する。玄室は平面形はほぼ正方形で、幅2.06m～2.45m、奥行2.70m、高さ1.45m以上のアーチ形である。中軸線の方向はおおむねN－45°－Eである。玄室内には、1～6層の堆積土が確認されたが、全て過去の造成工事の際流入したと判断された。この堆積土中には天井の崩落土か、もしくは玄室内の壁が剥離したものと考えられる砂岩ブロックが確認された。玄門は玄室正面の中央に位置している。幅0.94m、奥行0.7m、高さ1mである。羨道は削平され失われているが、玄門の南側に径20～30cmの礫が検出された。この礫は玄門閉塞石である可能性がある。出土遺物はない。



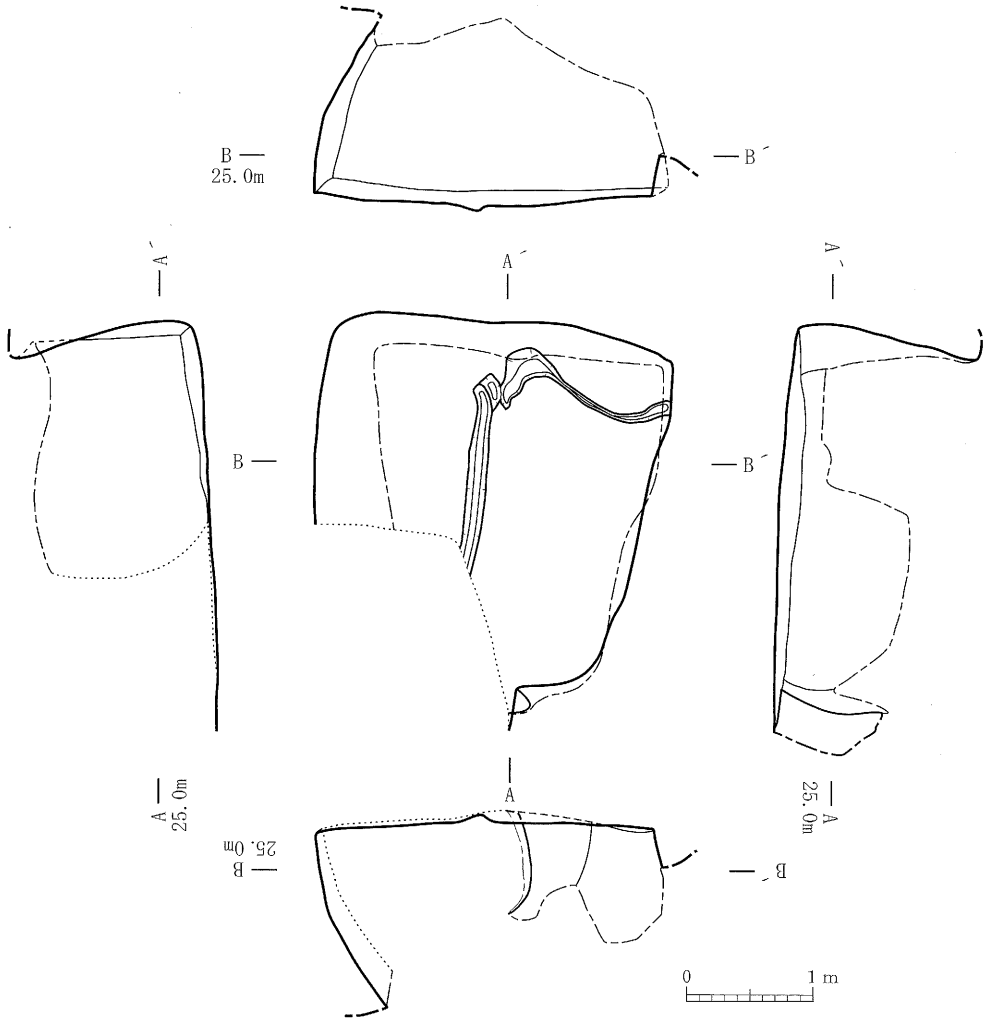
第5図　第1号横穴墓実測図



1号横穴堆積土	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	10YR3/1黒褐色ブロック、10YR7/4にぶい黄橙色ブロック少量含む。
2	10YR7/4にぶい黄橙色	砂	7.5YR6/8橙ブロック多く含む。崩落土。
3	10YR4/1褐灰色	粘土質シルト	
4	10YR5/1褐灰色	粘土質シルト	2.5Y8/2灰白ブロック少量含む。
5	10YR7/4にぶい黄橙色	砂	7.5YR6/8橙ブロック多く含む。
6	10YR6/1褐灰色	砂	ラミナ状に堆積。礫、木片含む。

第6図　第1号横穴墓　玄室内堆積土断面図

第2号横穴墓　2トレンチ南西において検出され、玄室床面の標高は24.54m～24.82mである。削平され天井部の失われた玄室が残存する。玄室は平面形はほぼ正方形で、幅2.56m～2.74m、奥行2.90m、高さ1.45m以上のアーチ形である。中軸線の方向はおおむねN－28°－Eである。玄室内の堆積土は、多量の礫と粗砂中心のもので、過去の造成工事の際流入したものと判断された。玄門・羨道は削平され、ほとんど失われている。出土遺物はない。



第7図　第2号横穴墓実測図

6　まとめ

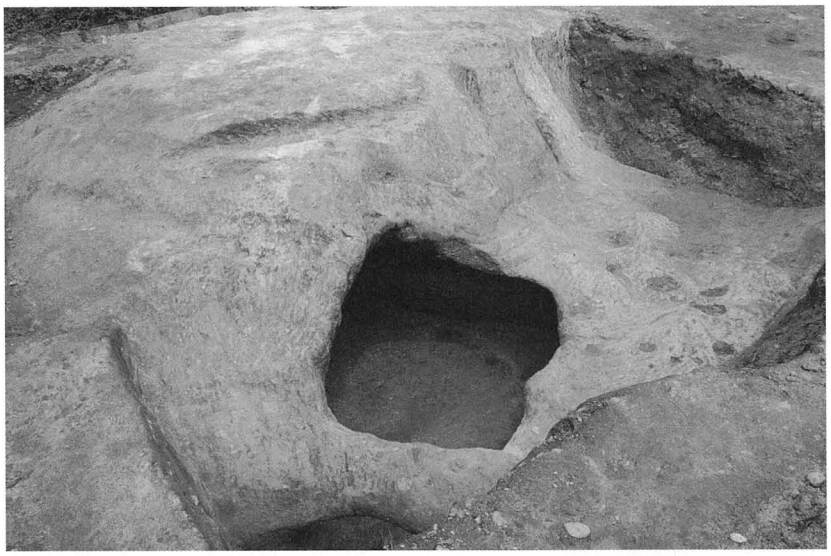
①今回の調査では、横穴墓２基を検出した。愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点における横穴墓の発見は合計33基となった。玄門はいずれも南向きで、調査地点南側に存在した大窪谷地と呼ばれた沢状の低地（現在は道路）に向けて開口していたと考えられ、大窪谷地に沿ってさらに多くの横穴墓の存在が想定される。

②調査地点の横穴墓は、愛宕山南側の斜面で、これまで調査された愛宕山横穴墓群Ｂ地点と西側に連続して分布しているため、Ｂ地点に含まれる。

③横穴墓の年代については、遺物の出土がなかったため詳細な時期は不明であるが、周辺地区の調査では概ね６世紀末に造営が開始され、８世紀前半頃まで継続していることが推定されている。今回検出された横穴墓もこの年代幅に含まれると考えられる。

参考文献

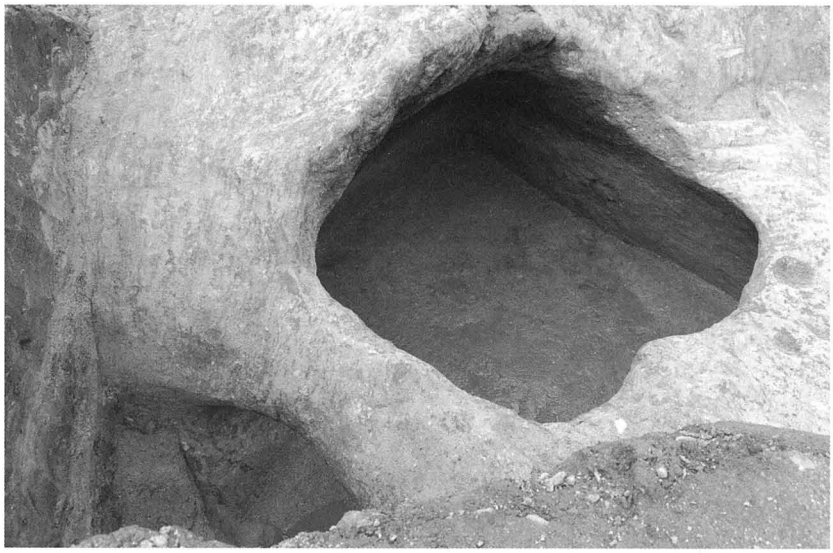
仙台市教育委員会 1985『愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第85集
仙台市教育委員会 1994『愛宕山横穴墓群－第３次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第187集
仙台市教育委員会 2007『大年寺横穴墓群－平成18年度調査－』仙台市文化財調査報告書第311集
宮城県教育委員会 1990『大年寺横穴墓群』宮城県文化財調査報告書第136集



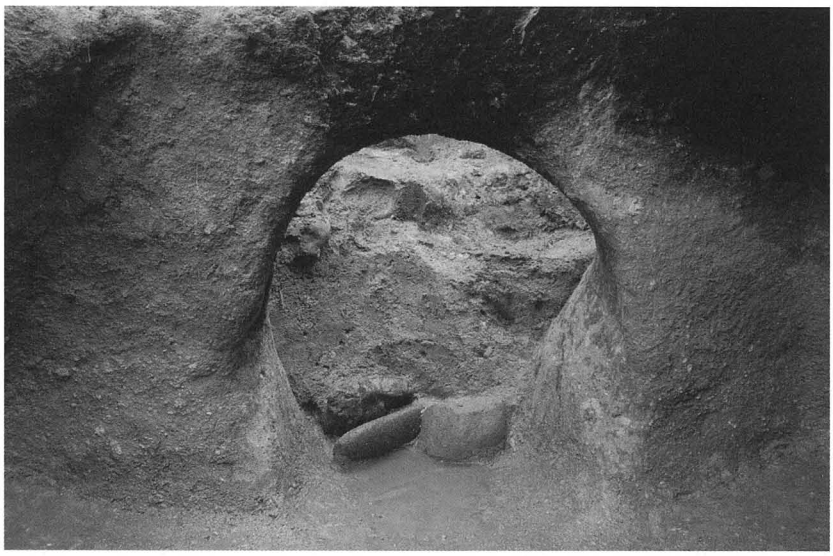
１　１トレンチ全景（南西から）

２　２トレンチ全景（南から）

図版１　１トレンチ・２トレンチ全景



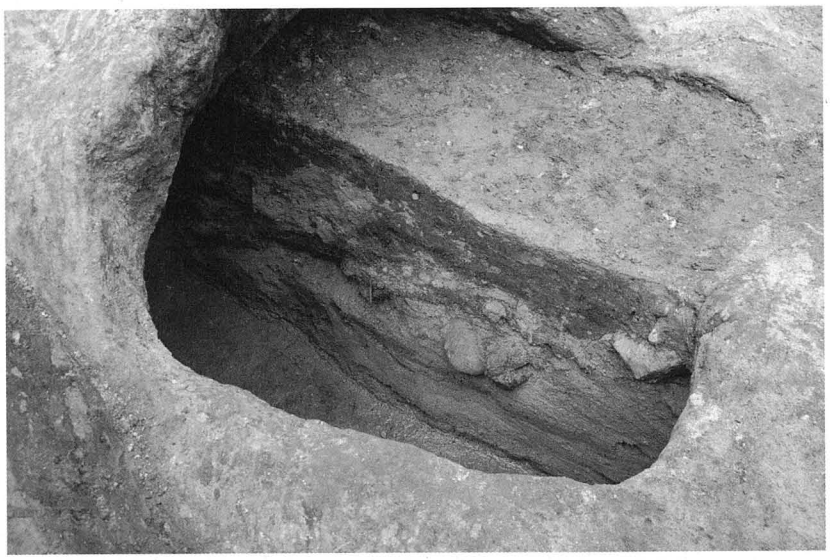
1　第1号横穴墓玄門および玄室(南から)



2　第1号横穴墓玄門(北西から)

3　第1号横穴墓奥壁（南西から）

図版2　第1号横穴墓(1)



1　第１号横穴墓堆積土断面（南から）

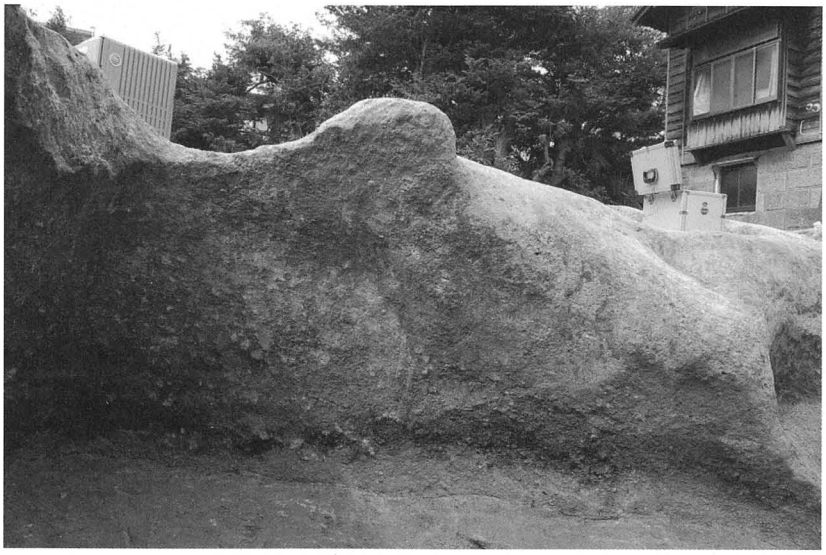
2　第２号横穴墓玄門および玄室（南から）

3　第２号横穴墓玄門（北東から）

図版３　第１号横穴墓(2)・第２号横穴墓(1)

1　第2号横穴墓玄門
　　および玄室床面(北から)

2　第2号横穴墓玄室床面(南から)



3　第2号横穴墓奥壁(南から)

図版4　第2号横穴墓(2)

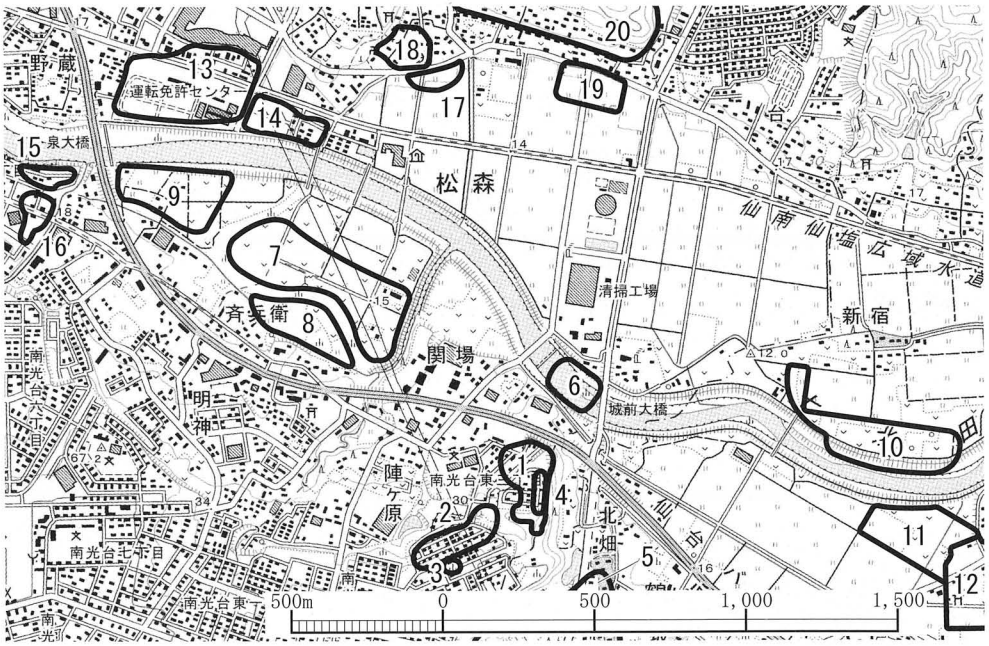
Ⅳ　住吉遺跡第2次発掘調査報告

1　調査要項

遺　跡　名	住吉遺跡（宮城県遺跡番号19007）
調 査 地 点	仙台市宮城野区鶴ヶ谷北二丁目8－1外
調 査 期 間	平成21年10月26～30日
調査対象面積	18311.80㎡
調 査 面 積	235㎡
調 査 原 因	宅地造成工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事　鈴木隆　主事　森田義史　臨時職員　千葉恭彦

2　調査に至る経過と調査方法

調査は、平成21年9月1日付で、申請者より提出された、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」に対して、文化財保護法第93条（H21教生文第180-13号で回答）に基づき実施した。確認調査は平成21年10月26日に着手した。調査区は遺跡範囲内および近接地において1.5～2m×10～18mのトレンチを7箇所設定した。遺跡の

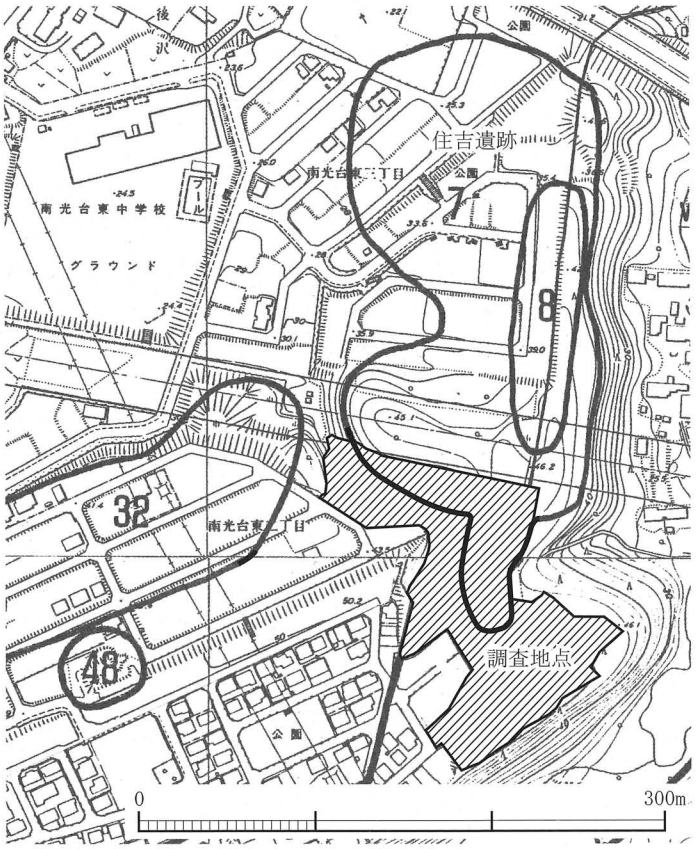


番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	住吉遺跡	包含地、屋敷	段丘	縄文、近世	11	岩切畑中遺跡	集落、包含地	自然堤防	縄文～近世
2	長岫遺跡	集落	丘陵	縄文、弥生、古代	12	稲荷館跡	城館	自然堤防	中世
3	松森焔硝蔵跡	散布地、火薬	丘陵	縄文、古代、近世	13	鹿島遺跡	集落	自然堤防	平安
4	住吉塚群	塚	段丘	不明	14	竹之内遺跡	集落	自然堤防	奈良、平安
5	笹森城跡	城館	丘陵	中世	15	境A遺跡	散布地	沖積地	古代
6	宝堰遺跡	散布地	沖積地	縄文・弥生・平安	16	境B遺跡	散布地	段丘	縄文
7	館遺跡	散布地	沖積地	古代、中世	17	岡本前遺跡	散布地	沖積地	縄文、古代
8	新庄遺跡	散布地	自然堤防	平安	18	本町遺跡	散布地	段丘	縄文
9	上河原遺跡	散布地	沖積地	古代	19	城前遺跡	散布地	沖積地	弥生、古墳、平安～近世
10	大正囲遺跡	散布地	自然堤防	平安	20	松森城跡	城館	丘陵	中世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

南方は原地形の残存が望めない状況であると推測されたため、2m×2mトレンチを5箇所設定した。重機によりⅠ、Ⅱ層を掘削し、Ⅲ層上面を精査の後一部土層観察のためⅣ層まで掘り下げた。写真・図面で記録を取り、調査を終了した。調査終了後、埋め戻しを行った。(1トレンチ＝13×2m　2トレンチ＝17×2m　3トレンチ＝10×1.5m　4トレンチ＝12×1.5m　5トレンチ＝12×1.5m　6トレンチ＝2×19＋42m　7トレンチ＝12×2m　8～12トレンチ＝2×2m)

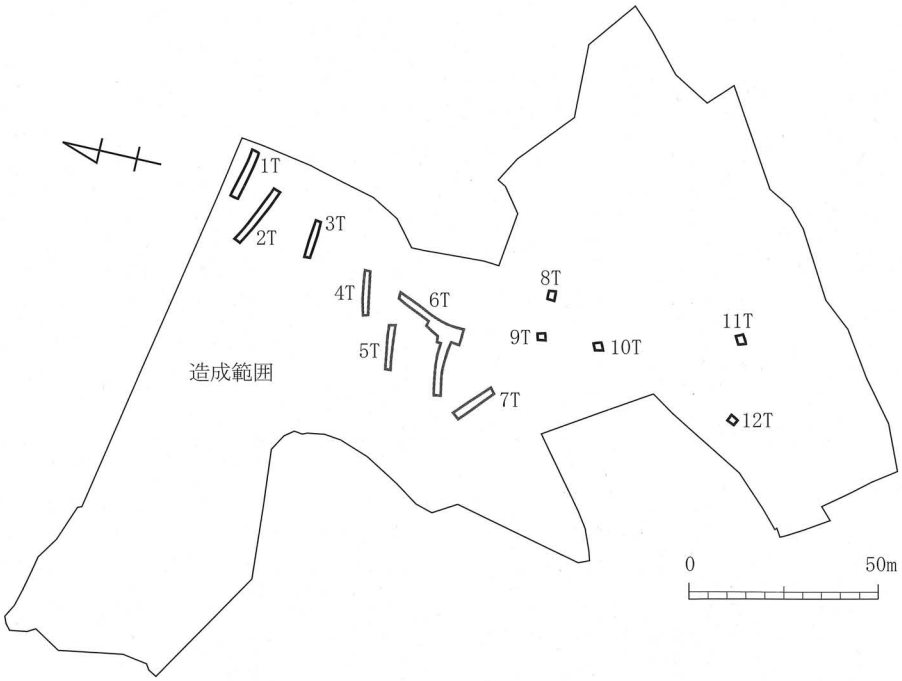
なお調査成果に基づき、住吉遺跡の範囲を南側に拡大した(H21教生文第919号で県に通知)。



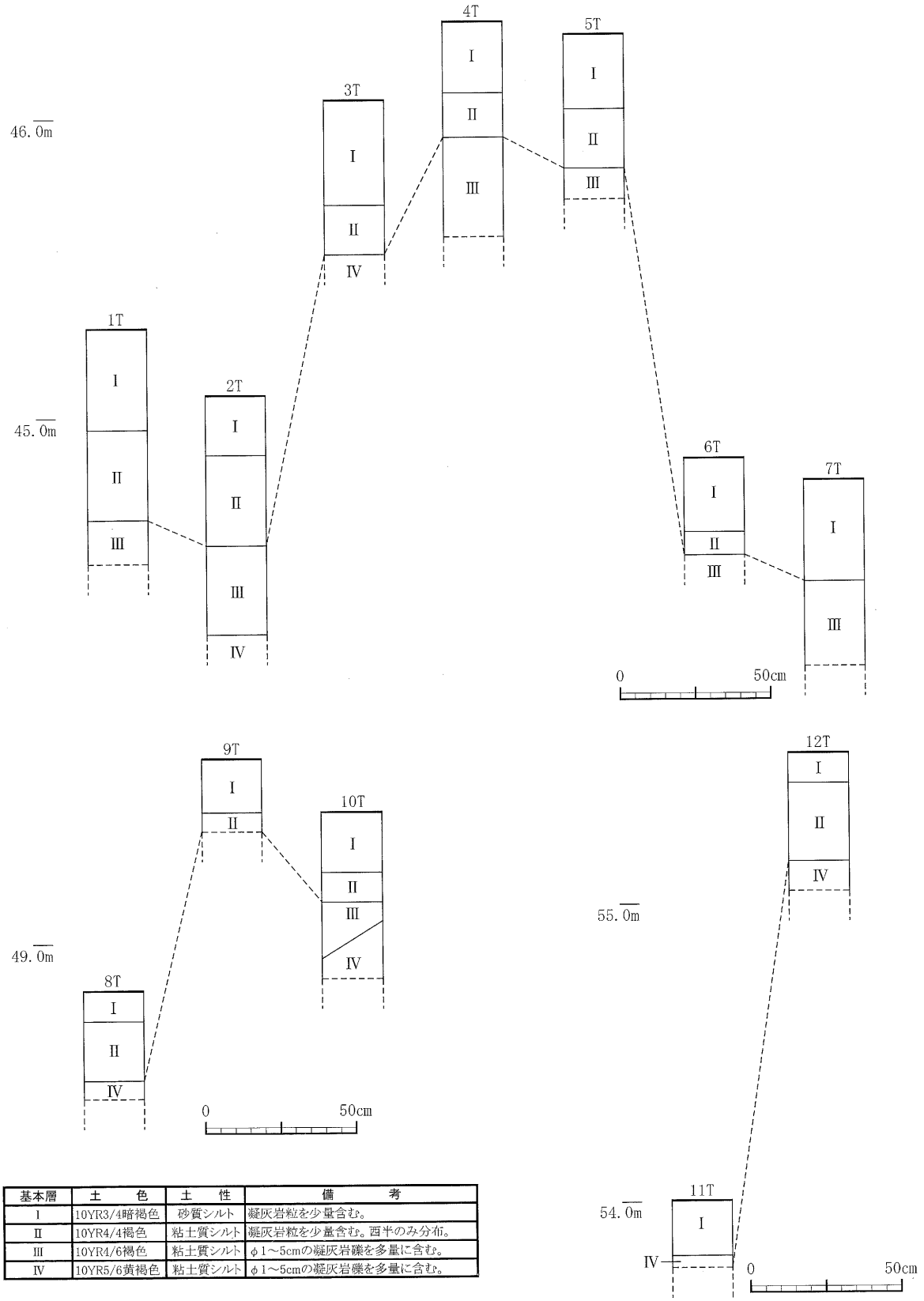
第2図　調査地点位置図

3　遺跡の位置と環境

住吉遺跡は、泉区役所の南東約4.3kmに位置し、七北田丘陵東端の小丘陵上に立地している。標高は45～55mである。東側には縄文時代晩期末の住居跡が検出された長岫遺跡が隣接している。本遺跡では昭和59年度の調査時に、縄文時代早期の素山式土器が出土している。また隣接する長岫遺跡でも、昭和59年度の調査で縄文時代早期末から前期初頭の竪穴遺構、晩期末の竪穴住居、弥生時代の土坑などが検出された。また古代の竪穴住居が検出され、国分寺下層式と表杉ノ入式の土師器の他、同時期の須恵器坏が出土している。また本遺跡内に所在する住吉塚群は未調査ではあるが古墳や中近世の一里塚の可能性が考えられる。同じ丘陵上には『仙台領古城書上』に記載のある笹森城跡や江戸時代に創建された松森煙硝蔵跡も所在する。笹森城跡からは、遺構は確認されないものの、天王山式期の弥生土器も一定量出土している。南東部の丘陵上には古墳時代前期の住居跡や多賀城創建期の瓦が発見されている燕沢遺跡が所在している。このように本遺跡周辺には縄文時代以降近世に渡る各時代の遺構・遺物が少なからず見られる。



第3図　調査区配置図



基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	凝灰岩粒を少量含む。
Ⅱ	10YR4/4褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。西半のみ分布。
Ⅲ	10YR4/6褐色	粘土質シルト	φ1～5cmの凝灰岩礫を多量に含む。
Ⅳ	10YR5/6黄褐色	粘土質シルト	φ1～5cmの凝灰岩礫を多量に含む。

第4図　調査区基本層柱状図

4　基本層序

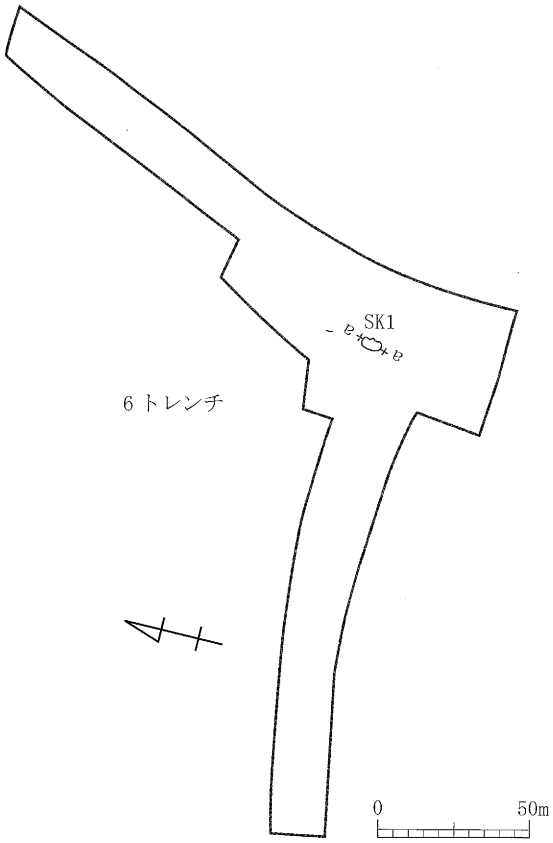
基本層は4層に大別した。Ⅰ層(表土)は20cm～40cmである。Ⅱ層は調査対象地の西側にのみ分布している。Ⅲ・Ⅳ層は基盤層で、凝灰岩粒を含む粘性の強いシルト層である。

5　発見遺構と出土遺物

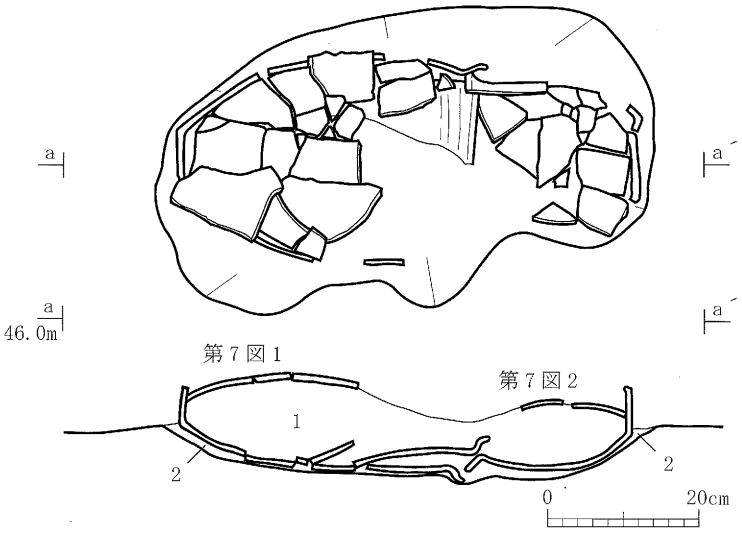
６トレンチでSK1土壙墓が検出された他は、５トレンチ表土より頁岩製の小型のポイントが１点出土したのみである。

(1)SK1土器棺墓(第5～7図)

6トレンチ中央のⅢ層上面で検出された。小型の土壙を掘り込み、合口土師器が横位に埋納されていた。実際の検出面は調査面より約10cm上位である。調査面では、土壙は合口土師器より一回り大きい約60cm×40cmの楕円形で、深さは約10cm、断面形は皿状を呈する。土壙の長軸方向はほぼ真北方向をとる。堆積層は2層からなるが、1層は土器の堆積土で、土器外の2層は人為的な埋め戻し土と考えられる。堆積土より骨片等の出土遺物はない。合口土師器は出土状況より完形の長胴の甕(第7図1)の内に、口径のやや小さい完形の短胴の甕(第7図2)を被せたもので、土壙の底面上に、土壙の長軸方向に合せ置かれている。いずれもロクロ成形の甕であり、当土器棺墓の所属年代は平安時代と考えられる。



第5図　6トレンチ遺構平面図



堆積土	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	褐色シルトを粒状に含む。土器内。
2	10YR4/4褐色	粘土質シルト	暗褐色シルトを粒状に含む。埋土。

第6図　SK1土器棺墓平面図・断面図

6　まとめ

①調査地点は、住吉遺跡の南側で、標高は35～45m付近に位置する。

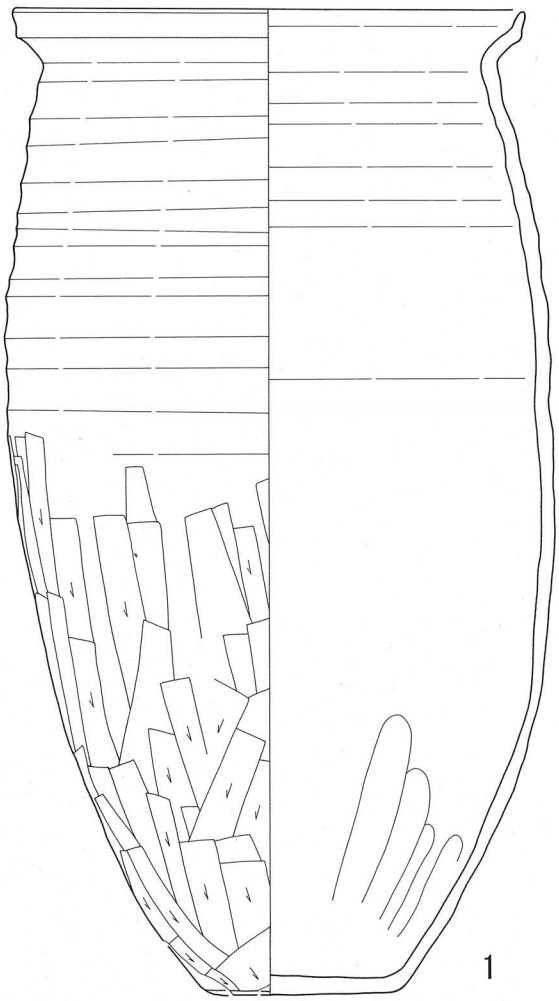
②今回の調査では、平安時代に属する合口土師器を埋納する土器棺墓が1基検出されたのみであった。県内の類例としては、多賀城市市川橋遺跡や山王遺跡等で認められる(宮城県教委2003)

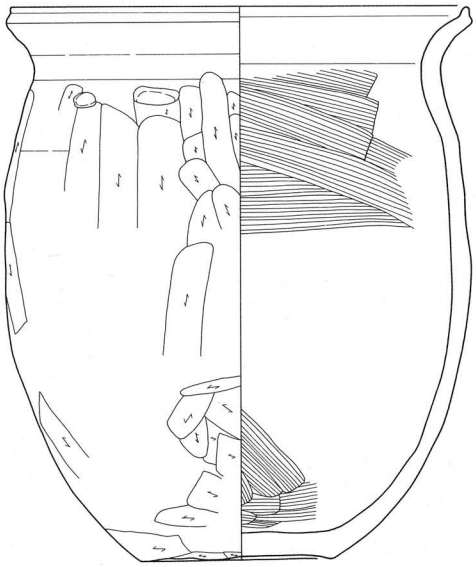
③SK1土器棺墓は周辺調査結果より単独墓であったと考られる。また合口土師器の胴部最大径及び基本層の層厚より推察すると、深さは40cm以下である。比較的浅い掘り込みと言える。

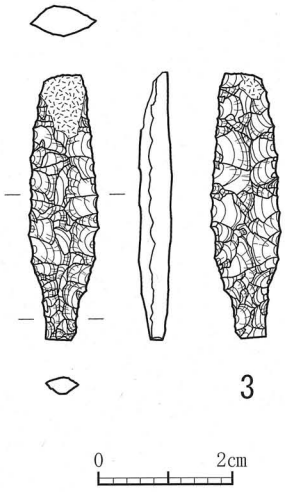
④造成で切土される部分(8～12トレンチ)は広く調査区を設定した結果、遺構・遺物が見られない地点が多く、削平を受けていると考えられる。

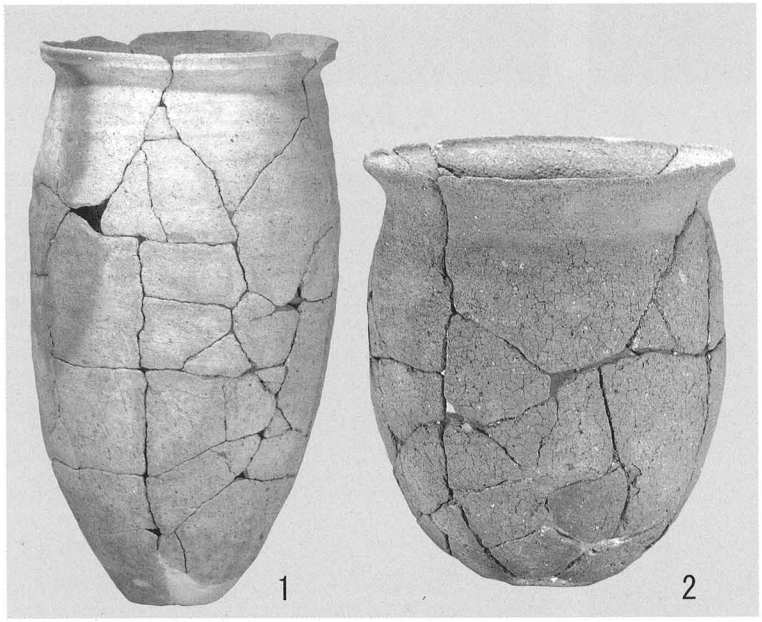
参考文献

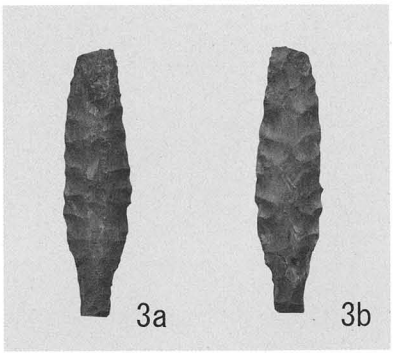
泉市教育委員会1985『長岫遺跡』泉市文化財調査報告書第4集
宮城県教育委員会2003『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集











図中番号	登録番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)		
		基本層			器高	口径	底径
	備考			写真図版	長さ	幅	厚さ
7-1	D-1	SK1	ロクロ土師器	甕	39.3	20.4	7.5
	内外面ロクロ調整、外面:ヘラケズリ、内面:ナデ			1－1			
7-2	D-2	SK1	ロクロ土師器	甕	22.1	18.2	7.5
	内外面口縁部ロクロ調整、外面:ヘラケズリ、内面:ナデ			1－2			
7-3	K-1	Ⅰ層	剥片石器	ポイント	5.4	1.4	0.6
	重さ4.6g			1－3			

第7図・図版1　出土遺物

1　1トレンチ全景　(東から)

2　2トレンチ全景(東から)

3　3トレンチ全景　(南東から)

4　6トレンチ北側検出状況(南から)

5　6トレンチ深掘断面(南から)

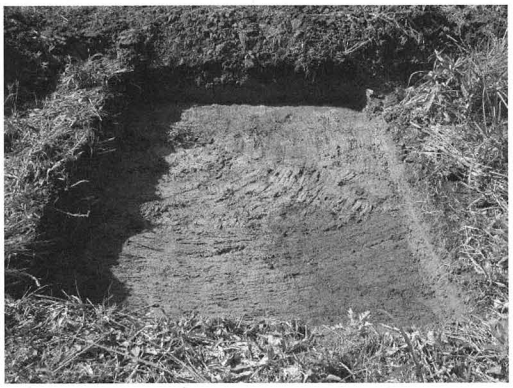
6　SK1土器棺墓(西から)

図版2　1～3・6トレンチ、SK1土器棺墓

1　4トレンチ全景(北東から)

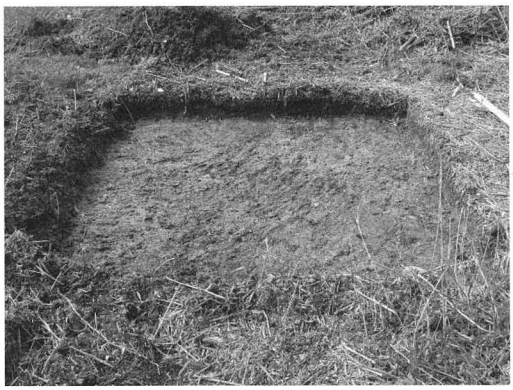
2　5トレンチ全景(東から)

3　7トレンチ全景　(南東から)



4　8トレンチ全景(東から)

5　9トレンチ全景　(東から)



6　10トレンチ全景(東から)

7　11トレンチ全景(東から)

8　12トレンチ全景　(東から)

図版３　4・5・7～12トレンチ全景

V　沖野城跡第5次発掘調査報告

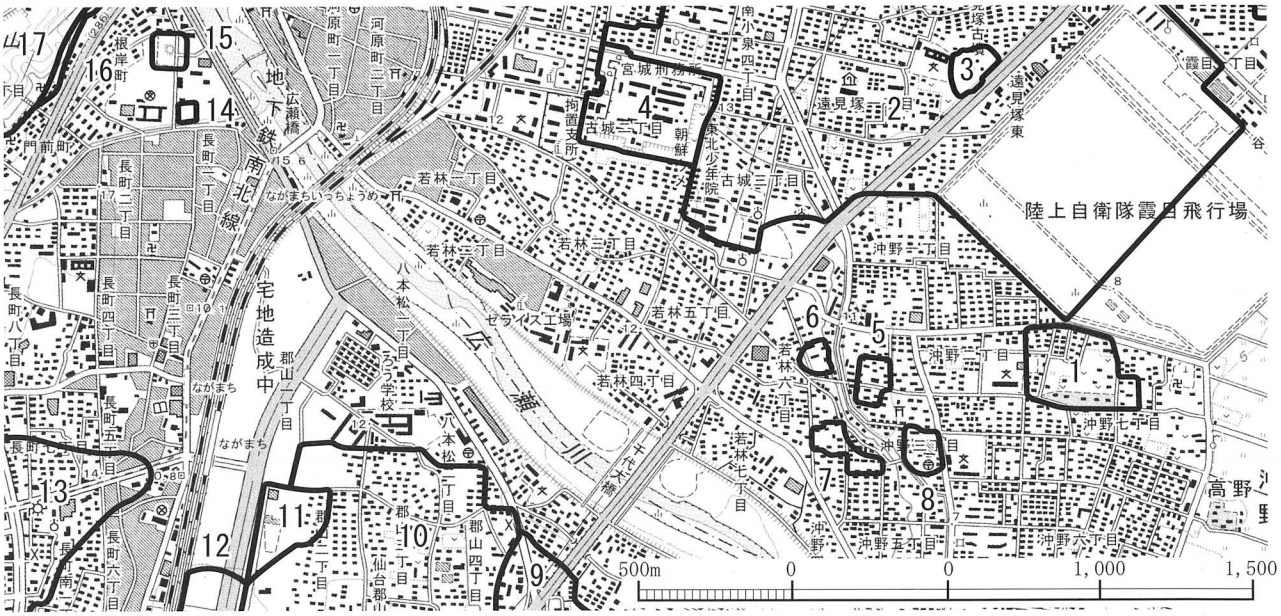
1　調査要項

遺　跡　名	沖野城跡（宮城県遺跡番号 01234）
調査地点	仙台市若林区沖野七丁目 386
調査期間	確認調査：平成 21 年 9 月 28 日～10 月 5 日
	本調査：平成 21 年 11 月 30 日～12 月 17 日
調査対象面積	1900.17 ㎡
調査面積	確認調査：292.87 ㎡
	本調査：654.79 ㎡
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	確認調査：主事　森田義史　　文化財教諭　菊地貴博　　臨時職員　千葉恭彦
	本調査：主事　小泉博明　　文化財教諭　吉野　信

2　調査に至る経過と調査方法

調査は、平成21年8月20日付で、申請者より提出された、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」に対して、文化財保護法第93条(H21教生文第180-6号で回答)に基づき実施した。確認調査は平成21年9月28日に着手した。調査区は南北3m×東西15mのトレンチを4本予定したが、1トレンチ、2トレンチで南北に延びる溝跡が検出されたため、対象範囲内において溝跡の規模等を確認する目的で3～5トレンチを設定した。重機によりⅠ、Ⅱ層を掘削し、人力で精査を行って遺構を検出した。1トレンチ北壁と3トレンチ南壁に土層断面確認のためのサブトレンチを設定し、1m程掘り下げた。その結果に基づき、申請者との協議を経て本調査を行うこととした。

本調査は、確認調査の成果に基づいて対象地内に調査区を設定し（1～3区）、平成21年11月30日に着手した。重機によりⅠ、Ⅱ層を掘削し、Ⅲ～Ⅴ層上面で溝跡、土塁跡を検出した。人力で遺構の掘り下げを行ったが、湧水と調査区壁の崩落の危険性などから、溝跡底面の検出と確認は1区のみに留めた。遺構掘削後、平面図、断面図を作成し、記録写真を撮影した。なお、対象地周縁部の擁壁設置箇所においても調査を実施し、溝跡が南北方向へさらに延びることを確認している。平成21年12月14日に調査機材を撤収し、12月17日に現場を引き渡して、すべての調査を終了した。



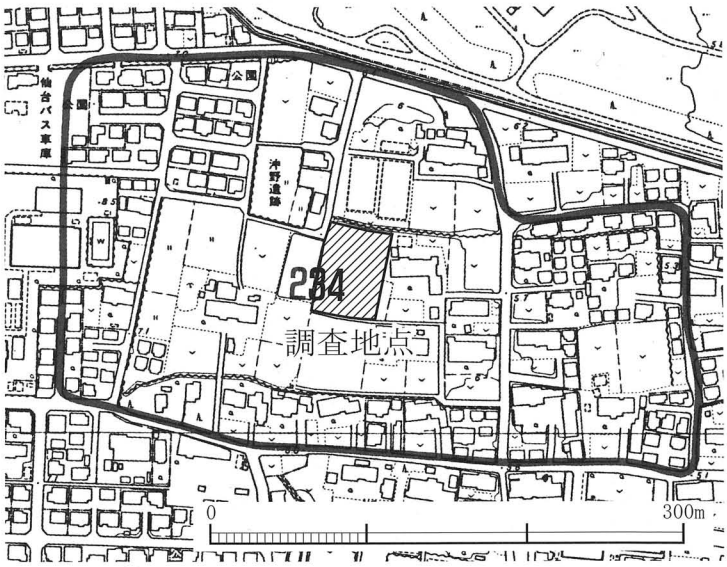
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城館	自然堤防	中世	10	郡山遺跡	官衙、寺院	自然堤防	縄文～奈良
2	南小泉遺跡	集落、屋敷	自然堤防	弥生～近世	11	西台畑遺跡	集落、墓域	自然堤防	縄文、弥生、古墳
3	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	12	長町駅東遺跡	集落	自然堤防	弥生～奈良
4	若林城跡	円墳、集落、城館	自然堤防	古墳～近世	13	富沢遺跡	包含地、水田	後背湿地	旧石器～近世
5	神柵遺跡	建物、包含地	自然堤防	奈良、平安	14	小兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
6	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	15	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
7	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	16	杉土手	土手	丘陵・段丘	近世
8	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～平安	17	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
9	北目城跡	城館、集落、	自然堤防	縄文～近世					

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3　遺跡の位置と環境

沖野城跡はＪＲ仙台駅の南東約 4.5km に位置する。西方約 3km を流れる名取川の支流広瀬川の後背湿地に立地する。周辺には縄文時代以降の遺跡が分布しており、南小泉遺跡、養種園遺跡、若林城跡では中近世の遺構・遺物も検出されている。明治時代の地籍図や昭和になってからの『六郷村沖野舘屋敷割図』などから復元された地割では主郭を中心にその周りを曲輪と堀・土塁が取り囲む平城であったことが推測されている。『仙台城古城書上』等によると粟野氏の居城で 100 間四方の規模をもっていたとされている。

本遺跡は、これまで個人住宅建設や宅地造成に伴って小規模な調査が行われてきた。昭和 60 年度の第１次調査、平成４年度の第２次調査では城館の北西部分にあたる館西地区で二重の堀跡が検出されている。調査された区画自体が一つの曲輪で、少なくとも北と東側に二重の堀があったと推定される。



第２図　調査地点位置図

4　基本層序

基本層は、大別８層、細別12層確認された。地点により土層の層厚に違いがある。以下、各層の概要を記述する。なお、各層厚は１区西半部のもので、Ⅳ層以下は水成堆積層とみられる。

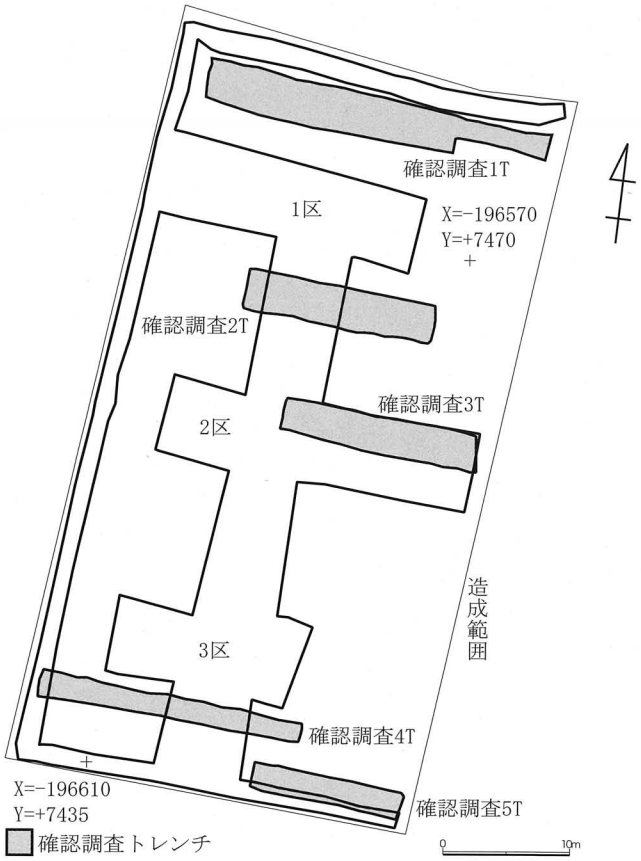
第Ⅰ層：現耕作土で、全域に分布する。均質な褐色のシルトで、層厚は25cmほどである。

第Ⅱ層：旧耕作土で、溝跡を埋め戻した後の窪地に分布する。a～dの４層に細分され、全体の層厚は最大で46cmである。

第Ⅲ層：旧表土の可能性がある黒褐色の粘土層で、層厚は8cmほどである。土塁跡は本層上面に構築されている。調査区西側にのみ残存し、東側は耕作等により削平されていると考えられる。

第Ⅳ層：均質な暗褐色の粘土層で、層厚は8cmほどである。Ⅲ層同様西側のみ残存している。

第Ⅴ層：白色粘土を斑状に含む黒色の粘土層で、層厚は27cmほどである。遺構検出は主に本層上面で行っている。



第３図　調査区配置図

第Ⅵ層：白色粘土を斑状に含む褐灰色の粘土層で、層厚は7cmほどである。

第Ⅶ層：均質な黒褐色の粘土で、層厚は14cmほどである。

第Ⅷ層：a・bの２層に細分される。a層はにぶい黄褐色の砂質シルトもしくはシルトで、層厚は80cmほどである。b層はグライ化した砂質シルトで、灰色の粘土をラミナ状に含んでいる。全体の層厚は1m以上である。

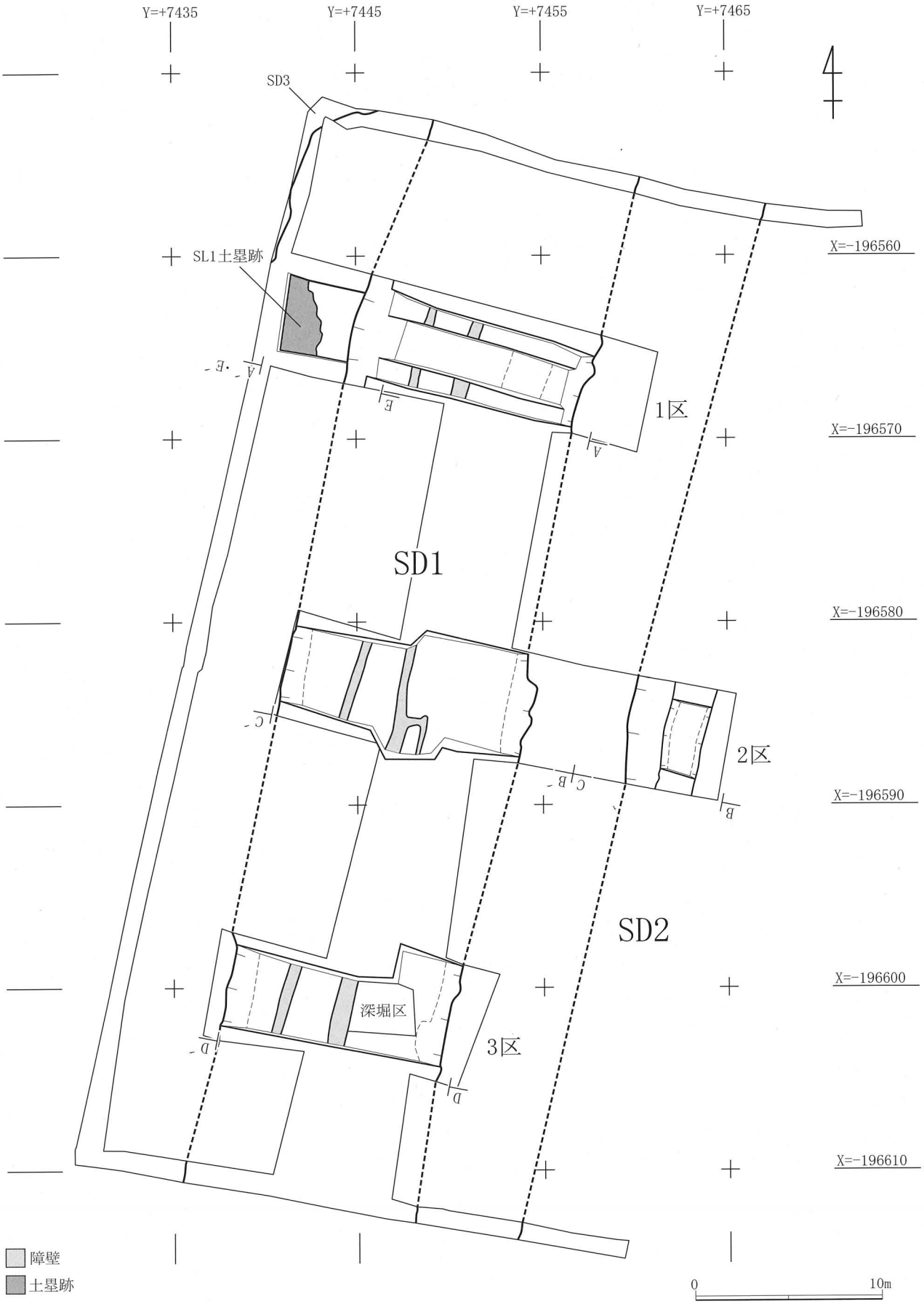
5　発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡３条、土塁１条が検出された。SL1土塁跡は現耕作土の直下、Ⅲ層上面で確認される。SD1～3溝跡はⅤ層上面で検出されているが、Ⅲ・Ⅳ層が削平されているため、本来の掘り込み面は不明である。なお、SD1、２溝跡の調査は湧水と調査区壁の崩落の危険性などから、底面の検出と確認を一部に留めている。

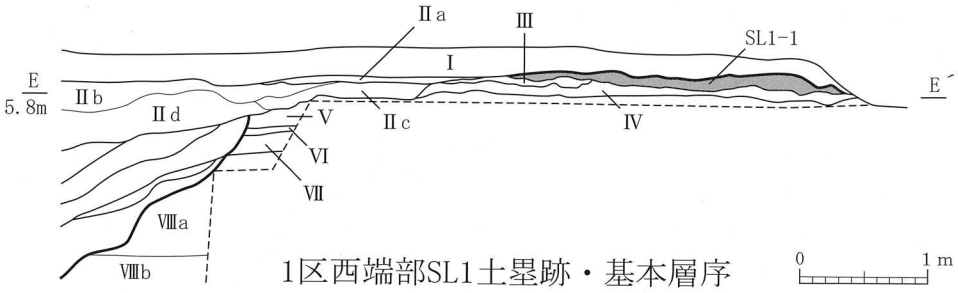
(1) Ⅲ層上面検出遺構

1）土塁跡

SL1土塁跡　１区西端部で検出した南北方向の土塁跡で、SD1溝跡と平行しているものとみられる。検出長は約5.30mで、さらに調査区外へ延びるが、対象地北西部と南西部では検出されていない。現代の耕作のため、基底部がわずかに残存するのみで、検出幅は約1.00～2.25m、高さ数cmである。旧表土の可能性があるⅢ層上面およびⅣ層上面に黒褐色、褐灰色粘土ブロックを含む黄褐色のシルトで構築され、しまりはあまりない。構築土から遺物は出土していない。


Y=+7435
Y=+7445
Y=+7455
Y=+7465
SD3
SL1土塁跡
X=-196560
X=-196570
X=-196580
X=-196590
X=-196600
X=-196610
1区
2区
3区
SD1
SD2
深堀区
障壁
土塁跡
0
10m

第４図　遺構配置図



基本層	土　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR3/3 暗褐色	シルト	
Ⅱa	10YR3/4 暗褐色	シルト	
Ⅱb	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒をごく少量含む。
Ⅱc	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒色(10YR2/1)粘土ブロックを含む。
Ⅱd	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黒色(10YR2/2)粘土ブロックを少量含む。
Ⅲ	10YR2/2 黒褐色	粘土	
Ⅳ	7.5YR3/3 暗褐色	粘土	
Ⅴ	10YR2/1 黒色	粘土	白色粘土を斑状に含む。
Ⅵ	7.5YR4/1 褐灰色	粘土	白色粘土を斑状に含む。
Ⅶ	10YR2/2 黒褐色	粘土	
Ⅷa	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
Ⅷb	5GY6/1 オリーブ灰色	砂質シルト	グライ化。灰色(5Y5/1)粘土をラミナ状に含む。
SL1	土　色	土　性	備　　考
1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	黒色(10YR2/1)粘土、褐灰色(10YR5/1)粘土をブロック状に含む。

第5図　基本土層およびSL1土塁跡

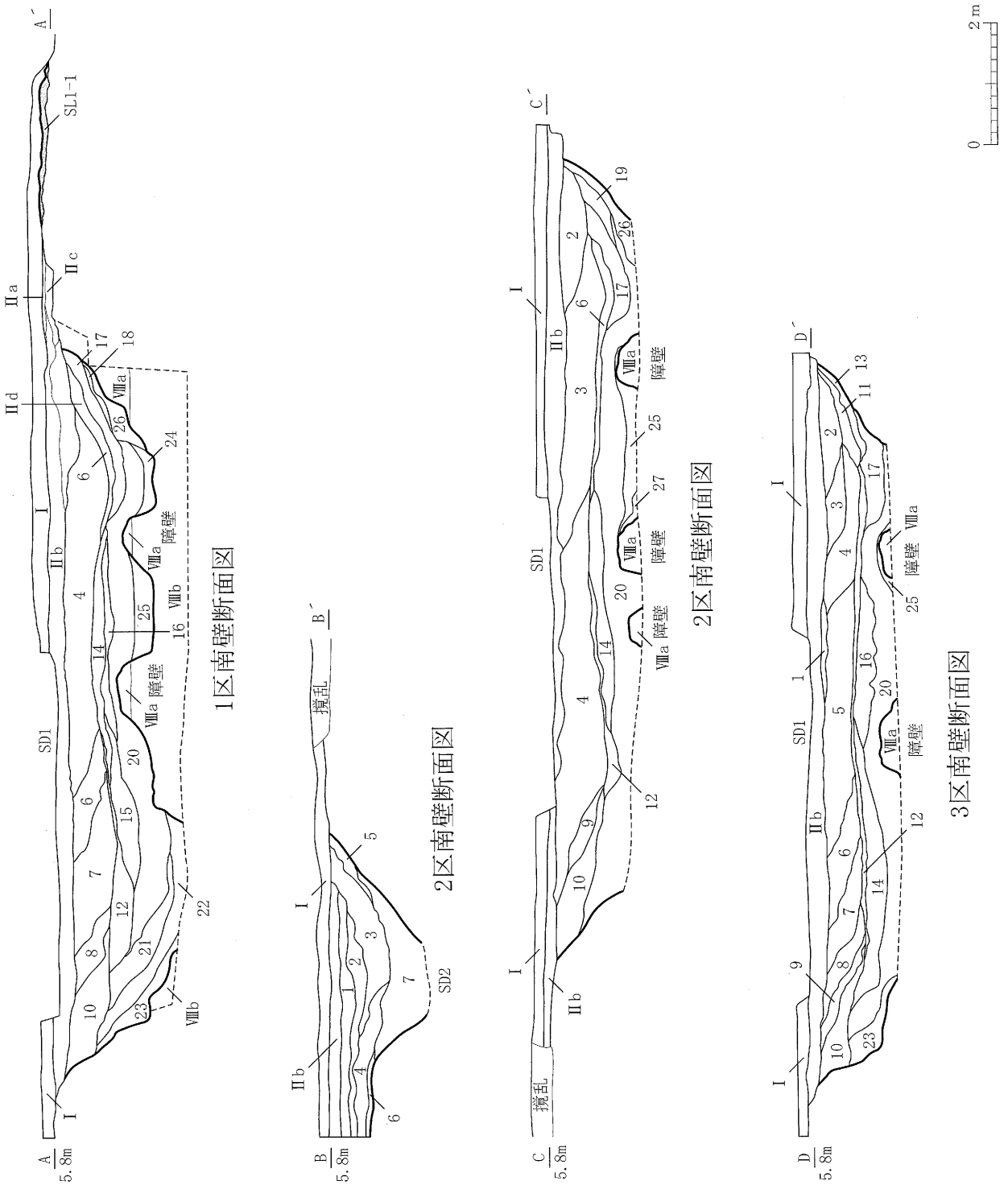
(2) Ⅴ層上面検出遺構

1) 溝跡

SD1溝跡　対象地の中央部に位置し、すべての調査区を南北方向に横断する溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長はおよそ59.80mで、さらに調査区外南北へ延びる。方向は東上端でみると、N－12°－Eである。規模は上端幅11.90～13.50m、下端幅は不明である。断面形状は不明であるが、壁はやや急に立ち上がる。底面の検出と確認は1区のみに留まったが、深さは西半部で検出面から約1.65～1.70m、東半部がやや深く、確認した底面までの深さは2.50mほどである。溝跡上端に平行するように、Ⅷ層を掘り残した障壁2条を検出した。検出幅は西障壁で45～65cm、東障壁で20～100cmほどである。1区でみると、障壁の規模は下端幅約1.20～1.70mで、高さは50～60cmほどである。断面形状は台形状を呈する。また、2区では障壁が鍵状に接続し、南へ延びることを確認した。溝跡の堆積土は27層に細分され、上部(1～11層)は主に基本層をブロック状に含む人為的埋め土であり、下部(12～28層)は植物遺体を含む粘土の自然堆積土である。遺物は出土していない。

SD2溝跡　対象地東端部に位置し、すべての調査区を南北方向に横断する溝跡である。上端で5.5～7.0mの間隔をもってSD1溝跡と平行している。他の遺構との重複はない。方向は西上端でみると、N－12°－Eである。検出長はおよそ58.20mで、さらに調査区外南北に延びる。東上端が調査区外となることから正確な規模は不明であるが、現状で上端幅は5.80m以上である。2区でみると、断面形状は西半部では逆台形を呈するとみられ、壁はやや急に立ち上がる。深さは検出面から1.60m以上である。東半部では底面は平坦で、深さは0.60mである。堆積土は7層に細分され、SD1溝跡同様、人為的埋め土と自然堆積土が見られる。遺物は出土していない。

SD3溝跡　対象地北西部で検出した北東～南西方向の溝跡である。方向は東上端でみると、N－21～70°－Eである。検出長は約11.2mで、さらに調査区外へ延びる。西半部が調査区外となることから正確な規模は不明であるが、現状で上端幅1.50m以上である。確認した堆積土は単層で、灰黄褐色の均質なシルトである。遺物は出土していない。


1区南壁断面図
2区南壁断面図
2区南壁断面図
3区南壁断面図
障壁
撹乱
SD1
SD2
SL1-1
A
A´
B
B´
C
C´
D
D´
5.8m
0
2m

第６図　調査区断面図

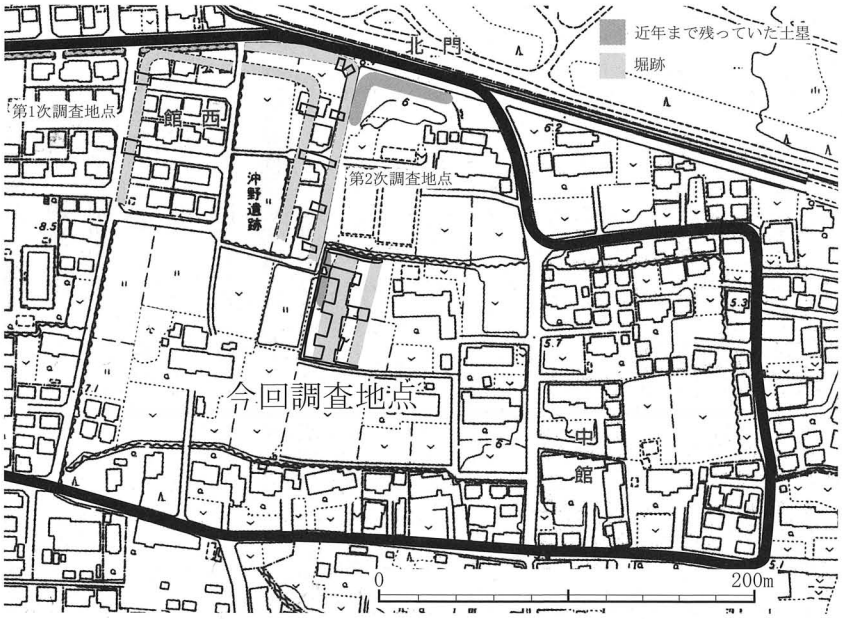
SD1 溝跡・SD2 溝跡土層観察表

遺構名	堆積土	土　色	土　性	備　　考
SD1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルト、黒褐色(10YR3/1)の粘土を粒状に含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルトのブロックを多く含み、黒褐色(10YR3/1)の粘土の粒を含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルトのブロックを多く含み、黒褐色(10YR3/1)の粘土のブロックを若干含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルト大ブロックと黒褐色(10YR3/1)の粘土の大ブロックを多く含む。
	5	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルト小ブロックと黒褐色(10YR3/1)の粘土大ブロックをやや多く含む。
	6	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルトブロックと黒褐色(10YR3/1)の粘土の大ブロックを若干含む。
	7	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトブロック主体、黒褐色(10YR3/1)の粘土の大ブロックを含む。
	8	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/1)の粘土の小ブロックを少量含み、にぶい黄橙色(10YR6/4)のシルトの小ブロック・粒を若干含む。
	9	2.5Y4/1 褐灰色	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/1)の粘土ブロックを含む。
	10	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	均質。
	11	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	均質。
	12	7.5Y3/2 黒褐色	粘土	細い枝状の遺物遺存体と有機物の植物遺存体層。
	13	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	枝状の植物遺存体を少量含む。
	14	7.5Y3/3 暗褐色	粘土	黒褐色(10YR3/2)の粘土と有機物の植物遺存体の互層、枝状の植物遺存体含む。
	15	7.5Y3/2 黒褐色	粘土	有機質の植物遺存体との互層。枝状の植物遺存体も少量含む。
	16	7.5Y4/1 褐灰色	粘土	暗灰黄色(2.5Y5/2)の細砂と黒褐色(10YR3/1)の粘土を斑状に含み、にぶい黄褐色(10YR5/3)のシルトブロックも少量含む。
	17	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	壁崩落土(にぶい黄褐色(10YR5/3)のシルトと黒褐色(10YR3/1)の粘土をブロック状に含む。
	18	2.5Y2/1 黒色	粘土	有機物の植物遺存体をラミナ状に少量含む。
	19	10YR4/1 褐灰色	粘土	壁崩落土(10YR5/3にぶい黄褐色)をブロック状に含み、黒色(10YR2/1)の粘土の小ブロックを少量含む。
	20	7.5Y3/3 暗褐色	粘土	有機質の植物遺存体主体層。枝状の植物遺存体も含む。
	21	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	グライ化したシルトブロック(5GY6/1オリーブ灰色)を多く含み、巨大な円礫も含む。
	22	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	枝状の植物遺存体を少量含む。
	23	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	有機質の植物遺存体をラミナ状に含む。
	24	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土	黒褐色(2.5Y3/1)の粘土との互層。
	25	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	有機質の植物遺存体をラミナ状に含む。
	26	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトブロックを少量含む。
	27	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	障壁の崩落土を多く含む。
SD2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトのブロックを少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)のシルトと黒褐色(10YR3/1)の粘土をブロック状に少量含む。
	3	10YR4/3 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)のシルトと黒褐色(10YR3/2)の粘土を大ブロック状に多く含む。
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	黒褐色(10YR3/2)の粘土質シルトを含む。
	5	10YR3/4 暗褐色	粘土	黒褐色(10YR2/2)の粘土を小ブロック状に少量含む。
	6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをブロック状に少量含む。
	7	7.5Y3/2 黒褐色	粘土	有機物の植物遺存体、枝状の植物遺存体を含む。

6　まとめ

①沖野城跡は名取川左岸に形成された標高 7m前後の自然堤防上に立地する。今回の調査地点は沖野城跡の中央部に位置する。宅地造成工事に関わる遺跡地内において、確認調査および本調査で、溝跡３条、土塁跡１条を検出し、このうち、SD1、2 溝跡、SL1 土塁跡が沖野城に関連する遺構とみられる。

②SD１溝跡は上端幅 11.90～13.50m、深さ 2.50mほどで、SD2 溝跡は上端幅が 5m以上であり、いずれの溝跡も堆積土上部は人為的埋め土、下部は植物遺存体を含む粘土の自然堆積層で、堆積の状況は類似している。



第７図　これまでの調査で確認された堀跡と土塁

堆積土中から遺物が出土していないことから、それぞれの溝跡の掘削や埋没の年代、新旧関係については不明である。

③SL1 土塁跡は、基底部がわずかに残存するのみであるが、その存在を明らかにできた。位置や方向から SD1 溝跡と関わり、調査区北側にかつて確認されていた土塁跡の可能性がある。

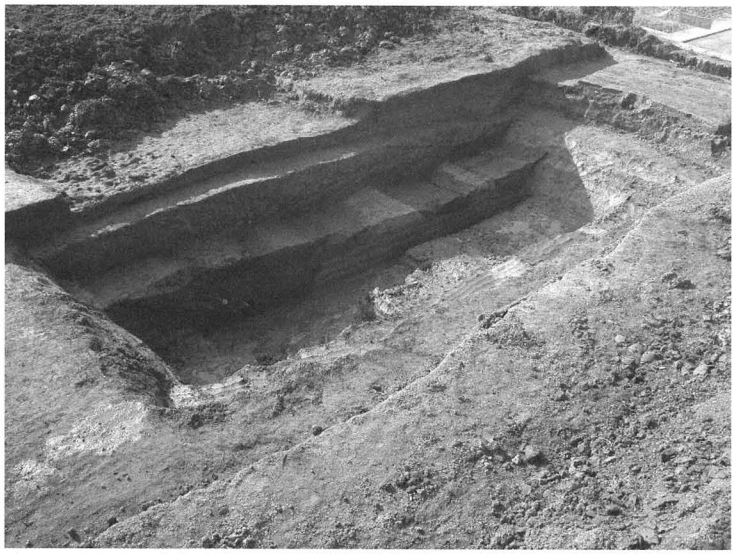
④SD1 溝跡は、その規模や底に障壁が確認される点で、北目城跡(仙台市教委 1995)で検出された堀跡に類例が求められる。北目城跡では堀底から 16 世紀後半の陶磁器類が出土し、天正 19 年に伊達政宗の腹心、屋代景頼が城主となることなどから障壁を伴う堀の掘削年代を16世紀後半から17世紀初頭に位置づけている(仙台市史編さん委員会 2006)。SD1 溝跡の掘削年代についても同様に考えられるかは、今後の課題としたい。

⑤今回の調査で検出された SD1・SD2 溝跡が、これまでの調査で検出されている溝跡とは規模や様相が異なることから、沖野城内部の別区画の可能性が考えられる。土塁跡の展開も含めて、今後の周辺の調査成果をあわせて検討していきたい。

参考文献

仙台市教育委員会 1986『年報 7』仙台市文化財調査報告書第 94 集
仙台市教育委員会 1995『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第 197 集
仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史　特別編 7　城館』

1　対象地全景(北東から)



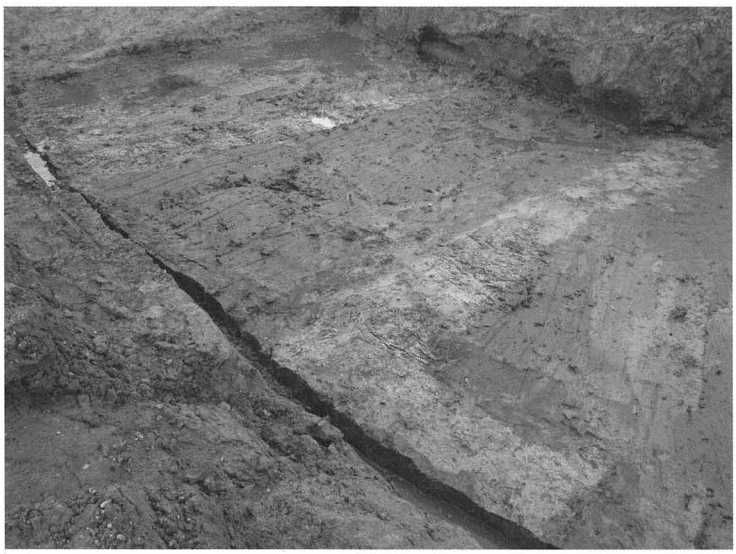
2　1区 SD1 溝跡全景(北東から)

3　1区 SD1 溝跡西半部断面(北から)

図版1　対象地全景・1区 SD1 溝跡

1　１区 SL1 土塁検出状況（南から）

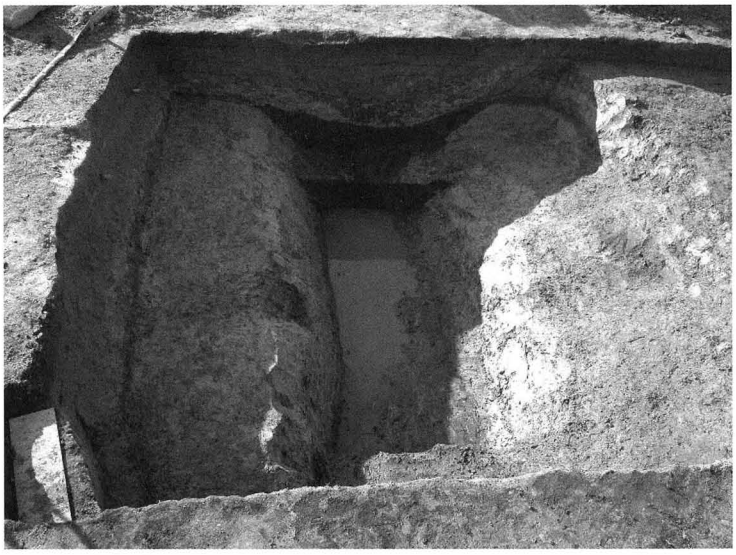
2　２区 SD1 溝跡全景（北東から）



3　２区 SD1 溝跡障壁検出状況（南東から）

図版２　SL1 土塁跡・２区 SD1 溝跡

1　2区 SD1 溝跡断面(北西から)



2　2区 SD2 溝跡全景(北から)

3　2区 SD2 溝跡断面(北から)

図版3　2区 SD1 溝跡・SD2 溝跡

1　3区SD1溝跡全景(北東から)

2　3区SD1溝跡断面(北西から)

3　1区SD1溝跡作業状況(北西から)

図版４　3区SD1溝跡・作業状況

報告書抄録

ふりがな	うわのいせきほか
書　　名	上野遺跡ほか
副　書　名	発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第372集
編著者名	主濱光朗　鈴木隆　小泉博明　森田義史　大久保弥生　佐々木匠　菊地貴博　吉野信　千葉恭彦
編集機関	仙台市教育委員会
所　在　地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区二日町１－１　　電話　022-214-8894
発行年月日	平成22年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
上野遺跡 （第９次）	仙台市太白区富田字上野中～上野西地内	04100	010202	38° 12′ 32″	140° 51′ 04″	2008・10・14 2008・11・11	150㎡	下水道埋設
大野田古墳群 （第16次）	仙台市太白区大野田字宮脇	04100	01361	38° 12′ 43″	40° 52′ 40″	2009・2・24 2009・3・17	180㎡	保育所移転
愛宕山横穴墓群 （第５次）	仙台市太白区向山四丁目 93-1、93-4、86-1の一部	04100	01196	38° 14′ 31″	140° 52′ 52″	2009・6・24～26 2009・7・2～16	35.6㎡	宅地造成
住吉遺跡 （第２次）	仙台市宮城野区鶴ヶ谷北二丁目 8-1外	04100	19007	38° 17′ 49″	140° 55′ 16″	2009・10・26 2009・10・30	235㎡	宅地造成
沖野城跡 （第５次）	仙台市若林区沖野七丁目386	04100	01234	38° 13′ 33″	140° 55′ 19″	2009・11・30 2009・12・14	654.79㎡	宅地造成

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野遺跡 （第９次）	集落跡	縄文	溝跡、土坑	縄文土器、石器	中期中葉の土坑群
大野田古墳群 （第16次）	古墳	古墳	柱列、溝跡	土師器	東西方向の柱列
愛宕山横穴墓群 （第５次）	横穴墓	古墳	横穴墓	なし	新たに2基の横穴墓
住吉遺跡 （第２次）	包含地、屋敷跡	縄文、近世	土壙墓	土師器、石器	平安時代の土器棺墓
沖野城跡 （第５次）	城館跡	中世	溝跡	土師器	障壁を有する堀跡

要約	上野遺跡ではフラスコ状土坑や焼け面、ピットが検出された。東側調査区の土坑群は出土土器から縄文時代中期中葉の年代が与えられ、集落の貯蔵域が今回調査地点まで広がっていたことが明らかになった。西側調査区の焼け面やピットは3次調査の遺構群との関連が想定される。
	大野田古墳群では3期の遺構面が確認された。そのうちⅣ層上面では東西に延びる二条の柱列が検出された。東西の調査区でも同様の遺構が確認され、総長80m以上に及ぶものであると考えられる。
	愛宕山横穴墓群では新たに2基の横穴墓が検出され、愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点における横穴墓は33基となった。出土遺物はなく、時期は不明である。
	住吉遺跡では平安時代の土師器甕を合わせ口にした土器棺墓１基が検出され、遺跡の範囲が拡大された。
	沖野城跡では、初めて底部に障壁を有する溝跡が検出された。出土遺物はないが、検出幅13mに及ぶ規模と方向から城に関連する堀跡と考えられる。

仙台市文化財調査報告書第372集

上野遺跡他
発掘調査報告書

2010年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区二日町1-1
文化財課 TEL 022（214）8894

印刷　株式会社仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14
TEL 022（231）2245